

津阪東陽『杜律詳解』 訳注稿 (五)

二宮俊博

本稿には、津阪東陽『杜律詳解』巻下の「酬郭十五判官受」詩から「長沙送李十一衡」詩までと、それに巻末に附された津阪達の跋および小谷薫の後序とを収める。原文の送り仮名の「メ」は「シテ」に、「リ」は「コト」に、「厶」は「トモ」、「寸」は「トキ」にそれぞれ改めた。明らかに訓点が脱落していると思われる箇所には、これを補った。また詩句の左傍にところどころ附されている和訓は、※をつけて改行して示した。書き下し文は、紙幅の都合で省略する。なお、詩題の上には便宜的に通し番号を施した。

127 酬郭十五判官受

128 小寒食舟中作

129 燕子来舟中作

130 贈韋七贊善

131 寄常徵君

132 江南「雨」有懷鄭典設

133 灑澣

134 季夏送鄉弟韶陪黃門從叔朝謁

135 單山人隱居

136 宇文晁尚書之甥崔彧司業之孫尚書之子重泛鄭監前湖

137 曉發公安、數月憩息此県
138 長沙送李十一衡

127 酬郭十五判官受

公在潭州^(注1)、有^(金)詩示^(金)郭。郭因^(金)酬答^(金)、而公復酬^(金)之^(金)也。郭時^(金)爲^(金)衡陽判官^(金)。其所^(金)贈^(金)云、杜員外垂^(金)示^(金)詩^(金)、因^(金)作^(金)此寄^(金)之^(金)。新詩海内流傳遍^(金)、舊德朝中屬望勞^(金)。郡邑地卑饒^(金)霧雨^(金)、江湖天闊^(金)足^(金)風濤^(金)。松花酒熟^(金)旁看^(金)醉^(金)、蓮葉舟輕^(金)自學^(金)操^(金)。春興不^(金)知凡^(金)幾首^(金)、衡陽^(金)紙價頓^(金)能高^(金)。公^(金)詩逐一承^(金)其意^(金)、而酬^(金)答^(金)之^(金)、未^(金)許^(金)以^(金)過訪^(金)面晤^(金)也^(金)。

(注1) 今の湖南省潭州市。この詩は、大暦四年(七六九)の作。

(注2) 宋・計有功『唐詩紀事』巻二十四に「郭受、大暦間、衡陽判官^た爲^た」
と。輯註(巻十九)に挙げ、宇都宮遯庵の増広本にも引く。なお、遯庵の詳説は張遠『会粹』(巻二十二)に挙げるのを引く。衡陽は、今の湖南省衡陽市。判官は、節度使や觀察使の属僚。郭受の詩は、邵傳『集解』にも挙げるが、(松花)を(松醴)に作る。

公は潭州にあり、詩を作つて郭受到示した。郭受はそれで酬答し、公が再びこれに酬いたのである。郭受は当時、衡陽の判官であつた。

その贈る詩に、「杜員外詩を垂示し、因つて此を作つて之を寄す」として「新詩海内流伝遍し、旧徳朝中属望勞す。郡邑地卑くして霧雨饒し、江湖天闊くして風濤足る。松花酒熟して旁く酔を看、蓮葉舟輕くして自ら操ることを学ぶ。春興知らず凡そ幾首、衡陽の紙価頓に能く高からん」という。公の詩は逐一その意を承けてこれに酬答し、末尾に立ち寄り訪ねて面晤せんことを期すのである。

才微^(注3)歲晚^(注3)尚虛名 臥病^(注3)江湖春復生^(注3)

起句答^(注3)來詩^(注3)一二^(注3)、謝^(注3)榮譽過當^(注3)也。歲晚^(注3)謂老^(注3)。不^(注3)レ曰レ老^(注3)而曰^(注3)晚^(注3)者、爲^(注3)三次^(注3)句^(注3)言^(注3)春復生^(注3)也。尚^(注3)字多少^(注3)、感慨。言比^(注3)壯時^(注3)才益^(注3)微而尚傳^(注3)虛名^(注3)、勞^(注3)人^(注3)屬望^(注3)、爲^(注3)可^(注3)愧耳。次^(注3)、句答^(注3)來詩^(注3)三四^(注3)、春復生^(注3)言^(注3)病軀幸^(注3)未^(注3)死而復得^(注3)逢^(注3)春^(注3)也。

(注3)「晚」字、錢注(卷十八)および輯註は「老」に作り、「二に晩に作る」と注する。輯註は、字都宮遷庵の増広本にも挙げる。

起句は贈られた詩の第一、二句(「新詩海内流伝遍し、旧徳朝中属望勞す」)に答えたもので、称誉の行き過ぎなるを辞謝するのである。《歲晚》は、老いたること。《老》といわずに《晚》というのは、次の句に《春復た生ず》と言わんがためである。《尚》の字には、多くの感慨がある。この句の意味は、壮年の時分に比して《才》はますます《微》(衰退)する一方なのに《尚ほ》それでも《虚名》を伝え、人の「属望を勞し」(わざわざ期待を寄せられ)ているが、(期待はずれで)愧ずべきことだと思ふ、と言っているのである。次の句は贈られた詩の第三、四句(「郡邑地卑くして霧雨饒し、江湖天闊くして風濤足る」)に答え、《春復た生ず》は、《病》の身がもつけの幸いでまだ死ななければ再び《春》に逢うことができようと、言うのである。

藥裏關^(注3)心^(注3)詩總^(注3)廢^(注3) 花枝照^(注3)眼^(注3)句還^(注3)成^(注3)

藥裏關^(注3)心^(注3)、唯病^(注3)之憂也。此直^(注3)承^(注3)上^(注3)臥病^(注3)來^(注3)。詩總^(注3)

廢^(注3)スハ、一切廢絶^(注3)、無^(注3)復吟哦^(注3)也。花枝照^(注3)眼^(注3)、承^(注3)春復生^(注3)句還^(注3)成^(注3)ハ言^(注3)偶作^(注3)也。還^(注3)可^(注3)レ罷^(注3)而不^(注3)罷^(注3)之辭^(注3)。既^(注3)一切廢絶^(注3)者、還復偶成^(注3)也。此聯答^(注3)來詩^(注3)七句^(注3)。

(注4) 釈大典『詩家推敲』卷二、還の条に「可^(注3)レ罷^(注3)而不^(注3)罷^(注3)之辭ナリ」と。なお、訳注稿(5)、095「秋興八首」其三の詳解にも「還は復なり。循環して已まざるの義。因つて転じて罷ま可くして罷まざるの辭と作す」と。

《藥裏心に關る》は、ただ《病》だけを憂えるのである。これは直ちに上の《臥病》を承けて来る。《詩総て廢す》は、一切廢絶して、もはや吟詠することがないのである。《花枝眼を照す》は《春復た生ず》を承け、《句還た成る》は偶たま作ったことを言うのである。《還》は、罷むべくして罷まざるの辭。これまで一切廢絶していたものが、《還》た復た(それでも)偶たま《成る》(出来上がる)のである。この聯は、贈られた詩の第七句(「春興知らず凡そ幾首」)に答える。

只同^(注3)燕石^(注3)能星隕 自得^(注3)隨珠^(注3)覺^(注3)夜明^(注3)

荀子^(注3)宋之愚人得^(注3)二燕石^(注3)、以爲^(注3)大寶^(注3)。周^(注3)客聞^(注3)之而觀^(注3)焉。掩^(注3)口^(注3)而笑^(注3)曰、此燕石也。主人大怒、藏^(注3)之愈^(注3)固。左傳^(注3)星隕^(注3)于宋^(注3)、星隕^(注3)化^(注3)爲^(注3)石也。淮南子^(注3)隨侯見^(注3)大蛇^(注3)傷^(注3)斷^(注3)、以^(注3)藥^(注3)塗^(注3)之。夜中含^(注3)大珠^(注3)以報^(注3)。搜神記^(注3)隨珠徑寸、夜有^(注3)光明。合^(注3)用^(注3)四書^(注3)、湊巧圓成。上^(注3)句直^(注3)承^(注3)句還成^(注3)來、答^(注3)來詩^(注3)結句^(注3)、謙^(注3)言^(注3)其拙^(注3)。下^(注3)句謝^(注3)郭^(注3)所^(注3)贈^(注3)、贊^(注3)其工妙^(注3)。能^(注3)纔^(注3)能也。星隕^(注3)以^(注3)其係^(注3)石^(注3)湊合^(注3)用^(注3)之、言^(注3)光隨^(注3)滅^(注3)也。覺^(注3)三夜明^(注3)如^(注3)夜光之珠也。蓋^(注3)言^(注3)已^(注3)之詩徒^(注3)同^(注3)燕石^(注3)、識者^(注3)所笑^(注3)、如^(注3)星隕之光^(注3)、隨^(注3)時^(注3)便盡^(注3)。安^(注3)足^(注3)使^(注3)紙價^(注3)增^(注3)高^(注3)耶。郭^(注3)所^(注3)贈^(注3)之詩^(注3)則如^(注3)隨侯之珠^(注3)、覺^(注3)室中生^(注3)光輝^(注3)、豈^(注3)吾之所^(注3)ナラ^(注3)及乎。是可^(注3)以^(注3)流^(注3)傳^(注3)海内^(注3)也。

(注5)《隨》字、邵傳『集解』、錢注および輯註は《隋》に作り、輯註に「一

に随に作る」と注する。

(注6) 薛益『分類』(巻二、酬寄)に「荀子に曰く、宋の愚人燕石を梧台の側に得、之を蔵して以て大宝と為す。周客聞きて観んとす。主人齎すること七日、端冕元服して以て宝匣を發く。客之を見て俛して口を掩つて笑つて曰く、此れ燕石なり、瓦壁と等しと。主人大いに怒り、之を蔵すること愈いよ固し」と。宇都宮遯庵の両著にも引く。但し、この故事は、『荀子』には見えず、『文選』巻二十一、三国魏・応璩「百一詩」の李善注および『太平御覽』巻五一、地部十六石上に引く)に見える。なお、輯註は『韓非子』を引くが、それにも見えない。

(注7) 薛益『分類』に「左伝僖公十六年に春、石あり宋に隕つる五。隕星なり、化して石と為る」と。宇都宮遯庵の両著に挙げる。

(注8) 薛益『分類』に「淮南子の隋侯の珠の註に、漢の隋侯大蛇傷断するを見て、藥を以て伝へて之を塗る。後、蛇夜中に於いて大珠を含んで以て之を報ず」と。宇都宮遯庵の両著に挙げる。『淮南子』説林訓に「隋侯の珠」が見え、その後漢・高誘の注に「隨国は漢の東に在り。姫姓の後なり。野に出遊し、大蛇の断たれて地に在るを見る。隨侯、医をして以て断蛇を續傳し、蛇愈ゆるを得て去る。後、大珠を銜へて報ゆ。蓋し明月の珠、因つて隨侯の珠と号す。世よ以て宝と為すなり」と。

(注9) 『搜神記』巻二十に「隋侯出行するに、大蛇の傷つけられ中断するを見る。其の靈異なるを疑ひ、人をして藥を以て之を封せしむ。(中略)歳餘、蛇、明珠を銜へて以て之に報ゆ。珠径寸に盈ち、純白にして夜に光明有り、月の照らずが如く、以て室を燭す可し」と。

(注10) ちなみに、『杜律發揮』には「能ハ猶ハ為也。滄溟ニ不レ謂漢軍、能失^{セト}ハ利^ヲ亦同。一説ニ能ハ豈能也」と。滄溟は、明・李攀龍(号は滄溟。一五一四〜一五七〇)のこと。その『滄溟先生集』巻十三、七絶「王中丞を輓す」八首其一の転句。

(注11) 釈大典『杜律發揮』に「星隕用^テ春秋伝^ノ語、以係^レ于^レ石、且言^ニ其無^レ光、与^ニ下句^ニ照応^ス」。

『荀子』に「宋の愚人が燕国産の石を手に入れて、大事な宝物としていた。周からやって来た客が噂を聞いてみせてもらった。すると口を掩い笑つて、これは燕石だといった。主人は大いに怒り、これを蔵することはいよいよ嚴重であった」、「左伝」に「星あり宋に隕つ」。

星隕ちて化して石と為るなり」、「淮南子」に「隨侯大蛇の傷つき断つを見、藥を以て之に塗る。夜中大珠を含んで以て報ゆ」、「搜神記」に「隨珠は直径一寸、夜になると光る」と。四種の書を合わせ用いて、湊巧円成(うまく自然な組合せ)している。上の句は直ちに(句還た成る)を承けて、贈られた詩の結句に答え、謙遜してその拙なるのを言う。下の句は郭受から贈られたのに謝して、その巧妙なるを讃える。(能)は、纔能(どうにかこうにかできること)である。

《星隕》は、その石に関係することから湊合してこれを用い、光がすぐさま滅するのを言うのである。(夜明らかなるを覚ゆ)は、夜光の珠のようなことである。ただしここで言う意味は、自分の詩はただがらくたの《燕石》と同じで、識者に笑われよう、《星隕》の光のように、時が経つとすぐに尽きてしまふ。どうして「紙価を高める」に足りようか。郭受から贈られた詩はといえば、《隨侯の珠》のごとく、室中に輝かしい光を生ずるような気がする、いったい自分の及ぶところであろうか。「海内に流伝」できよう、というのである。

喬口^ハ橘州風浪促^ス 繫^テ帆^ヲ何^ソ惜^ハ片時程^ヲ

喬口^ハ潭州ノ地名。公有^下入^下喬口^ニ五言律詩^上。自註^ニ長沙ノ北界。凡

支水入^レ江^ニ處、皆謂^ニ之^ヲ口^ト。沔口樊口皆此類。其間有^レ洲産^ス橘^ヲ、

因^名橘洲^ト。公舟次^ニ于此^ニ。促^ハ催^也。繫^ハ帆^ハ停^舟也。此暗^ニ

答^ニ來詩^ノ後聯^ト。時^ニ公將^ニ自^レ潭入^ニレ衡^ニ、因^欲過^ニ郭^ニ一會面^ト、

故^ニ言^フ。風順^ニ浪穩^ニ、以^レ促^レ發^ス。舟^ヲ、將^下辭^ニ喬口^ニ一泝^ト赴^ニ中^ニ衡^ニ

陽^ニ、則當^ニ繫^テ舟^ヲ相訪^ト、不^レ惜^レ稽^レ程^也。舊註^以爲^ニ公望^ニ郭^ニ來訪^ヲ、非^也。

(注12) 詳註巻二十二。その詩は次の如くである。

漠漠舊京遠 遲遲歸路賒 漠漠として旧京遠く、遲遲として帰路

賒なり

殘年傍水國 落日對春華 殘年水國に傍ひ、落日春華に對す

樹蜜早蜂亂 江泥輕燕斜 樹蜜早蜂亂れ、江泥輕燕斜めなり

賈生骨已朽 悽惻近長沙 賈生骨已に朽ち、悽惻長沙に近し

(注13) 何か基づくところあるのか、不明。沔口は、今の湖北省武漢市。漢水が長江に注ぐところ。樊口は、湖北省鄂城市の西。樊水が長江に注ぐところ。

(注14) 『字彙』に見える。なお、鈴木虎雄『杜少陵詩集』(卷二十二)は、仇兆鰲の詳註(卷二十二)に拠って、(促)を「はやし」と訓じる。

(注15) 稽程は、旅の日程が延びること。稽は、稽留の意。例えば、南朝梁・簡文帝(蕭綱)の「舟を泛べて大江を横ぎる」三首其三(『古詩紀』卷七十七。『樂府詩集』卷三十七は「隴西行」に作る)に「廻山時に路を阻み、絶水亟しば程を稽む」と。なお、鈴木虎雄『杜少陵詩集』は、詳註によって(繫帆)の(繫)字を(驚)に作り、「片時程」を「少時を要する水路」と解して、尾聯について「沔口・橘洲の風浪ははい、だからすこしのみちのりを風帆を飛ばしてそちらへおたづねすることは惜しむところではない」と説く。

(注16) 邵傳『集解』に「便ち以て其の来りて相会せんことを望む」と。また邵宝『集注』(卷二十三、簡寄類)および薛益『分類』も郭に来訪を囑む意とする。これに対して、顧宸『註解』に「蔡夢弼曰く、橘洲は長沙郡の沔口に在り。公、郭が潭自り衡に到って、片時の程を惜しまざらんことを欲し、一会面を冀ふ耳と。愚、繫帆の二字を見るに、還つて是れ公の潭に在りて郭を候す」、輯註に「末の二語乃ち是れ公、潭州に在り、郭受を候す。夢弼謂へらく、公、郭の潭自り衡に到つて己れを訪はんことを欲すと。恐らくは非なり」と。南宋・蔡夢弼の説は、その『草堂詩箋』卷三十九に見える。『註解』および輯註は宇都宮逕庵の増広本にも挙げる。

〈沔口〉は、潭州の地名。公に「沔口に入る」と題する五言律詩がある。その自註に「長沙の北界」と。すべて支流の長江に入るところは、どれもこれを口という。沔口・樊口いずれもこの類。そこに中洲があつて橘を産することから、それで〈橘洲〉と名づけた。公の舟はここに停泊した。〈促〉は、催である。(帆を繫ぐ)は、舟を停めることである。これは暗に贈られた詩の後聯に答える。時に公

は潭州より衡州に入らんとし、そこで郭受のもとに立ち寄つて一度面会したいと思つていたので、それゆえ言う。(風)は順風にして(浪)は穏やかで舟を発することを(促)し、まさに(沔口)を辞して、さかのぼつて衡陽に赴こうとした。とすればきつと舟を(繫)いで訪問するはずで、日(程)をとどめられることを惜しまないのである。旧註に公が郭受の来訪を望むとするのは、よくない。

128 小寒食舟中作

此亦在潭州作。寒食去冬至一百五日、在清明前二日。凡禁スル火三日、至清明日乃取新火用之。蓋使天下改レ火、周之舊制也。周禮司烜氏仲春以木鐸徇火禁於國中。言預令季春斷火之禁也。唐時火禁尤嚴。犯者皆罪之。後至三元代、始除是禁。蓋至後一百五日爲大寒食、小寒食、其終之日也。看首句自明。或以爲前一日、如小至小除之謂、誤レリ矣。

(注1) 邵傳『集解』に「大曆五年、公復た潭州に在り、率ね舟居す」と。薛益『分類』(卷二、節序)も同じ。

なお、胡燮亭『唐詩賞珠』(卷四十九、寒食)は「此の詩、本集並びに諸家俱に称すらく是れ公潭州に在りて舟居せしときの作と。然れども細かに詩徑を詳らかにするに、当に是れ夔峽の間に在りしときの作なるべし」という。

(注2) 宇都宮逕庵の増広本に『文苑彙傳』(卷二、歲時部、寒食)の「冬至を去ること一百五日、即ち疾風甚雨有り、之を寒食と曰ふ。曆に拠れば合に清明の前二日に在るべし」というのを挙げる。これは「荊楚歲時記」の記述に拠る。

(注3) 宇都宮逕庵の詳説に「周礼に仲春に火禁を国中に修む。註に季春將に火を出さんとする爲なり」と。これは明・謝肇淛(字は在杭。一五六七(一六二四)の『五雜俎』卷二、天部二の記述に基づく。『周礼』は秋官司烜氏に「中春に木鐸を以て火禁を国中に修む」と見える。その鄭玄の注に「火禁は、火を用ふるの処及び風燥に備ふるを謂ふ」と。

(注4) 明・楊慎(一四八八―一五五九)の『丹鉛總錄』卷三、時序類、寒食火禁の条に「元稹が連昌宮詞の自注に、京城寒食の火禁、鷄羽を以て灰に入れ焦げる者有らば皆之を罪すと」と。明・張鼎思(一五四三―一六〇三)の『瑯邪代醉編』卷二、禁火の条にもこれを挙げる。但し、中唐・元稹(七七九―八三三)の『連昌宮詞』(『元氏長慶集』卷二十四、『全唐詩』卷四一九)に「初めて過ぐ寒食一百六、店舎煙無く宮樹緑なり」という句はあるが、かかる自注は見えない。

(注5) 前の(注4)に挙げた『丹鉛總錄』に「元人の天下を有て自り、鹵奔の政なり。然れども寒食に必ずしも復た火を改めず。乃ち先宣孔子天道を節宣する者にして元人に因つて之を廢す可けんや」と。『瑯邪代醉編』にもこれを挙げるが、文字に異同がある。鹵奔は、でたらめ。節宣は、うまく調整する。

(注6) 顧宸『註解』に「小寒食は、小至の類の如く、寒食の前一日なり」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。小至は、冬至の前日。小除は、除夜の前日。

これもやはり潭州での作。〈寒食〉は冬至から一百五日、清明節の前二日にある。すべて火を禁ずること三日、清明の日に至つて、ようやく新しい火を取つてこれを用いる。けだし天下に火を改めさせるのは、周代の旧制であらう。『周礼』に「司烜氏は仲春に木鐸を振つて火を徇へて國中に禁ず」と。あらかじめ季春に火を断つという禁令をふれさせるのを言うのである。唐の時代は火を禁ずることがとりわけ嚴重であつた。犯す者は皆これを処罰した。後に元代に至つて、やつとこの禁令を除いた。けだし冬至の後一百五日を大寒食とし、〈小寒食〉は、その終りの日である。首句をみれば自ら明らかである。或いは前一日とし、小至・小除の謂のごとくであるとするのは、誤まりだ。

佳辰強飲^(注7) 食猶寒^(注8) 隱几^(注9) 蕭條戴^(注10) 鵝冠^(注11)
強上聲。飲^(注12) 謂^(注13) 飲^(注14) 酒^(注15)。強^(注16) 飲^(注17) 言^(注18) 苦^(注19) 其寒^(注20) 冷^(注21) 勉強^(注22) 吸^(注23) 飲^(注24) 上^(注25) 也^(注26)。
食^(注27) 卽^(注28) 下^(注29) 物^(注30)。寒食^(注31) 本^(注32) 日^(注33) 既^(注34) 過^(注35)、次^(注36) 日^(注37) 猶^(注38) 未^(注39) 可^(注40) 舉^(注41) 火^(注42)、宿^(注43) 食^(注44) 冷^(注45) 餐^(注46)、不^(注47) 堪^(注48) 寒^(注49) 酸^(注50)。故^(注51) 曰^(注52) 猶^(注53) 寒^(注54)。隱^(注55) 憑^(注56) 也^(注57)。孟^(注58) 子^(注59) 隱^(注60) 几^(注61) 而^(注62) 臥^(注63)、莊^(注64) 子^(注65)

隱^(注66) 几^(注67) 而^(注68) 坐^(注69)、皆^(注70) 言^(注71) 悠^(注72) 悠^(注73) 之^(注74) 狀^(注75)。鵝^(注76) 似^(注77) 雉^(注78)、鵝^(注79) 冠^(注80) 隱^(注81) 士^(注82) 之^(注83) 冠^(注84)。劉向^(注85) 別^(注86) 錄^(注87) 鵝^(注88) 冠^(注89) 子^(注90) 居^(注91) 深^(注92) 山^(注93)、以^(注94) 鵝^(注95) 羽^(注96) 爲^(注97) 冠^(注98)。此^(注99) 嘆^(注100) 隱^(注101) 淪^(注102) 寂^(注103) 寞^(注104)、無^(注105) 人^(注106) 與^(注107) 慰^(注108) 也^(注109)。杜^(注110) 臆^(注111) 云^(注112)、寒^(注113) 食^(注114) 禁^(注115) 火^(注116) 三^(注117) 日^(注118)、謂^(注119) 至^(注120) 後^(注121) 一^(注122) 百^(注123) 四^(注124) 五^(注125) 日^(注126)、乃^(注127) 知^(注128) 小^(注129) 寒^(注130) 食^(注131) 是^(注132) 六^(注133) 日^(注134)。總^(注135) 在^(注136) 三^(注137) 日^(注138) 內^(注139)、故^(注140) 云^(注141) 佳^(注142) 辰^(注143)。次^(注144) 日^(注145) 清^(注146) 明^(注147)、始^(注148) 有^(注149) 新^(注150) 火^(注151)、故^(注152) 云^(注153) 食^(注154) 猶^(注155) 寒^(注156)。

(注7) 〈飲〉字、錢注(卷十八)は〈飯〉に作り、「一に飲と云ふ」と。

(注8) 〈戴〉字、錢注および輯註(卷二十)は〈帶〉に作る。

(注9) ちなみに、邵傳『集解』には「平声、盛なり」と注する。これに対し、薛益『分類』は「強は勉強なり」と。勉強(無理やり)の意のときは上声。

(注10) 下物は、酒の肴。『世說新語』豪爽篇に「此の如き下物有り、一斗多しとするに足りず」と。積大典の『學語編』に「サカナ」。

(注11) 『唐詩貫珠』に「隱は憑なり」と。

(注12) 『孟子』公孫丑下に「几に隠つて臥す」と。

(注13) 『莊子』齊物論篇に「南郭子綦几に隠つて坐し、天を仰いで嘘す」と。

(注14) 『說文解字』に「鵝は雉に似たり。上党より出づ」と。

(注15) 薛益『分類』(卷二、節序)に「鵝冠は隱士の冠。勇雉の毛を以て冠と爲す。古に鵝冠子有り」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注16) 『文選』卷五十四、南朝梁・劉孝標「弁命論」に「鵝冠冕黼は必ず天に懸りて期有り」とあり、その李善注に「七略に鵝冠子なる者は蓋し楚人なり。常に深山に居り、鵝を以て冠と爲す。故に鵝冠と曰ふ」と。

(注17) 仇兆鰲の詳註(卷二十三)に引く明・王嗣夷(一五六六―一六四八)の『杜臆』に「広義注に寒食火を禁ずること三日、至後の一百四日五日六日を謂ふと。乃ち知る小寒食は是れ六日なり。総べて三日の内に在り。故に佳辰と云ふ。次の日は清明、始めて新火有り、故に食猶は寒し。火を禁ずれば則ち酒も亦寒し、故に強飲と云ふ」と。広義は、明・馮應京撰・明・戴任注『月令広義』のこと。その巻七、三月令、節令の「断火三日」の項に「冬至を去ること一百四日五日六日を謂ふなり」と。

〈強〉は、上声。〈飲〉は、酒を飲むこと。〈強飲〉は、その寒冷を苦しみ無理やり吸飲するのを言うのである。〈食〉は、とりもなおさず下物(酒の肴)のこと。寒食の今日はすでに過ぎ、次の日もな

おまだ火を挙げる事ができず、宿食冷餐（作り置きのかえた食べもの）は、寒酸（わびしさ）にたえない。それゆえ（猶ほ寒し）という。〈隠〉は、憑である。『孟子』に「凡に隠つて臥す」、『莊子』に「凡に隠つて坐す」と。いずれも悠悠の状（所在ないありさま）を言う。〈鵬〉は、雉に似る。〈鵬冠〉は、隠士の冠。劉向『別録』に「鵬冠子は深山に居り、鵬羽を以て冠と為す」と。これは隠淪寂寞（世に用いられずひっそり）として、慰めてくれる人のないことを嘆ずるのである。『杜臆』に云う、「寒食は火を禁ずること三日、冬至後の一百四日五日六日をいう。それで小寒食は六日だとわかる。すべて三日の内にあり、それゆえ〈佳辰〉と云う。次の日は清明で、そこではじめて新たな火を起こす、それゆえ〈食猶ほ寒し〉と云う」と。

春水／船ハ如ニ天上ニ坐スル

老年ノ花似ニ霧中ニ看ル

春水瀾漫、舟容與^(注18)若^(注18)乗^(注18)レ空^(注18)。老眼模糊、花霏微^(注20)シテ如^(注20)含^(注20)霧マ
寫^(注20)醉鄉爛漫之況^(注20)。上ノ句見^(注20)波平^(注20)如^(注20)席^(注20)、而醉態僛僛^(注22)俄^(注22)在其
中^(注22)矣。黃山谷云、前人ノ詩^(注22)有^(注22)水面ノ船^(注22)如^(注22)天上ニ坐^(注22)スル、公改^(注22)
一ノ春ノ字^(注22)、而精神炯然^(注22)。可^(注22)謂^(注22)點^(注22)鐵^(注22)成^(注22)金^(注22)ト。余謂^(注22)太白^(注22)
舟行若^(注22)在^(注22)虛^(注22)、視^(注22)公^(注22)此句^(注22)、直^(注22)兒童ノ語耳。蓋^(注22)一聯渾然^(注22)天
工、眞^(注22)向^(注22)造化窟中^(注22)奪將來也。

〔注18〕 容与は、ゆらゆらとするさま。双声語。戦国楚の屈原「九章」涉江「楚辭」卷四、『文選』卷三十三に「舟は容与として進まず兮」と。

〔注19〕 ちなみに、『夜航詩話』巻四には「模糊を模に作り、爛漫を漫に作る、偏く字書を考ふるに、従り此の字無し。蓋し糊は米に従ひ、爛は火に従ふに因り、模漫の左文従つて訛するのみ」云々と指摘している。

〔注20〕 霏微は、ちらつくさま。疊韻語。訳注稿四、014「曲江酒に對す」詩の第二句に「水晶殿転た霏微」とあり、東陽は「チラック」と左訓を施し、詳解に「霏微は本と雨雪零たる貌。因つて望迷の状を言ふ」と説く。

〔注21〕 僛僛は、傾き頽れるさま。双声語。『世說新語』容止篇に山濤が嵇康を評して「其の酔うや、僛僛として玉山の將に崩れんとするが若し」と。

〔注22〕 『集千家註』（卷二十）に「山谷が曰く、前人の詩に（水面の船は天上に坐するが如し）と。杜公、一〈春〉字に改めて精神炯然たり。鉄を点し金と成すと謂ふ可し」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。但し、黄山谷（名は庭堅。一〇四五―一一〇五）の集には見えない。また前人の詩も未詳。〈点鉄成金〉は、前人の何でもない凡庸な詩句に少し手を加えて妙句にすること。山谷の「洪駒父に答ふる書三首」其二「豫章黄先生文集」卷十九に「古の能く文章を為る者は、眞に能く万物を陶冶す。古人の陳言を取りて翰墨に入ると雖も、靈丹一粒の如く、鉄を点して金を成すなり」と見える。

ちなみに、明楊慎『丹鉛總錄』卷十九、詩話類、杜詩奪胎之妙に「陳の僧慧標が『水を詠ず』詩に（舟は空裏に泛ぶが如く、人は鏡中に行くに似たり）、沈佺期が『釣竿の篇』に（人は天上に坐するが如く、魚は鏡中に懸かるに似たり）と。杜詩に（春水の船は天上に坐するが如く、老年の花は霧中に看るに似たり）は、二子の句を用ふると雖も、而れども壯麗之に倍す。奪胎の妙を得たりと謂ふ可し矣」と。度会宋茂「杜律評義」にも挙げる。

〔注23〕 李白「別れを送る、書の字を得たり」詩（分類補註李白集」卷十八）の首聯に「水色南天遠く、舟行きて虚に在るが若し」と。

〔注24〕 宋・朱弁（字は少章。一〇八五―一一四四）の『風月堂詩話』巻下に、晁貫之（字は季一）の言として、蘇軾が海棠を詠じた「雨中涙有り亦た凄愴、月下人無く更に清寂」の句について、自ら「此の両句は乃ち吾れ造化窟中に向いて奪將し來たる」と語ったという。〈將〉は、接尾辭。また「夜航詩話」巻一にも、杜甫の五律「春夜草堂の莊に宴す」（正しくは「夜、左氏の莊に宴す」詩。詳註巻一）について、「『暗水春星』の一聯の如き、則ち眞に造化窟中に向いて奪將し來たる」と。なお、「造化窟」の語は、杜甫の「画鵲行」（詳註巻六）に「乃ち知る画師の妙、巧みに造化の窟を刮り、此の神俊の姿を写して、君が眼中の物に充つるを」と見え、吉川幸次郎『杜甫詩注』第五冊（筑摩書房、一九八三年）に「自然の神秘の奥深い貯蔵処」と説く。

〈春水〉はひろびろと広がり、〈舟〉はゆらゆらと空に乗ずるかのようである。〈老眼〉は模糊（ぼんやり）とし、〈花〉は霏微（ちらちら）として（霧）を含んだようである。醉郷爛漫（とつぷりとし

た酔い心地)のありさまを写す。上句は波平らかにして席しきのようであるのをあらわし、そうして酔態の傀儡(ぐらぐら揺らぎ)たるさまはそのなかにある。黄山谷が云う、「前人の詩に(水面の船は天上に坐するが如し)とあり、公は(春)の一字に改めて、精神炯然(目が覚めたように生き生き)なり。鉄を点じて金と成すといえよう」と。私の思うに李太白の「舟行きて虚に在るが若し」は、この句に比べると、まったく子供の語にすぎない。けれどこの一聯は渾然たる天然の巧みさで、真に造化窟中から奪い取って来たものである。

娟娟 戲蝶過閑幔 片片輕鷗下急湍

娟娟美潔貌。幔舟幕也。片片寫其輕狀。二物皆乘春得其所而自適。亦可資飲興也。舊註二聯皆蕭條之感、非也。張文潛雜志云、公父名閑、詩中無閑字。王仲至家有古本杜詩。閑幔本作開幔。謂舟中開幔、因見蝶過也。案スルニ開ト與急、以ニ開合緩急對也。是自一種對法、余於夜航詩話詳述之。

(注25) ちなみに、訳注稿(五)、029「狂夫」詩の詳解には「娟娟は妍好の貌」と。
(注26) 輯註に「幔は舟幕なり」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。
(注27) 顧宸「註解」に「片片は輕き狀を写し出す」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注28) 邵傳「集解」に「二聯は皆蕭條の感なり」と。
(注29) 輯註に「按ずるに子美の父名は閑、古は間字通じて閑に作る。詩中間字を避けず。蓋し文に臨みて諱まざるなり。張文潛雜志に云ふ。王仲至の家に古本の杜詩有り、閑幔本と開幔に作る。舟中幔開き、因つて蝶過ぐるを見るを謂ふなりと。説亦た通ず」と。宇都宮遯庵の増広本にも引く。張文潛は、北宋・張耒(字は文潛、一〇五四―一一一四)のこと。

王仲至は、『杜工部詩集』二十巻を編んだ王洙(字は原初、九九七―一〇五七)の子、王欽臣(字は仲至)のこと。張耒の『明道雜志』に次のように見える。

杜甫の父名は閑、而して甫詩に閑を諱まず。某館中に在りし時、同舍屢しは論じて此に及ぶ。余謂へらく甫は天姿忠孝に篤し、父の名に於いて已むを獲ざるに非ざれば、宜しく言ふに忍びざるべしと。試みに王仲至に問うて之を討論するに、果たして其の由を得、大都本と誤るなり。「寒食」詩に云ふ、「田父邀皆去、鄰家閑不違」(田父邀へて皆去り、鄰家閑して違はず)と。仲至家に古写本の杜詩有り、(閑不違)に作る。(閑)に作るは実に(閑)に勝る。又た「諸將」詩に云ふ、「見愁汗馬西戎逼、曾閃朱旂北斗閑」(見愁汗馬西戎の逼るを、曾て朱旂に閃めいて北斗閑なり)と。写本は(殷)字に作る。亦た理有り、語更に雄健。又た「娟娟戲蝶過閑幔、片片鷗鷺下急湍」(娟娟たる戲蝶閑幔を過ぎ、片片たる鷗鷺急湍を下る)と有り、本と(閑幔)に作る。(閑幔 語更に工にして、幔を開くに因つて蝶の過ぐるを見るなり。惟だ「韓幹画馬贊」に「御閑敏」と有り、写本に異説無し。容に是れ「閑敏」なるべしと雖も、而れども礼に卒哭すれば乃ち諱む。「馬贊」は、容に是れ父在りしとき為る所なるべきなり。

「寒食」詩は、詳註巻十。但し、(邀)字、錢注(巻十一)および輯註(巻八)それに詳註は(要)に作る。音義同じ。また(閑)字、錢注は(閑)に作り、「晋は問に作る」と注する。輯註および詳註は、(問)に作り、「一に閑に作る」と注する。「諸將」詩は、五首のうち其一。詳註巻十六。訳注稿(十)、074参照。「韓幹画馬贊」は、詳註巻二十四。但し、「画馬贊」に作る。また(御)字の下に(者)字がある。(卒哭すれば乃ち諱む)は、『礼記』曲礼上に見える。埋葬を終わつて虞の祭を行なつたあと、死者の名を諱む。

(注30) 『夜航詩話』には見あたらない。

《娟娟》は、美しく潔らかなさま。《幔》は、舟の幕である。《片片》は、その軽やかな様子を写す。(蝶と鷗との)二物はいずれも春に乗じて恰好の居場所を得て自適する、やはりそれで飲酒の興をたすけることができるのである。旧註に二聯はいずれも《蕭條》(ひっそりとわびしい)の感とするのは、よくない。張文潛の『雜志』に云う、「公の父、名は閑、そのため詩中に《閑》の字がない。王仲至の家に古本の杜詩があり、《閑幔》はもと《開幔》に作る。舟中

幔を開くのをいう。それで蝶の過ぎるのを見るのである」と。案ずるに〈開〉と〈急〉とは、開合緩急で対偶となる。これ自体で一種の対句法。私が『夜航詩話』において詳しくこれを述べている。

雲白^ス山青^シ萬餘里^ニ 愁看^ル直北^ニ是長安^ヲ

此跟^ス第二句^ニ、蕭條悵望^シ、雲山萬里、長安不見^ハ、傷目^ヲ悵神^ヲ、強飲^ニ之興^ヲ、忽醒^テ索然^{ナリ}。蓋亦一飯不忘^ニ、所謂花^ニ濺^レ涙^ヲ也。

且夫寒食清明^ハ、京師花盛^{ナル}之候^ニ、行樂繁華之日、尤所^ニ以不^レ勝^ニ想望^ニ也。

(注31) 〈愁〉字、邵宝『集註』(卷二十三、時序類) および薛益『分類』は〈遙〉に作る。

(注32) 薛益『分類』に「末は雲山の遠きに感じて長安を望む。所謂身は江湖にして心は魏闕、一飯も君を忘れざる者か」と。(魏闕)は、宮殿、朝廷。

『莊子』讓王篇に「身は江湖の上に在り、心は魏闕の下に居る」と。(一飯)云々は、北宋・蘇軾の「王定国詩集叙」に見える語。訳注稿(一)、「杜文貞公伝」の(注84)参照。

(注33) 「春望」詩(詳註巻四)の第三句。

これは第二句にびたつとついで、蕭条(うら寂しく)悵望すると、

〈雲〉〈山〉は万里も連なり、〈長安〉は見えず、目を傷め神(こころ)を愴める。〈強飲〉の興は、ふと醒めてあじけなくなる。けだしやはり「一飯も忘れず」、いわゆる「花にも涙を濺ぐ」である。

それにそもそも寒食・清明は、京師(みやこ)〈長安〉では花盛りの候、行樂繁華の日で、どうしてもこらえきれずそのありさまを心に描いてついつい懐かしく思ってしまうゆえんである。

129 燕子來^ル舟中^ニ作

潭州^ノ舟居、燕子來^テ止^ル帆檣^ニ、因感^{シテ}而詠^{スル}之^ヲ也。

潭州の舟居に〈燕子〉が来て帆檣(ほばしら)に止まった。それで心感じてこれを詠するのである。

湖南爲^レ客^ト動^ス經^ル春^ヲ 燕子銜^レ泥^ヲ兩度新^{ナリ}

※動：エテハ

潭州在^ニ洞庭^ノ南畔^ニ、故^ニ稱^ス湖南^ト。大曆四年、公自^ニ岳陽^ニ入^リ潭州^ニ、尋^テ如^ニ衡州^ニ、未^レ幾^{ナラ}復^テ回^リ潭州^ニ、五年春仍次^ニ于此^ニ。故^ニ曰^ニ動^ス經^ル春^ヲ。動^ハ者言^フ事之易^{ナリ}然^リ。經^ハ春^ヲ言^フ度^ニ三春^ヲ。公去年既^ニ在^ニ潭^ニ、今春再^テ在^ニ潭^ニ、輒復將^ニ經^ル春^ヲ于此^ニ。恐^ラ終^ニ淹滯^シ不^レ能^レ有^レ行^{コト}也。考^ニ公^ノ年譜^ヲ、是歲公欲^ニ往^ニ柳州^ニ、依^中舅氏崔少府^ニ、四月再^テ入^リ衡州^ニ、復^テ回^リ潭^ニ、遂卒^ス也。此所以憂^ニ其不^レ果^{ナリ}行^{コト}也。春^ノ字引^ニ出^リ燕^ノ字^ヲ、衡泥^ヲ營^ル巢^ヲ也。兩度新^{ナリ}言^フ自^リ來^リ于^ニ湖南^ニ、春燕之銜^レ泥^ヲ、已^ニ見^ル兩度新^{ナリ}來^ル也。

(注1) 字都宮遷庵の増広本に引く明・單復の年譜の大曆四年の条に「正月、岳州自^リ潭州に之^ク。未^ダ幾^ハならずして衡州に入る。夏、熱を畏れて復た潭州に回^ル」、大曆五年の条に「公年五十九。春、潭州に居る」と。

(注2) 釈大典「詩語解」巻下、動の条に「又軋^シ為^ル事之易^{ナリ}然^リ」と。但し、「詩語解」ではさらに「又軋^シ為^ル事之易^{ナリ}移^リ」との解を示して、この句を挙げ、〈動〉字を「タチマチ」と訓ずる。

ちなみに、訳注稿四、016「許八に因つて江寧の晏上人に奉寄す」詩の第五句に「棋局動もすれば随ふ幽澗の竹」とあり、「マタシテモ」と左訓を施し、詳解に「動は動く毎に必ず然るを謂ふ。猶ほ毎に屢しばと言ふがごときなり」と。その(注10)も参照。

(注3) 明・單復の年譜、大曆五年の条に(注1)に挙げた箇所が続けて「夏四月、臧玠の乱を避けて衡州に入る。柳(柳)州に如きて舅氏崔偉に依らんと欲す。来^ル未^レ陽に至つて卒す。柳州の(柳)字は(柳)の(来)字は(来)の誤り。柳州は、今の湖南省郴州市。舅氏は母方のおじ。」「二十三舅録事の郴州を撰するを奉送す」詩(詳註巻二十三)があり、題下に「崔偉」と注する。

(注4) 「唐詩貫珠」(巻五十四、禽二)に「春の字は燕の字を引き出す」と。潭州は洞庭湖南畔にあり、それゆえ〈湖南〉と称する。大曆四年(七六九)、公は岳陽より潭州に入り、ついで衡州にゆき、ほども

く潭州にもどり、五年春にはやはりそのままここに滞留した。それゆえ「動もすれば春を経」という。「動」とは、事態のそうなりやすいのを言う。「春を経」は、三月の春をすぐすの言う。公は去年すでに潭州にあって「春」を「経」、今春再び潭州にあって、またしてもまさに「春」をここに「経」ようとしている。おそらくは最後まで淹滞して行くことができなかったのである。公の年譜を考えるに、この歳、公は柳「柳」州に往き母方のおじ崔少府に頼ろうとし、四月再び衡州に入り、また引き返して潭州に次(やどり)し、そのまま卒した。これはその行を果せなかったのを憂えるゆえんである。「春」の字は、「燕」の字を引き出す。「泥を銜ふ」は、「巢」を営むことである。「兩度新たなり」は、「湖南」に来てから、春燕の「泥を銜」えたのが、もはや二度「新たに」来るのを見たことを言うのである。

舊入テ故園^(注5)嘗識^(注5)主^(注5) 如今社日遠^(注5)看^(注5)人^(注5)

※嘗識……ミオホエテイル 遠看……ミマフ

社日ハ燕初^(注5)來^(注5)之候也。曰主^(注5)曰人、竝^(注5)公自謂。燕子故^(注5)來^(注5)舟中^(注5)、若^(注5)爲^(注5)我^(注5)有^(注5)情然^(注5)。因^(注5)憶舊^(注5)在^(注5)故園^(注5)、燕子來^(注5)巢^(注5)、想^(注5)必識^(注5)我^(注5)是主人^(注5)。今我在^(注5)舟中^(注5)、方^(注5)思^(注5)故園^(注5)、適^(注5)當^(注5)社日^(注5)、燕子來^(注5)止^(注5)帆柱^(注5)、呢喃^(注5)相語^(注5)。得^(注5)非^(注5)故園^(注5)之燕遠^(注5)來^(注5)看^(注5)我^(注5)乎。故^(注5)言汝^(注5)是昔日入^(注5)故園^(注5)依^(注5)我^(注5)定^(注5)巢^(注5)者^(注5)ナラ。以^(注5)嘗識^(注5)主人^(注5)故^(注5)因^(注5)社日^(注5)之候^(注5)、爲^(注5)得^(注5)得^(注5)來^(注5)訪^(注5)邪。此未^(注5)必^(注5)卽^(注5)是故園^(注5)之燕^(注5)、人之觸^(注5)物^(注5)感^(注5)情^(注5)乃爾^(注5)。蓋^(注5)公舟居寂寥^(注5)、悶坐度^(注5)日^(注5)。適^(注5)見^(注5)燕子來^(注5)語^(注5)、不^(注5)減^(注5)空谷^(注5)聲音^(注5)、直^(注5)把^(注5)燕子^(注5)作^(注5)舊相識^(注5)。至^(注5)爲^(注5)遠^(注5)來^(注5)訪^(注5)我^(注5)、是憐^(注5)我^(注5)者^(注5)、獨^(注5)燕耳^(注5)。癡想聞議論^(注5)、總是無聊中^(注5)ノ語。

(注5) (嘗) 字、錢注(卷十八)は「常」に作る。音義ともに同じ。

(注6) 宇都宮遷庵の詳説に「社日ハ春社也。燕ハ春ノ社日ニ來。秋ノ社日ニ去」と。春の社日は、立春後の第五の戌の日。また秋の社日は、立秋後

の第五の戌の日。

(注7) 清・徐增『而庵說唐詩』(卷十九)に「旧と故園に在るや、燕子來り巢くふ、想ふに必ず我は是れ箇の主人なるを識らん」と。

(注8) 『夜航詩話』卷五に「詩に得の字を用ふるは、其の得易からざるを謂ふなり。(中略)僧貫休の蜀主王建に上る詩に「一瓶鉢垂垂として老い、千水千山得得として来る」、垂垂、老に投ずるの身を以て、其の来り易からざるを陵ぎて至るを言ふ。猶ほ故故と言ふがごとし。東坡の詩に「知る是れ多情得得として来る」、多情の二字は、即ち得得の由、王建の深く喜ぶ所以なり」と。また『夜航餘話』卷上にも貫休の詩を挙げて「字典二得得唐人方言猶二特地二也トアリ。(中略)得得ハ、ワザ／＼ト訳ス」という。字典は、『康熙字典』。

晩唐五代の詩僧貫休(八三二〜九二二)の例は、「情を陳べ蜀の皇帝に献ず」詩(『禪月集』卷二十、『全唐詩』卷八三五)。貫休が王建に詩を投じた故事は、北宋・陶岳『五代史補』卷一や南宋・尤袤『全唐詩話』卷六などに見える。北宋・蘇軾(東坡)は、「再び楊公濟の梅花十絶に和す」其三(『蘇文忠詩合註』卷三十三)の結句。

(得得)は、唐宋の俗語。張相『詩詞曲語辭匯釈』卷四、得得の条には『康熙字典』をふまえて「得得は、猶ほ特地のごときなり」というが、豊田穰『唐詩研究』(養徳社、一九四八年)の「唐詩俗語攷」および塩見邦彦『唐詩口語の研究』(中国書店、一九九五年)は、「得得」を「人の足音を形容する」語とし「テクテク」の訳語をあてる。

(注9) 『唐詩貫珠』に「未だ必ずしも即ち是れ故園の燕ならず、然れども人の物に触れ情深き、之を擬して故園を憶ふを為すに過ぎざるなり」と。

(注10) 『而庵說唐詩』に「適たま社日に当たつて、却つて速く来たつて人を見る。子美舟居寂寥、燕子を見て、空谷の足音に減ぜず、直ちに燕子を把つて旧相識と爲し、之が爲に感傷す」と。(空谷足音)、『空谷聲音』は、予期せぬ喜びをいう。「莊子」徐無鬼篇に「夫れ虚空に逃るる者は、(中略)人の足音の登然たるを聞いて喜ぶ」と。

(社日)は、燕が初めてやってくる時候である。「主」といい「人」というのは、ともに公自らの謂。「燕子」がことさらに「舟中」に来るのは、自分のために情があるかのようだ。因つて憶う(旧)「故園」(故郷のわが家)では、「燕子」がやってきて「巢」づくりをした。

思うにきつと自分が〈主〉人であったことを忘れずに〈識〉つてい
るだろう。今、自分は〈舟中〉にあり、ちようど〈故園〉を思つて
おり、おもしろも〈社日〉にあたり、〈燕子〉がやつてきて帆柱に止
まり、呢喃（*ねなん*）（ピーチイ）と語らう。〈故園〉の燕が遠くやつて来て
自分を見舞ってくれたのではなからうか。それゆえ言う、おまえは
その昔〈故園〉に〈入〉り私のところで〈巢〉をかまえたやつであ
ろう。かつて〈主〉人を見〈識〉つていたので、それゆえ〈社日〉
の候であるから、そのため得得（*わざわざ*）やつてきて訪ねてくれ
たのであろうか、と。これはいまだ必ずしも〈故園〉の燕と同じで
はないが、人が物に触れ情に感ずるのは、かかる具合である。けだ
し公は舟居寂寥として、悶々と坐して日を過ごしていたのであろう。
おりしも〈燕子〉のやつてきて語るのを見、空谷の登音におとらず、
直ちに〈燕子〉を旧相識（*むかしなじみ*）だとみなし、遠く来たつ
て自分を訪うとみなすに至った。自分を〈憐〉れんでくれるのはひ
と燕だけなのだ。痴想（*ちそう*）（たわけた想像）や閑議論（*くだな議論*）
で、すべては無聊（*むろ*）（やるせなさ）中の語だ。

可憐處巢君室^三 何異飄飄託此身^二

※処処：コ、カシコ

上ノ句應^レ銜^レ泥^ヲ。憐^ニ其^ノ不^レ得^レ安^ヲ栖^{スルコトヲ}一處^ニ、而^ニ年^ニ年^ニ移^{シテ}居^ヲ
不^レ定^也也。君^ヲ替^テ燕^ニ自^レ命^ス之^ヲ詞^ヲ、取^テ諸^ノ古^ノ詩^ヲ思^フ爲^ニ雙^ニ飛^ノ
燕^一、銜^レ泥^ヲ巢^ニ中^ニ君^ニ室^ニ。俗^ニ本^ニ作^ニ居^ニ室^ニ、非^ニナリ。下ノ句應^レ爲^レ
客^ト。公^ハ飄^ニ泊^ニ江^ニ湖^ニ、扁^ニ舟^ニ託^ス身^ヲ、故^ニ感^{シテ}而^ニ自^レ傷^ム也。一聯言^ニ汝^ニ
處^ニ處^ニ營^ニ巢^ニ寄^ニ人^ニ之^ニ室^ニ、亦^ニ猶^ニ我^ノ之^ニ流^ニ寓^ニ飄^ニ飄^ニ不^レ定^也、良^ニ
可^ニ憐^ニ也。蓋^ニ公^ハ因^ニ自^レ憐^ニ、感^{シテ}而^ニ憐^ニ燕^ヲ。抑^ニ其^ノ憐^ニ燕^ヲ還^ニ自^レ
憐^ニ也。

（注11）『而庵說唐詩』に「燕子や一処に安栖するを得ず、処処巢を居室に罌す」と。

（注12）顧宸『註解』に「古詩に双飛の燕と為らんことを思ふ、泥を啣へて君

が室に巢くふ」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。古詩は、『文選』
卷二十九、「古詩十九首」其十二。

（注13）東陽が底本とした邵傳『集解』は〈居室〉に作る。邵宝『集註』（卷
二十三、禽虫類）・薛益『分類』（卷二、禽獸）・仇兆鰲の詳註（卷
二十二）も同様。『集千家註』（卷二十）・錢注・輯註（卷二十）・顧宸『註
解』は〈君室〉に作る。輯註の異同は、宇都宮遯庵の増広本に指摘す
る。なお『唐詩貫珠』は〈君室〉に、『而庵說唐詩』は〈居室〉に作る。

（注14）顧宸『註解』に「公、燕を憐れむは還つて自ら憐れむなり」と。宇都
宮遯庵の増広本にも挙げる。

上の句は、〈泥を銜む〉に対応する。その一箇所に腰を落ち着け住
むことかなわず、毎年居を移して定まらないのを〈憐〉れむのであ
る。〈君〉は、燕になにかわつて自ら名づける詞。これを古詩の「双
飛の燕と為らんことを思ふ、泥を銜へて君が室に巢くはん」に取る。
俗本に〈居室〉に作るのは、よくない。下の句は、〈客と為る〉に
対応する。公は江湖に飄泊（*さすらい旅*）して、扁舟に身を託して
いる、それゆえ心感じて自ら傷むのである。この一聯は、おまえは
〈処処〉（*ここかしこ*）に〈巢〉を営み、人の〈室〉に身を寄せる、
やはり私の流寓が〈飄飄〉（*ふらふら*）として定まらないようなも
ので、まことに〈憐れむ可し〉と言うのである。ただし公は自らを
〈憐〉れむことから、心感じて燕を〈憐〉れむ。そもそもその燕を
〈憐〉れむのは、かえつて自らを〈憐〉れむのである。

暫語船檣還起去 穿花落水益沾巾^二

※還：ツイ 穿：クバリ

暫^ハ字還^ノ字、多少^ノ感慨。語^ハ謂^ニ向^ニ人^ニ告^{スルヲ}語^一。燕子故^ニ來^ニ舟^ニ
中^ニ、呢喃相語^ヲ、如^ニ欲^{スルカ}依^ニ我^ニ定^ニ巢^ニ。而語^ハ未^ニ畢^ニ翻^ニ然^ニ
忽^ニ去^ニ、故^ニ曰^ニ還^ニ起^ニ去^ニ。甚^ニ惜^ニ之^ヲ也。公憐^ニ燕^ヲ自^レ傷^ム、惆悵^ニ淚^ニ流^ニ。
蓋^ニ已^ニ幾^ニ行^ニ。既^ニ見^ニ便^ニ去^ニ、尤^ニ難^ニ爲^ニ懷^ニ。故^ニ曰^ニ益^ニ沾^ニ巾^ニ。目^ニ
送^ニ不^レ禁^ニ也。范德機^ハ云^ニ、善本作^ニ貼^ニ水^ニ。此說極^ニ是^ニ。謂^ニ
燕掠^ニ水^ニ而^ニ低^ニ、若^ニ貼^ニ著^ニ波^ニ面^ニ也。胡燮亭^ハ云^ニ、結惜^ニ燕^ノ之^ニ去^ニ。

其銜泥^レ泥^レ來^二舟中^一、以爲^レ依^レ我^ニ定^レ巢^一。只在^二檐上^一暫語^一、即還翻然^一飛去^ル。殊爲^二惆悵^一、令^二人^一不^レ勝^二寂寥^一、而又不^二冒^一直^二遠^一去^一、乃猶傍^二岸邊^一、頤頤穿^レ花^一、差池掠^レ水^一、似^二有意慰^レ我^一而然^一。依依目送^一、相惜、不^レ覺涕泗之沾^二巾^一矣。燕之情態、數語委曲摸寫^一得^レ盡。棘端刻^レ猴^一手段、抑亦詩意甚哀^一、無^レ異^二長沙鵬^一賦^一。公是歲遂^二卒^一、年壽不^レ永^一、傷哉^一。

〔注15〕 例えば、『論語』雍也篇に「中人以上には、以て上を語ぐ可きなり」とあり、北宋・邢昺の疏に「語は告語を謂ふ」と。

〔注16〕 『唐詩貫珠』に「既に見て便ち去る、尤も人をして寂寞たらしむ」と。

〔注17〕 この言い方、訳註稿(四)の前稿補訂参照。

〔注18〕 錢注に「范德機云ふ、善本は水に貼すに作る」と。また輯註に「范德機云ふ、善本は貼に作る」と。詳註も同様。輯註は、字都宮遯庵の増広本に挙げる。范德機は、元・范梈(字は德機。一二七二—一三三〇)のこと。『元史』卷二二七に伝がある。但し、その『杜工部詩范德機批選』には見あたらない。

〔注19〕 『唐詩貫珠』には見あたらない。

〔注20〕 『而庵説唐詩』に「汝還た起ち去る、殊に惆悵を爲す」と。

〔注21〕 頤頤は、上に下に飛ぶさま。双声語。『詩経』邶風・燕燕に「燕燕于^レ飛、之を頤し之を頤す」と。その毛伝および朱熹の集伝に「飛びて上ぐるを頤と曰ひ、飛びて下ぐるを頤と曰ふ」と。

〔注22〕 差池は、ふぞろいのさま。疊韻語。『詩経』邶風・燕燕に「燕燕于^レ飛、其の羽を差池す」と。朱熹の集伝に「差池は齊しからざるの貌」と。

〔注23〕 『而庵説唐詩』に「我は却つて舟中に悶坐し、燕子に如かざる多し。涕泗の巾を沾すを覺えず矣」と。

〔注24〕 『韓非子』外儲説左上に「宋人に燕王の為に、棘刺の端を以て母猴を爲らんと請ふ者有り」と。母猴は、獼猴。

〔注25〕 『而庵説唐詩』に(注23)に挙げた箇所が続けて「子美の此の詩は、長沙の鵬賦に異なること無し」と。長沙の鵬賦は、前漢・賈誼(前二〇〇—前一二八)の「鵬鳥の賦」(『文選』卷十三)のこと。賈誼が長

沙(湖南省)に左遷された時の作であるから、かくいう。鵬はミミズクで、不吉な鳥とされる。

〔注26〕 『而庵説唐詩』に(注25)に挙げた箇所が続けて「子美の律は此に終る。年壽永からず、傷ましい哉」と。杜甫は、大暦五年(七七〇)、五十九歳で没した。

〈暫〉字や〈還〉字には、多くの感慨がある。〈語〉は、人に向つて告語すること。〈燕子〉はことさらに〈舟中来〉り、呢喃と相語る。自分にたよつて〈巢〉を定めようとしているみたいだ。しかるに語らいがまだ終わらぬうちに翻然(ひらり)として忽ち去る、それゆえ〈還つて起ちて去る〉という。はなはだこれを惜しむのである。公は燕を〈憐〉んで自ら傷み、惆悵(悲しみ身もだえ)して涙が流れる。けだしすでに幾筋か流れたのだらう。見ればすぐに去り、もつとも居たたまれない思いがする。それゆえ〈益ます巾を沾す〉という。目で見送つてこらえきれないのである。范德機が云う、「善本は水に貼すに作る」と。この説が極めてよい。燕が水面を掠めて低く飛ぶのが、波面に貼りついていくかのようだというのである。胡夔亭が云う、「結びは燕の去るのを惜しむ」と。その〈泥〉を〈銜〉え舟中に来たのは、思うに自分にたよつて〈巢〉を定めようとしたからである。ただ〈檐〉上にあつて、〈暫〉し〈語〉つてたちまちまた翻然(ひらり)として飛び去つた。とりわけ惆悵たる思いをなし、寂寥(さみしさ)にたえなくさせるが、また直ちに遠くにはゆこうとはせず、かえつてなお岸边に傍い、頤頤(上に下にすいすい)と〈花〉を〈穿〉ち、差池(いれかわりたちかわり)と〈水〉面を掠め飛ぶ。自分を慰めてくれるつもりでそうしているかのようだ。名残惜しくいつまでも目で見送つて相惜しみ、涙や鼻水が〈巾を沾す〉のに気づかない。燕の情態をば数語で事細かに描写して言い尽くしている。棘の先に猴を刻む手法だが、しかしながらやはり詩意ははなはだ哀しく、長沙(賈誼)の「鵬の賦」に異なる

ことがない。公はこの歳とうとう卒した。年寿久しからず、なんとも傷ましいかぎりだ。

130 贈韋七贊善^(注2)

唐書百官志^(注1) 東宮官有^(注2) 左右贊善大夫、各五人、掌^(注3) 傳令^(注4) 諷^(注5) 過失^(注6) 贊^(注7) 禮儀^(注8)。韋七^(注9) 蓋宰相見素之後、與^(注10) 公皆京兆^(注11) 名家。詩上^(注12) 半^(注13) 專稱^(注14) 其事^(注15)、下半^(注16) 則惜^(注17) 其飄零^(注18)。蓋韋亦飄^(注19) 泊^(注20) 湖南^(注21)。公同病相憐^(注22)、爲^(注23) 贈^(注24) 此^(注25) 慰^(注26) 之^(注27) 也。

(注1) 『集千家註』(卷二十)に黃鶴の注として「唐志を按ずるに東宮官に左右贊善大夫有り、各おの五人、令を伝へ過失を諷し礼儀を贊することを掌る」と。宇都宮遯庵の増広本に挙げる。〈唐志〉は、『新唐書』卷四十九上、百官志四上、東宮官。令は、太子の命令。

(注2) 『集千家註』に(注1)に挙げた箇所に続けて「韋贊善は必ず見素が後ならん」と。また顧宸『註解』に「贊善は必ず見素が後ならん。見素、位は宰相に至り、司空を贈らる」と。いずれも宇都宮遯庵の増広本に挙げる。韋見素(六八七〜七六二)については、『旧唐書』卷一〇八、『新唐書』卷一一八に伝がある。

(注3) 同病相憐は、『吳越春秋』闔閭内伝に「同病相憐れみ、同憂相救ふ」と。なお、宝応元年(七六二)梓州での作に「韋贊善に贈りて別る」詩(詳註卷十一)があり、次のように詠じる。

扶病送君發 自憐猶不歸
病を扶けて君が発するを送る、自ら憐れむ猶ほ帰らざるを
祇應盡客淚 復作掩荆扉
祇だ応に客涙を尽くして、復た荆扉を掩ふことを作す

江漢故人少 音書從此稀
江漢故人少なし、音書此れ從り稀なり
往還二十載 歲晚寸心違
往還二十載 歲晚寸心違ふ

『唐書』百官志に「東宮の官に左右贊善大夫あり、それぞれ五人、太子の命令を伝え過失を諷し、儀礼を贊けることを掌る」と。(韋七)は、けだし宰相韋見素の後裔で、公ともども京兆(長安)の名家であった。詩の前半は専らその事を称し、後半ではその飄零(おちぶ

れさすらうこと)を惜しんでいる。けだし韋もやはり湖南に飄泊していたのであろう。公は同病相憐れみ、そのためこの詩を贈って慰めたのである。

郷里^(注1) 衣冠不^(注2) 乏^(注3) 賢^(注4) 杜陵韋曲^(注5) 未央^(注6) 前

※未央：ヤコトナキトコロガラ

郷里^(注1) 即杜陵韋曲。不^(注2) 乏^(注3) 賢^(注4) 言^(注5) 兩家世^(注6) 有^(注7) 名賢^(注8) 爲^(注9) 中^(注10) 衣冠^(注11) 貴人^(注12) 上。杜陵^(注13) 杜氏^(注14) 所居^(注15)、韋曲^(注16) 韋氏^(注17) 所居^(注18)。竝^(注19) 在^(注20) 樊川^(注21) 之境^(注22)、爲^(注23) 長安勝遊^(注24) 處^(注25)。未央^(注26) 借^(注27) 用漢^(注28) 宮名^(注29)。未央^(注30) 前^(注31) 謂^(注32) 其密^(注33) 邇^(注34) ス帝居^(注35) 也。

(注4) 邵傳『集解』に「杜陵」の下に「公の居る所」、「韋曲」の下に「韋の居る所」と注する。

(注5) 薛益『分類』(卷二、簡寄)に「未央は宮名。漢高七年、長安に至つて蕭何をして未央宮を治めしむ」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。〈郷里〉は、とりもなおさず〈杜陵〉〈韋曲〉。〈賢に乏しからず〉は、兩家に代々名だたる〈賢〉臣が出て〈衣冠〉をまとつた貴人となることを言う。〈杜陵〉は杜氏の住まい、〈韋曲〉は韋氏の住まい。ともに樊川の区域にあり、長安の景勝地である。〈未央〉は、漢の宮殿の名を借用する。〈未央の前〉は、その帝居に近接することである。

爾^(注1) 家最近^(注2) 魁^(注3) 三^(注4) 象^(注5) 時論同^(注6) 歸^(注7) ス尺五^(注8) 天

魁^(注1) 三^(注2) 言^(注3) 北斗魁^(注4) 星^(注5) 下^(注6) 之三^(注7) 星^(注8)。尺五^(注9) 一^(注10) 尺五寸^(注11)、言^(注12) 甚切近^(注13) 也。歸^(注14) 歸向也。言^(注15) 人望^(注16) 所^(注17) 屬^(注18) スル也。公自註^(注19) 斗魁^(注20) 下^(注21) 兩兩相比^(注22) 爲^(注23) 三台星^(注24)、象^(注25) 三三公^(注26)。鄉中俚語^(注27) 曰^(注28)、城南^(注29) 韋杜^(注30)、去^(注31) コト天^(注32) 尺五^(注33)。蓋去^(注34) 天尺五之謠^(注35) 則兩家所^(注36) 同^(注37) スル、故^(注38) 曰^(注39) 時論同^(注40) 歸^(注41) スト。而

韋七^(注1) 特^(注2) 係^(注3) 相門^(注4)、故^(注5) 曰^(注6) 最近^(注7)。是倒句^(注8) 法。

(注6) 魁星は、北斗七星のひしゃくの頭の部分に似た方形にならんだ四つの星。

(注7) 顧宸『註解』に「公自註に斗魁の下兩兩相比ぶを三台星と爲す」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注8) 顧宸『註解』に「公自註に郷中俚語に曰く、城南の韋杜、天を去ること尺五」と。宇都宮遼庵の増広本にも挙げる。

《魁三》は、北斗魁星の下の三星を言う。《尺五》は一尺五寸、ごく近いことを言うのである。《帰》は、帰向である。人望の属するところを言うのである。公の自註に「斗魁の下両面相比ぶを三台星と為す」と。三公に象る。「郷中俚語に曰く、城南の韋杜、天を去ること尺五」と。ただし「天を去ること尺五」の語は、両家の同じうするもので、それゆえ《時論同じく帰す》といい、しかも韋七は特に宰相の一門に連なることから、それゆえ《最も近し》という。これは倒句の法である。

北走關山開雨雪 南遊花柳塞雲煙

北走ハ謂レ欲ニ北赴ニ長安ニ。不レテ曰ニ北望ニ、而曰ニ北走ニ、指テ情ヲ言也。開ハ猶レ霽ノ也。關山開ニハ雨雪一言ニ關山雪霽ニ見ニ天畔ニ也。南遊ハ謂ニ韋來ニ湖南ニ。塞悉則反、謂ニ春色未レ融也。蓋韋戀ニ關欲ニ北歸ニ、關山阻絶ニシテ、長安不レ見。雨雪開霽、寒色皚然。徒ニ悵焉、傷シ目耳。其到ニ湖南ニ、正ニ早春之候、花柳未レ發、雲煙蒼慘、亦無所慰情也。一説ニ北走ハ猶ニ北來ニ、言北自ニ長安ニ來上ル也。

(注9) 輯註(卷二十)に「悉則の切」と。字音はソク。

(注10) ちなみに、釈大典『学語編』巻上、天文類に《開霽》の語を挙げ、「アメガアカル」と訓を施す。

(注11) 蒼慘は、李白の「幽歌行、新平の長史兄榮に上る」(『分類補註』巻七)に「愁雲蒼慘として寒氣多し」とある以外、あまり見かけない語。

(注12) 輯註に「二語、韋賛善に属す。韋は蓋し北のかた来りて湖南に至るなり」と。

《北走》は、北のかた長安に赴こうとすること。《北望》といわずに《北走》というのは、(はやる)気持ち指して言うのである。《開》は、霽とほぼ同じ。《関山雨雪開く》は、《関山》は《雪》が霽れ廻かに天畔(空のはて)に見えるのを言うのである。《南遊》は、韋

七が湖南にやって来たこと。《塞》は、悉則の反。春色がまだゆきわたらないことである。ただし、韋七は宮闕を恋い《北》に帰りたいと願うも、《関山》は阻絶し、長安は見えない。《雨雪》が《開》き霽れ、真つ白な冬景色となつている。いたずらに悵焉(がっかり)として目を傷ましむるばかりだ。その湖南に到つたのは、ちょうど早春の候で、《花柳》はまだ発かず、《雲煙》はどんよりと暗く灰色をして、やはり気持ちを慰めるところがないのである。一説に《北走》は北来と同じだとするのは、北のかた長安より来るのを言うのである。

洞庭春色悲公子 蝦菜忘歸 范蠡船

※悲：イトシカル 蝦菜：ワシキタベモノ

洞庭ハ春色ハ、即上ノ花柳、是也。悲ニ公子ヲ、悲ニ貴介公子ニシテ落魄至リ于此也。楚辭ニ悲公子兮未ニ敢言ニ、此用之ヲ。蝦菜ハ此方ノ俗ニ所謂雜肴。馬永卿カ嬾真子ニ曰、浙人呼ニ海錯ヲ爲ニ蝦菜ニ。公詩ニ風俗當ニ園蔬ニ、即此意也。吳若本作ニ鮭菜ニ。鮭音鞋、吳人謂ニ魚菜ニ總稱ニ。世説ニ庾杲之清貧、食唯有ニ葑菹藟生葑ニ。任昉戲レテ之曰、誰カ謂ニ庾郎ヲ貧ト。毎ニ食スル鮭菜常ニ有ニ二十七種ニ、是也。忘歸ニ訓ニ豈忘レ歸邪ト。范蠡船ハ謂ニ扁舟漂泊ト。亦指レテ韋言。任昉述異記ニ洞庭湖中有ニ釣洲ニ。昔范蠡乘テ扁舟ニ至此ニ、遇風ニ釣於洲上ニ、刻石ニ記焉。此就ニ其地ニ用ニ是事ト也。曰ニ公子ト曰ニ忘レ歸ニ、照ニ應ニ上半ニ。夫洞庭ノ風景、雖稱ニ壯觀ト、非ニ鄉里樊川之比ニ。究邊鄙ノ春色耳。況花柳蕭索、風煙猶塞乎。乃韋曲公子ニシテ而飄ニ零ス此間ニ、吾深ク憐テ而悲レ之。客計尤艱。鮭菜僅ニ給シ、清貧固ニ窮ス。殆似ニ三范蠡船漂泊ト依ニ釣洲ニ、不レト堪ニ其憂ニ、亦已ニ甚矣。豈能忘レ歸ニ自安ニ而不レ憶ニ韋曲之家邪。下半專悲レ韋ヲ而自悲、在其中ニ矣。凡公詩自憐ニ憐レ人ヲ、情深ク意切、使ニ人ヲ感泣ニ焉。所ニ以尤欽ニ也。諸註

謂^ク北走ノ句送^ニ三韋^カ歸^ニ長^ニ安^ニ、南遊ノ句公欲^シ赴^ニ衡^ニ州^ニ、范蠡^カ船^ハ自謂^ニ舟居^ヲ、皆非^{ナリ}。

(注13) 薛益『分類』に「春色は、第六句の花柳是れなり」と。宇都宮逕庵の増広本にも挙げる。

(注14) 顧宸『註解』に「楚辭に公子を悲しんで未だ敢へて言はず」と。宇都宮逕庵の両著にも挙げる。「楚辭」は九歌・湘夫人。但し、(悲)字を(思)に作る。

(注15) 宋・馬永卿『嬾真子』巻四に「僕又た浙人の海錯を呼びて蝦菜と為し、毎食闕く可からざるを見る。始めて(風俗園蔬に当つ)の意を悟るなり」と。仇兆鰲の詳註(卷二十三)に挙げる。「海錯」は、海産物。「尚書」禹貢の「厥の貢は塩絺、海物惟れ錯はる」から出た語。「風俗園蔬に当つ」は、次の(注16)参照。

(注16) 「白小」詩(詳註卷十七)に、
白小羣分命 天然二寸魚 白小群分の命、天然二寸の魚
細微潛水族 風俗當園蔬 細微水族を露し、風俗園蔬に当つ
入肆銀花亂 傾筐雪片虛 肆に入れば銀花乱れ、筐を傾くれば雪片虚し

(注17) 生成猶拾卵 盡取義何如 生成猶ほ卵を拾ふ、尽く取るは義何如
輯註に(蝦)字の下に「呉は鮭に作る」と注する。宇都宮逕庵の増広本にも挙げる。(呉)は、呉若本のこと。但し、呉若本を底本としたという錢注(卷十八)は(蝦)に作る。

(注18) 『集韻』平声十三佳に「鮭、呉人魚菜の総称を謂ふ」と。

(注19) 『李卓吾批点世説新語補』巻二十四、棲逸篇に「庾杲之清素自ら業とす。食唯だ韭菹・蒲韭・生韭の祿菜有るのみ。或るひと之に戯れて曰く、誰か庾郎を貧と謂ふ。食鮭常に二十七種有り」と。もとは『南齊書』巻三十四、庾杲之伝に見えるが、『南史』巻四十九の庾杲之伝には、或るひとを任昉のこととする。韭菹はニラのつけもの、蒲韭はニラのおひたし。

(注20) 輯註に「任昉が述異記に洞庭湖中に釣洲有り。昔、范蠡、扁舟に乗つて此に至る。風に遇ひ洲上に釣り、石を刻して記す焉、一陂有り、陂中に范蠡魚有りと」と。『述異記』の巻上に見える。

(注21) 樊川は、長安の万年県(今の陝西省長安県の章曲・杜曲

一帯の地。風光明媚で、当時貴族の別荘が多くあった。杜甫の「九日五首」其四(詳註卷二十)に「古里樊川の菊、登高す素湫の源」と。ちなみに、元・李好文『長安志図』巻中には「天下の奇処、関中の絶景」と称賛している。

(注22) 顧宸『註解』に「北送関山は公の韋が長安に帰るを送るなり。南遊花柳は公の自ら南に遊ばんと欲するなり」と。また薛益『分類』に「范蠡が船は自ら舟居を謂ふ」と。『註解』は宇都宮逕庵の増広本に、「分類」は増広本および詳註に挙げる。

ちなみに、鈴木虎雄『杜少陵詩集』(卷二十三)も「詳註」に拠つて「南遊」および「范蠡が船」は杜甫自身について言うと言き、後半四句を「おまへはこれから北の方へゆくならば、関山に雨雪が霽れ開くであろう、こちらは南にぶらついてゐると花や柳に雲煙がたちこめる。あなたはこの洞庭の春げしきと別れることを悲しまれるが、わたくしは范蠡の船を泛べて蝦菜をたべながら故郷へ帰ることを忘れた様な様子をしてをる。(じつはなかなかさうではないのだ、との意ならん。)」と解する。

《洞庭の春色》は、とりもなおさず上の《花柳》がそうである。(公子を悲しむ)は、貴介(やんごとなき)公子にしてこれほどまでに落魄(うらぶれ難儀)するのを悲しむのである。『楚辭』に「公子を悲しみて未だ敢へて言はず」と。ここではこれを用いる。(蝦菜)は、わが国の俗にいわゆる雑肴。馬永卿『嬾真子』に曰く、「浙人海錯を呼びて蝦菜と為す」、公の詩に「風俗園蔬に当つ」と、とりもなおさずこの意である。呉若本は《鮭菜》に作る。(鮭)、字音は鞋、呉地方の人は魚菜の総称をいう。『世説』に「庾杲之は清貧にして、食うに唯だ韭菹・蒲韭・生韭あるのみ。任昉之に戯れて曰く、誰か謂ふ庾郎貧なりと。食する毎に鮭菜常に二十七種有り」というのが、そうである。(忘帰)は、「豈に帰ることを忘れんや」と訓ずる。(范蠡が船)は、扁舟にて漂泊(さすらい旅)すること。やはり韋七を指して言う。任昉『述異記』に「洞庭湖中に釣洲がある。昔、范蠡が扁舟に乗つてここに至り、風に遇つて、洲上に釣り、石に刻んで記した」と。ここはその地に就いてこの故事を用いるので

ある。《公子》といい《帰ることを忘れんや》という、前半部に照応する。そもそも洞庭の風景は壯観と称せられるとはいえず、郷里の樊川の比ではない。とどのつまりは辺鄙の《春色》にすぎない。ましてや《花柳》は蕭索（ひっそり）とし、風煙がなお《塞》つていれば、なおさらのことだ。なんとも《韋曲》の《公子》にしてこの地に飄零（おちぶれ流浪）しており、自分は深く憐んでこれを《悲》しむ。他郷での生活はとりわけ難儀だ。《鮭菜》をばやと給し、清貧固に窮す。ほとんど《范蠡が船》の漂泊して釣洲に身を寄せるかのようで、その憂いにたえぬこと、やはりすではなはだしい。どうして《帰ることを忘》れ、自ら安んじて《韋曲》の家を憶わないうでおられようか。後半部はもっぱら韋七を《悲》しんで自ら《悲》しむ意がそこに含まれている。すべて公の詩は自らを憐んで人を憐れみ、情深く意切（ねんごろ）にして、人を感泣させる。とりわけ仰ぎ慕うゆえんである。諸註に《北走》の句は韋七が長安に帰るのを送り、《南遊》の句は公が衡州に赴こうとし、《范蠡が船》は自ら舟居をいうとしているのは、どれもよくない。

131 寄常微君^(注1)

天子ノ召命^(注2)曰^(注3)徴^(注4)。處士被^(注5)徴^(注6)不^(注7)起^(注8)曰^(注9)徴士^(注10)。稱^(注11)徴君^(注12)尊^(注13)之^(注14)也。此在^(注15)雲安^(注16)時^(注17)作^(注18)。編次宜^(注19)在^(注20)前卷^(注21)。公雲安^(注22)客居^(注23)、常微君來見^(注24)、見^(注25)于本集^(注26)。尋^(注27)起^(注28)官^(注29)于開州^(注30)。蓋有^(注31)萬不^(注32)可^(注33)已^(注34)者^(注35)。公爲^(注36)寄^(注37)此^(注38)以慰^(注39)之^(注40)也。

(注1) 何か基づくところあるのか、不明。訳注稿(七)、044「嚴公仲夏駕を草堂に枉げらる、兼て酒饌を携ふ、寒の字を得」詩の詳解にも同様の注。ちなみに、清・趙翼（字は欧北。一七二七―一八一四）の『陔餘叢考』巻三十六に「学行の士の詔書を経て徴召せられて仕へざる者有り、徴士と曰ふ。之を尊称すれば則ち徴君」と。
(注2) 原文は曰字の下に「二」点を誤まって「二レ」に作る。今、これを改める。

(注3) なお、永泰元年（七六五）、雲安での作に「常微君に別る」詩（詳註巻十四）があり、次のように詠する。

兒扶猶杖策 臥病一秋強 兒に扶けられ猶ほ策を杖く、病に臥す一秋強

白髮少新洗 寒衣寬總長 白髮少なるも新たに洗ひ、寒衣寬にして総て長し

故人憂見及 此別淚相望 故人憂へ及ばる、此の別れ涙相望む
各逐萍流轉 來書細作行 各おの萍を逐ひて流転す、來書細かに行

を伴さん

(注4) 本詩の第七句に「開州夏に入りて知る涼冷ならん」とあるのによる。
(注5) 釈大典『杜律發揮』に（注9）に挙げた箇所が続いて「常蓋為^(注10)州官^(注11)、出^(注12)不^(注13)得^(注14)已^(注15)也。惜^(注16)且憐^(注17)之^(注18)。至^(注19)末^(注20)慰^(注21)之^(注22)」と。

天子の召命を徴という。處士で徴されて起たないのを徴士という。《徴君》と称するのは、これを尊ぶのである。この詩は雲安にありし時の作。編次は前巻にあるのがふさわしい。公が雲安の旅住まいに《常微君》がやって来て会ったことは、本集に見える。ついで仕官して開州で官職に就いた。けだし万やむべからざる事情があったのであろう。公は、そのためこの詩を寄せて慰めるのである。

白水青山空^(注1)復春^(注2) 徴君晚節傍^(注3)風塵^(注4)

徴君向^(注5)隱^(注6)於白水青山之間^(注7)、今出^(注8)就^(注9)仕途^(注10)爲^(注11)風塵中^(注12)人^(注13)、則山水無^(注14)主、煙霞寂寞^(注15)、故^(注16)曰^(注17)空復春^(注18)。晚節^(注19)謂^(注20)老境^(注21)、傍^(注22)風塵^(注23)謂^(注24)奔走^(注25)宦途^(注26)。諸註以爲^(注27)諷刺^(注28)。若如^(注29)其說^(注30)、宜^(注31)婉^(注32)而成^(注33)章^(注34)。豈可^(注35)如是^(注36)直^(注37)敘^(注38)其事^(注39)乎。公之忠厚必不^(注40)然^(注41)也。

(注6) 薛益『分類』（巻二、簡寄）に「空復春とは、徴君向に白水青山の間に隠れ、今已に召に応じて去るときは、則ち山水主無く空しく自ら春なり」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注7) この言い方、晩唐・高駢の「王昭符進士の洞庭の趙先生に贈るに和す」詩（『唐詩品彙』巻八十九）に「煙霞寂寞として人の至る無く、唯だ漁翁の洞庭を過ぎる有るのみ」と。但し、《寂寞》の二字、『全唐詩』（巻

五九八)は〈滄泊〉に作り、「一に寂寞に作る」と。

(注8)『夜航詩話』巻三に「風塵も亦た数義有り」と述べるなかに、「^{ひろ}泛く宦途を指して言ふ」と。

(注9) なお、釈大典『杜律發揮』に「此詩詳^レ味^ハ之^マ、非^ニ諷刺^{スル}者^ニと」。

〈徵君〉は、先に〈白水青山〉の間に隠れ、今は出でて仕途に就き〈風塵〉中の人となっている。とすれば〈山〉〈水〉には主^{ある}なく煙霞(美しい景色)も寂寞(ひっそり)としている。それゆえ〈空しく復た春〉という。〈晩節〉は老境、〈風塵に傍ふ〉は宦途に奔走すること。諸註は諷刺しているとみなすが、もしもその説の通りなら、婉曲にして章を成すのがふさわしく、どうしてこのように直接その事を述べる事ができようか。公のまごころの厚さからしてきつとそうではない。

楚妃堂上色殊^レ衆^ニ 海鶴階前鳴^テ向^レ人^ニ

上^レ句言^ハ未^レ出^シ時^ヲ。古楚宮多^ニ美人^一、故^ニ就^ニ其^ニ地^ニ用^レ之^ヲ、以^ニ稱^ス三^ニ意^一。邵註^ニ乃^レ謂^フ、此亦微詞、不^ニ以^ニ三^ニ丈夫^一許^サ之^ヲ。雖^レ褒^ス而實^ハ貶^ス也。固陋可^レ笑。下^ノ句言^ハ出^シ仕^後。海鶴本^ニ翔^ス滄洲^一之天^ニ、不^ニ下^ニ與^ニ雞鶩^一爲^ニ伍^一。今爲^ニ人^一牢籠而馴^ニ庭階^一之間^ニ、乃^レ低^レ顔^ヲ辱^メ身^ヲ、向^ニ人^一而鳴^ク。良^ニ可^ニ深^ク憐^ム也。嗚呼、若^{コト}人^ニシテ而^ニ至^ニ于^ニ此^一、雖^レ出^ニ於^ニ不^ニ可^レ已^一、豈勝^ニ懷^ニ慨^一之^ニ至^ニ哉^一。

(注10) 薛益『分類』に「楚妃は美女、衆に絶するの色有り。以て徵君の操行潔白、衆人に過ぐるに比するなり」と。宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

(注11) 釈大典『杜律發揮』に(注5)に挙げた箇所に続けて「楚妃ノ句、即離騷以美人比君子意。邵以爲^レ不^ニ以^ニ三^ニ丈夫^一許^サ之^ヲ、可^レ笑」と。

邵は、明・邵傳のこと。次の(注12)参照。後漢・張衡「四愁詩四首并びに序」(『文選』巻二十九)に「屈原は美人を以て君子と爲す」と。

(注12) 邵傳『集解』に「默翁曰く」として「楚妃の一語、微詞なり。大丈夫を以て之を許さず。褒すと雖も実は貶するなり」と。微詞は、微辭。遠回しな批判。

(注13) 滄洲については、訳注稿四、014「曲江酒に対す」詩の第七句にこの語

が見え、詳解に「滄洲は江湖隱逸の境を謂ふ」と。

また『夜航詩話』巻二に「詩家毎に滄洲を用ふ。蓋し滄浪を取り名と爲す。只だ江海の境を称す、朝市に対して言ふのみ。必ずしも仙島を指さざるなり」と。014の(注21)参照。

上の句は、まだ出仕しない時のことを言う。古代の楚の宮殿には美人多く、それゆえその地に就いてこれを用い、それで〈徵君〉が操行高潔で、衆人から高く拔き立てられていることを称する。とりもなおさず「離騷」に美人を以て君子に比すの意。邵註になんと「これもやはり微辭で、丈夫(ひとかどの人物)」というふうには認めなかった。一見褒めているようだが実は貶めているのである」というのは、固陋なること全くなのお笑い草だ。下の句は、出仕の後を言う。〈海鶴〉は、もともと滄洲の天(江海の自由な天地)に翔け、つまらぬ鶏や鶩と伍(なかも)をなさないので、今では人に囲い込まれて庭や階の間に馴れ、なんと顔をふせ身を辱めて、〈人〉に〈向〉つて〈鳴〉く始末。まことに深く憐れむべきである。ああ、このような人にしてこんなふうになつてしまふのは、やむをえない仕儀から出たとはいえ、慷慨の至りにたえようか。

萬事糾紛猶絶^レ粒^ヲ 一官羈絆實^ニ藏^ニ身^一

※糾紛…セハシク 羈絆…ヒキトメラレテ

糾^レ紛^ハ言^ハ事務雜亂^一也。絶^ニ粒^一辟^レ穀^一也。此只謂^ニ靜修之術^一耳。羈絆^ハ謂^ニ人^一爲^ニ官吏^一、身不^ニ自由^一、似^ニ牛馬^一被^ニ羈絆^一也。藏^ハ身^ハ言^ハ爲^ニ吏隱^一以^ニ涉^ニ世^一也。徵君隱居之時、曾^ニ靜修之術^一。今雖^ニ吏務冗劇^一、苟^モ有^ニ閒暇^一、則從^ニ事^一于^ニ此^一、爲^ニ微官^一羈絆^一、實^ニ爲^ニ藏^ニ身^一計^一、如^ニ東方朔^一避^ニ世^一金馬門^一、視^ニ富貴^一如^ニ浮雲^一耳。此明身陷^ニ風塵^一中^一、而非^ニ名利^一俗吏^一、故^ニ特^一曰^ニ實^一。一字詩中ノ眼目。蓋雖^レ降^ニ志^一而不^ニ枉^レ道^一、雖^レ辱^ニ身^一而不^ニ汚^レ操^一矣。

〔注14〕 邵傳『集解』に見える。

〔注15〕 薛益『分類』に「糺紛は難乱の貌」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

〔注16〕 邵傳『集解』に「粒を絶つは穀を辟くるなり」と。なお、仇兆鰲の『詳註』(巻十四)は『後漢書』独行列伝・范丹「冉」伝の「止まる所は卑陋、時有つて粒を断つとも、窮居して自若」というのを挙げ、食べる米がないと解し、それを承けて鈴木虎雄『杜少陵詩集』(巻十四)は、「貧にして食糧なきをいふ。粒は米のつぶ」と説く。

〔注17〕 邵傳『集解』に〔注16〕に挙げた箇所が続いて「言ふところは事の冗劇に当たつて、静脩の術を廃さず、是れ一官に羈がれて、実に乱に因つて身を蔵すの計を為す、禄を慕ふに非ざるなり」云々と。静脩の術は、道教の養生法を言うのであろう。

〔注18〕 邵宝『集註』(巻二十三、簡寄類) および薛益『分類』に「身を蔵すとは、吏隠と為つて以て禍を避くるなり」と。『分類』は宇都宮遯庵の増広本に挙げるが、〈吏隠〉を誤まつて〈隱吏〉に作る。『集註』は詳説に挙げる。吏隠については、訳注稿(九)、065「院中晚晴、西郭の茅舍を懷ふ」詩の第八句にこの語が見え、詳解に「吏隠は吏にして隠を兼ねる者」と。

〔注19〕 顧宸『註解』に「一官羈絆聊が借りて以て身を蔵す。東方朔が世を金馬門に避くるが如し」と。宇都宮遯庵の両著にも挙げる。前漢・東方朔の歌に「俗に陸沈し、金馬門に避く」と。『史記』滑稽列伝(東方朔)および『漢書』東方朔伝に見える。金馬門は、漢の未央宮にあった門の名。

〔注20〕 『論語』述而篇に「不義にして富み且つ貴きは、我に於いて浮雲の如し」と。

〔注21〕 邵傳『集解』に「志を降すと雖も己れを枉げず、身を辱むと雖も合ふことを求めず矣」と。『論語』微子篇に「其の志を降さず、其の身を辱めず、伯夷叔斉か」とある。

〈糺〉、字音は久(きう)。〈糺紛〉は、事務の難乱するのを言うのである。〈粒を絶つ〉は、辟穀(五穀断ち)である。ただ静脩の術をいうにすぎない。〈羈絆〉は、人が官吏となれば、身は自由でなくなる、牛馬が羈絆(おもがいあしなわ)でつながれるようなものである。

〈身を蔵す〉は、吏隠となつて世を渉ることを言うのである。〈微君〉が隠居していた時、かつて静脩の術を修め、今は吏務繁劇とはいえ、いやしくも閑暇あらば、これに従事して、微官のために〈羈絆〉せられても、〈実に身を蔵す〉計をなすこと、東方朔が世を金馬門に避けたごとくであつて、富貴を視ること浮雲のようであつたのだ。これは身は〈風塵〉中に陥つても、名利に汲汲(せかせか)とする俗吏ではないことを明らかにする、それゆえ特に〈実に〉という一字は詩中の眼目。けだし志を低くするとはいえ道を枉げず、身を辱めるとはいえ節操を汚さなかつたのであろう。

開州入夏知涼冷 不似雲南毒熱新

開州ハ巴郡胸認縣地。東去夔州二百九十里。微君蓋爲其掾屬也。新加盛也。開州涼冷、殊堪避暑。視我居雲南、早夏已苦毒熱、則爲可羨耳。此言其地之可居、聊以慰之也。薛註盧公胥鈔云、此詩字字沈痛、而說者類云諷刺。只因錯會晚節傍風塵一語、遂致通篇皆錯。詩中所述公自告自訴、併以憐及徵君。想寄詩時不知淚下幾行、乃忠厚之至也。而人反猜爲輕薄、被二人說詩、不亦難乎。深戒鑿破混沌、實讀杜詩之要訣也。

〔注22〕 〈南〉字、詳解が底本とした邵傳『集解』は〈安〉に作る。各本も同じ。

〔注23〕 顧宸『註解』に「開州は巴郡の胸認県の地。東のかた夔州雲安県に至ること一百九十里」と。また輯註に「九域志に開州は東のかた夔州雲安県の龍目駅に至ること二百九十里」と。ともに宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

〔注24〕 薛益『分類』に「新は加盛なり」と。宇都宮遯庵の両著にも挙げる。

〔注25〕 顧宸『註解』に前の〔注23〕に挙げた箇所に続けて「夏に入つて猶ほ涼しければ、則ち雲安の秋に至つて倍ます熱すると異なれり。其の地の居る可き言いて、聊か以て微君を慰むるなり」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げるが、「与雲安至立秋二倍熱異矣」と訓点を施すのは、よくない。

(注26) 薛註は、薛益『分類』のこと。それに「盧公胥鈔に云ふ、今の詩の古に及ばざる者は、只だ今辭を費やして説くこと餘地無きが爲耳。杜の常微君に寄す一首の如き、字字沈痛、而して説く者類ね諷刺と云ふ。只だ錯つて晚節風塵に傍ふの一語を会するに因つて、遂に通篇皆錯ることを致す。夫れ風塵に傍ふは猶ほ道路に奔走すと言ふがごとき耳。今少壯にして蹇蹶するは、猶ほ前途を冀ふ。老年の道路に至つては、則ち之を復すること無し矣。此れ最も是れ志士心を傷める処。海鶴の句の若きは、即ち所謂顔を低れ色を下すの地、故人善く誘ふを知る意。況んや鳴きて人に向ふ者は海鶴なり。豈に雞鶩の流ならんや。万事糺紛猶ほ然く粒を絶ち、一官羈絆実以て身を蔵す、此等の艱辛、誰人に向つて語らんや。全く是れ子美自ら告げ自ら訴へて、併せて以て微君に憐及す。想ふに詩を寄せて時に知らず涙下ること幾行ぞ、乃ち忠厚の至りなり。而るに人反つて猜して軽薄と爲す。微君に寄する者難からずや。微君爲る者も亦た難からずや。杜詩当に發揮すべき者甚だ多し。聊か一隅を挙ぐ。引伸触類せば、全部刃を迎へて解かん矣」と。盧公胥鈔は、明・盧世淮(字は德水。一五八八―一六五三)の『杜詩胥鈔』のこと。宇都宮遯庵の増広本にも挙げるが「迎刃而解矣」の「刃」字を誤つて「辨」に作る。

「顔を低れ色を下すの地、故人善く誘ふを知る」は、上水の遺懷」詩(詳註卷二十二)の第九、十句。

(注27) 『莊子』「帝王篇」に見える渾沌の話。南海の帝たる儵と北海の帝たる忽とが、中央の帝、渾沌から丁重なもてなしを受けた礼として、目鼻口など七つの穴のない渾沌のためにこれを鑿ったところ、七日目に渾沌は死んでしまったという。

ちなみに、『夜航詩話』巻一に「嚴維の詩に「柳塘春水漫ち、花塢夕陽遲し」と。劉貢父謂ふ、《夕陽遲し》は花に繋り、《春水漫ち》は柳を須ひざるなりと。東坡の詩に《春江暖かにして鴨先づ知る》と。毛西河謂ふ、《春江水暖》は、定めて該に鴨知るべし。鵝は知らざらんやと。詩を論ずること此の如き、竅を鑿ちて渾沌死せん」と。

中唐・嚴維の作は、五律「劉員外の寄せらるるに酬め」詩(『全唐詩』卷二六三)の頸聯。劉貢父は、北宋・劉攽(字は貢父。一〇二三―一〇八九)。その『中山詩話』に見える。蘇東坡の詩は、七絶「惠崇の春江晚景二首」の其一(『蘇文忠詩合註』卷二六)の承句。毛西河は、

明末清初の毛奇齡(号は西河。一六二三―一七一六)のこと。『西河文集』の詩話目卷五に「嘗て金觀察の許に在り、汪蛟門舎人と宋詩を論ず。舎人、東坡詩の《春江暖かにして鴨先づ知る》、正に是れ河豚の上らんと欲する時》を挙げ、遠く唐人に勝らずやと。予曰く、此れ正に唐人に效ひて未だ能はざる者。《花間路を覓めて鳥先づ知る》、唐人の句なり。《路を覓む》るは人に在り、《先づ知る》は鳥に在り。鳥の花間に習ふを以ての故なり。此の《先》は、人に先んずるなり。鴨の若きは則ち誰に先んぜんや。水中の物、皆冷暖を知る。必ず鴨を以てするは妄なり矣云々と。なお、汪蛟門は汪懋麟(号は蛟門。一六四〇―一六八八)のこと。《花間》の句は、盛唐・張謂の七律「春園家宴」詩(『全唐詩』卷一九七)の第五句。

《開州》は、巴郡胸臆県である。東のかた夔州を去ること二百九十里。《微君》は、けだしその掾属(下級官吏)となつたのであろう。《新》は、加わり盛んなることである。《開州》は《涼冷》で、とりわけ暑さを逃れるには充分である。自分が《雲南「安」》に居て、早《夏》にもう《毒熱》(猛烈な暑さ)に苦しむのに比べてみると、羨ましいとするのである。これはその地の居るべきことを言つて、聊かこれを慰めるのである。薛註に「盧公胥鈔に云う、この詩は字字沈痛であるのに、しかるに説く者はおおむね諷刺だと云う。ただ《晚節風塵に傍ふ》の一語を誤つて理會したもので、かくして一首全体をすべて誤まる結果となつてしまつてゐる。詩中に述べるところは公自ら告げ自ら訴え、併せて《微君》に同情する。想像するに、詩を寄せた時といった涙が幾筋下つたことか、なんともこの上なく厚いまごころである。しかるに人はかえつて勘繰つて軽薄だとみなす。人に詩を説かれるのは、なんとも難しいことだ」と。渾沌を鑿破(無理やり穿鑿)するのを深く戒めること、実に杜詩を読む要訣である。

132 江南「雨」有懷鄭典設

唐書百官志^(金2)「尚寢局有典設^(注3)、掌牀帷茵席鋪設^(注4)、分視汛掃^(注5)之事。又六典^(注6)東宮官有典設郎四人、掌大祭祀湯沐汛掃鋪陳之事。蓋鄭嘗居此職也。大曆二年^(注7)、公在夔州^(注8)、三月自赤甲遷^(注9)漢西^(注10)。蓋公與鄭隔漢水而居^(注11)。春雨中懷鄭^(注12)、而阻水不能相見^(注13)、因有此作也。此及下三首、編次皆當入^(注14)峽中^(注15)部^(注16)。

〔注1〕〈南〉字、詳解が底本とした邵傳『集解』は〈雨〉に作る。各本も同じ。

〔注2〕『新唐書』卷四十七、百官志二、宮官、尚寢局に「司設・典設・掌設、各おの二人。牀帷茵席の鋪設を掌る。久故の者状を以て聞す。凡そ汛掃の事、典設以下分視す」と。汛掃は、水で洗い拭くこと。

〔注3〕『大唐六典』卷二十六、典設局に「典設郎四人、從六品下」と。また「典設郎は、湯沐・汛掃・鋪陳の事を掌る。凡そ大祭祀、(中略)前一日、幄坐を正殿の東序及び室内に設け、俱に西向」云々と。

〔注4〕宇都宮遯庵の増広本に挙げる明・単復の年譜、大曆二年の条に「公、夔州に在り。春、居を赤甲に遷す。三月、漢西に遷る」と。

『唐書』百官志に「尚寢局に典設有り、牀帷茵席の鋪設を掌る。汛掃の事を分ち視る」と。また『六典』に東宮の官に典設郎四人あり、「大祭祀の湯沐・汛掃・鋪陳の事を掌る」と。けだし、鄭はかつてこの職にいたのである。大曆二年(七六七)、公は夔州にあり、三月に赤甲から漢西に遷った。けだし、公は鄭と漢水を隔てて住まいしていた。〈春雨〉中、鄭を懷つても水に阻まれて会うことができず、それでこの作があるのである。この詩および下の三首は、編次はいずれも当然峽中の部に入れなければならない。

春雨闇闇塞峽中^(注17) 早晚來自楚王宮^(注18)

※早晚：イツノマニカ

塞^(注19)、謂^(注20)填^(注21)滿^(注22)。峽中^(注23)。兩崖對峙、一江貫流^(注24)。忽雨氣填滿^(注25)、全然埋合^(注26)也。早晚^(注27)猶^(注28)言^(注29)何^(注30)レ^(注31)時^(注32)。驚^(注33)不意^(注34)至^(注35)也。蓋目今晴江^(注36)、晴景、轉眄^(注37)間、急雨空濛、故曰^(注38)「早晚^(注39)」、怪^(注40)之^(注41)辭^(注42)ナリ。楚

王宮^(注43)、襄王^(注44)ノ故蹟、在^(注45)巫山縣^(注46)。東去^(注47)夔^(注48)一百三十里。來^(注49)自^(注50)楚王宮^(注51)言^(注52)巫山^(注53)ノ神女^(注54)行^(注55)雨^(注56)而來^(注57)。蓋東風雨、故云^(注58)。舊說^(注59)「早晚^(注60)」所謂朝^(注61)行雲暮^(注62)行雨^(注63)、非也。

〔注5〕『夜航余話』巻上に「早晚ヲ、イツカト訓スルハ、多少有無ナト、同列ナリ、早キカ晩キカ何ニハト云コトニテ、將來ヲ期スル語ナリ」と。ちなみに、釈大典『詩語解』巻下、早晚の条には「春雨黯黯塞峽中、早晚來自楚王宮、言朝暮也」といい、あさばんの意とする。大典の説は、小川環樹『唐詩概説』(中國詩人選集第一集別巻。岩波書店、一九五八年。後に岩波文庫、二〇〇五年)「唐詩の助字」、「いつか」の条にもこれを挙げる。なお、張相『詩詞曲語辭匯釋』巻六は「猶は隨時と云ふがごときなり。日日なり」と解する。

〔注6〕ちなみに、後出、137「曉に公安を發す。數月此の県に憩息す」詩にこの語が見え、「ミカエルマニ」と左訓を施し、詳解に「眇音麵。斜に視るなり。転眇は廻視なり」と注する。

〔注7〕楚王宮については、沢注稿(注)112「返照」詩の詳解に「楚の襄王の遊びし所の宮跡、巫山県の北に在り」と。また『大明一統志』巻七十、夔州府に巫山県は「府城の東一百三十里に在り」と。

〔注8〕顧宸『註解』に「朝には行雲、暮には行雨、云ふ所早晚^(注9)か来るなり」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

〈塞〉は、峽中に填滿すること。両側の崖が対峙し、一筋の江水が貫き流れる。忽ち〈雨〉気が充満し、すっかり埋めつくすのである。〈早晚〉は、何れの時(いつ)というのとほぼ同じ。不意に至るのに驚くのである。けだし目の前にある晴れわたった長江の景色が、転眇(みかえる)間に、急な〈雨〉で空濛(うす暗くぼんやり)となる、それゆえ〈早晚〉というのは、これを怪しむの辞。〈楚王宮〉は、襄王の故蹟で巫山県にある。東のかた夔を去ること一百三十里。〈楚王宮自り來たる〉は、巫山の神女が雨を行らして來たるのを言う。けだし東からの風雨であるから云う。旧説に〈早晚〉はいわゆる「朝に行雲、暮に行雨」だとするのは、よくない。

亂波紛披已ニ打岸ヲ 弱雲狼藉不レ禁ヘ風ニ

紛披ハ雜亂ノ貌。王子淵^カ笙^ノ賦^ニ飄風紛披ト。亂波紛披ハ風浪沸騰^{スル}也。第二句言^ニ東風驟^ニ起^テ送^テ雨^ヲ來^ラ、故^ニ是^ハ句直ニ承^レテ之^ヲ、言^ニ其^ノ颯沓^ノ之勢^ヲ。已^ノ字緊^{シク}接^ニ上^ノ早晩^ニ。弱雲ハ殘雲也。蓋風甚急暴、故^ニ雨被^テ吹捲^ニ而西^ニ過去^リ、殘雲披靡、旋爲^ニ晴天^ト也。藉^ハ布也。狼必藉^テ草^ヲ而臥^ス。去^ハハ則穢亂、故^ニ凡^ノ物之縱橫敗亂^ヲ謂^ニ之^ヲ狼藉^ト。此言^ニ雲態頽靡之象^ヲ。禁平聲、勝當也。二句一俯一仰之景、疾風甚雨、天地混亂^{スル}也。前皆言^ニ風勢^ヲ、而至^レ此始^ニ出^ス風^ノ字^ヲ、亦與^ニ幽風^ノ十月蟋蟀^ノ同法。

(注9) 前漢・王褒(字は子淵)の「洞簫の賦」(『文選』卷十七)に「其の仁声は則ち飄風の紛披容与として恵みを施すが若し」と。仇兆鰲の詳註卷十八に挙げる。紛披・容与は、双声語。

(注10) 宇都宮逕庵の増広本に「小学の註に云ふ、狼藉は草を藉いて臥す。去るときは則ち穢亂、故に物の散乱するを狼藉と曰ふ」と。『小学』は朱熹の撰。延宝八年(一六八〇)刊の明・陳選句読、宇都宮逕庵詳解『小学句読口義詳解』卷九に「顔氏家訓に曰く」として、その治家篇の一節を挙げる中に「或いは几案に狼藉し、部帙を分散す」とあり、その注に見える。

(注11) 邵宝『集註』(卷二十三、天文類)および薛益『分類』(卷二、天文)に「禁は、勝当なり」と。『分類』は宇都宮逕庵の増広本に、『集註』は詳説に挙げる。ちなみに、『正字通』に「又た侵韻。音は今。広韻に力の勝ふる所なり。増韻に当なり、劫持なり」と。

(注12) 疾風甚雨の語、『礼記』玉藻篇の「若し疾風迅雷甚雨有れば、則ち必ず変ず」と見える。

(注13) 訳註稿(5)、116「九日」二首其二の(注13)参照。

〈紛披〉は、雑乱のさま。王子淵「笙の賦」に「飄風紛披乱る」と。

〈波紛披〉は、風浪が湧き立つことである。第二句は東風がにわかになり起り〈雨〉を送って来るの言う。それゆえこの句は直ちにこれを承け、その颯沓(さあつと)と通過するの勢いを言う。〈已〉字はとても急速で激しく、そのため〈雨〉が吹き捲られて西に過ぎ去

り、残りの〈雲〉は〈風〉にあおられて散り散りとなり、たちまち晴天となるのである。〈藉〉は、布(しく)である。狼は必ず草を藉いて臥す。去った後は穢亂(ぐちゃぐちゃ)で、それゆえすべて物の無秩序に敗乱するのを〈狼藉〉という。これは雲の崩れた姿を言う。〈禁〉は平声、勝(たえる)当(あたる)である。二句は一俯一仰(わずかな間)の景色の変化で、疾風甚雨に天地が混乱するのである。前にどれも風の勢いを言うが、ここに至ってやっと〈風〉字を出だす、やはり『詩経』幽風の「十月蟋蟀」と同じ叙述法。

寵光^{シテ}蕙葉^ヲ與^ニ多碧^ヲ 點^ニ注^{シテ}桃花^ニ舒^ニ小紅^ヲ

※寵光：メグミウルホス 點注：シタバリヌラス

寵光ハ詩ノ小雅ノ語。此言^ニ雨師潤澤之恵、如^レ蒙^ニ寵愛恩光^ヲ也。蕙ハ蘭ノ屬也。與^ニ多碧^ヲ、雨與^ニ之^ニ色^ヲ而増^ニ深碧^ヲ也。點^ハ雨點也。

魏ノ鍾會^カ孔雀^ノ賦^ニ五色點注^{シテ}華雨參差^ト。此轉用^ニ言^ニ雨點^ノ所^ニ注^ク也。舒^ハ小紅^ヲ、桃花始^ニ小^ニ開^ク也。二句新晴之景、頓^ニ増^ニ如^レ是^ノ佳況^ヲ、爽然^{トシテ}快^ニ人^ノ心目^ヲ、閨閣^ノ鬱悶^ヲ如^レ洗^ガ、可^レ謂^ニ煩惱即菩提^ト矣。所^ニ以^ニ興^{シテ}懷^ニ良友^ヲ而恨^ニ不^レ得^ニ共^ニ玩^ニ也。

(注14) 『詩経』小雅・蓼蕭に「既に君子を見る、龍を為し光を為す」とあり、毛伝および朱熹の集伝に「龍は龍なり」と。仇兆鰲の詳註に挙げる。なお、鄭箋には「龍を為し光を為すは、天子の恩沢光耀、己れに被及するを言ふなり」と注する。

ちなみに、『夜航詩話』卷六に、偏枯について述べたなかに、「蕙葉を寵光して多碧を添へ、桃花に点注して小紅を舒ぶ、寵光は詩小雅の語、点注は鍾会の孔雀賦に見ゆ。(中略)正に斤両相称ふを得。詩律の細、此の如し。真に一字として来歴無きは無し。杜詩豈に輕説す可けんや」とある。

(注15) 例えば、『広韻』去声十二霽韻に「蕙、香草、蘭の属」と。

(注16) 邵宝『集註』および薛益『分類』に「点は、雨点なり」と。『分類』は宇都宮逕庵の増広本に、『集註』は詳説に挙げる。

(注17) 三国魏・鍾会「孔雀の賦」(『藝文類聚』卷九十一に引く)に「五色点

注して、華羽参差たり」と。仇兆鰲の詳註に挙げる。

(注18) 例えば、『壇經』般若品に「凡夫即仏、煩惱即菩提」と。ちなみに、『夜航余話』巻上の蘇軾(東坡)の七絶「春夜」について解説したなかに「境界忽二打替リタルコト、煩惱即菩提ト謂フベシ」とあり、掛斐高校注に「ここでは、相反するものが入れ替わることの喩えとして用いた」という(新日本古典文学大系『日本詩史 五山堂詩話』、岩波書店)。

(注19) 興は、詩の六義の一。例えば、宋・羅大経『鶴林玉露』(慶安元年「一六四八」刊本)の巻十、詩興に「蓋し興とは、物に因つて感触し、言此に在り、而して意彼に寄す」と。

〈寵光〉は、『詩経』小雅の語。ここは雨師(雨の神)の潤沢の恵みが、寵愛恩光を蒙るがごときを言うのである。〈蕙〉は、蘭の属である。〈多碧を与ふ〉は、〈雨〉がこれに色を与えて深碧を増すのである。〈点〉は、雨点(あまつぶ)である。三国魏の鍾会「孔雀の賦」に「五色点注して華雨」[羽]参差たり」と。ここは転用して雨点の注ぐところを言うのである。〈小红を舒ぶ〉は、桃花がやつとちよつと開くことである。二句は晴れ上がったばかりの景色で、とみにこのような佳況を増し、爽然(さつぱり)として人の心目を快くする。〈闇闇〉(まっくらくら)の鬱悶は洗うがごとくきれいになくなり、煩惱即菩提といえよう。良友を懐うことに興して(思いを起こして)共に賞玩することができないのを恨むゆえである。谷口ノ子眞正憶汝 岸高ノ瀧滑ニシテ限ル西東

谷口ノ子眞、漢時ノ隱士。見鄭駙馬洞中詩註。此亦因姓ニ用之。瀧ハ奴浪反。夔人、方言謂江水横ニ通ニ澗流ニ處ニ爲レ瀧。居人分ニ其左右ニ謂之ヲ瀧東瀧西ト。鄭ハ蓋居ニ瀧東ニ也。滑ハ謂ニ澗底石滑ニ。雨前ニ水淺ク石見、一雨暴ニ漲ル、故ニ怯ニ滑倒レシコトヲナリ。不能ニ涉コト也。一本作レ闇、非ナリ。蓋鄭典設谷口ノ隱居、人、與レ境皆今之子眞。但隔ニ于瀧之東西、岸又高ク水又滑、不能ニ相就ニト耳。

(注20) 訳注稿(一)、002「鄭駙馬潜曜洞中に宴す」詩。

(注21) 『集千家註』(卷十六)の「瀧西寒望」詩に挙げる鄭昂の注に「瀧は奴浪の切」と。字音はドウ。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。但し、『集韻』では去声四十一漾韻に「瀧、水名。蜀に在り」とみえ、字音はジョウ。

(注22) 基づくところあるのか不明。ちなみに、『秋日夔府詠懷、鄭監・李賓客に寄せ奉る一百韻』詩(詳註卷十九)の第二二八句「市鑿瀧西の巔」の原注には「江水の山谷に横通する処、方人は之を瀧と謂ふ」と。また邵傳『集解』には「澗水横に山谷に通ず、之を瀧と謂ふ」と。さらに南宋・陸游(号は放翁。一一二五—一二〇九)の『入蜀記』巻六に「土人、山澗の流れの江に通ずる者を瀧と謂ふ」と。なお、瀧については、古川末喜『杜甫農業詩研究』(知泉書館、二〇〇八年)第三部第一章第四節「瀧、赤甲、白塩山」参照。また『入蜀記』には天明三年(一七八三)の和刻本があり、最近の現代語訳として岩城秀夫氏による平凡社東洋文庫本(一九八六年)がある。

(注23) 錢注(卷十六)および輯註(卷十六)に〈滑〉の下に「一に闇に作る」と注する。輯註は、宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

ちなみに、詳註も錢注・輯註と同じだが、鈴木虎雄『杜少陵詩集』(巻十八)は「滑の字一に闇に作る、闇に従ふ。東瀧水のかはばのひろきこと」とする。

〈谷口〉の鄭〈子眞〉は、漢代の隱士。「鄭駙馬洞中」詩の註に見える。ここもやはり同姓にちなんだこれを用いる。〈瀧〉は、奴浪の反。夔人の方言に江水が横に山間の溪流に通ずるところを〈瀧〉という。土地の者はその左右に分かれて住み、これを瀧東・瀧西という。鄭はけだし瀧東に居たのであろう。〈滑〉は、澗底の石が滑りやすいこと。〈雨〉の前には水が浅く石があらわれていたのが、一度の〈雨〉でにわかに漲って、それゆえ〈滑〉って転倒するのを怯れて涉ることができないのである。一本に〈闇〉に作るが、よくない。けだし、〈鄭典設〉の〈谷口〉の隱居は、その人という環境といい、いずれも今の〈子眞〉である。ただ〈瀧〉の東西を隔て、〈岸〉が〈高〉くもあり水が〈滑〉りもし、近づくことができないのだ。

133 瀧瀬

瞿唐峡口ノ瀧瀬堆在蜀江之心ニ、水東迫而激シ、如レシテ(注1)建瓴而下。峡中第一ノ險灘。行舟動(注2)輒覆没。陸放翁入蜀記ニ瞿唐峡兩壁對シ、上入(注3)雲霄ニ、其平(注4)如削成。仰視天(注5)如匹練。然。瀧瀬堆ハ碎石積成。冬出(注6)水二十餘丈、方(注7)夏秋水漲時、水又高(注8)於堆(注9)數十丈。吁、可畏也。

(注1) 建瓴は、屋上から瓶の水をくつがえすこと。勢いの強い喩え。『史記』高祖本紀に「猶ほ高屋の上に居て、瓴水(注10)を建すがごときなり」と。

(注2) 訳注稿(八)、055「將に荆南に赴かんとして李劍州弟に寄別す」詩の頸聯に「路瀧瀬を経双蓬髮、天滄浪に入る一釣舟」とあり、その詳解に「瀧瀬堆は瞿唐峡口に在り。峡を下る第一の惡瀬。舟船動もすれば輒ち覆没す」と。なお、杜甫に巫峡で転覆した舟を見て詠じた「覆舟」二首(詳註卷十八)がある。

(注3) 南宋・陸游『入蜀記』卷六に「瞿唐峡兩壁對し聳えて、上は雲霄に入り、其の平らかなること削り成すが如し。仰いで天を視れば匹練の如し。然して水已に落ち、峡中平らかにして油盎の如し。(中略)閣の西門正に瀧瀬堆に對す。堆は碎石積成す。冬は水を出づること二十餘丈。土人云ふ、夏秋水漲る時に方りては、水又た堆より高きこと數十丈」と。

瞿唐峡の口にある(瀧瀬)堆は、蜀を流れる長江の真ん中にあり、水流が集まり迫って激しくぶつかり、高い所から瓶の水を覆したかのように勢いよく下る。峡中第一の險灘で、行舟はともすれば転覆沈没する。陸放翁の「入蜀記」に「瞿唐峡の兩壁は向き合って聳え立ち、上は雲霄(くもい)に入って、その平らかなること削つてできたようである。仰いで天を視れば一匹の練(ねりきぬ)のようである。瀧瀬堆は、砕けた石が積み重なってできた。冬、水面より顔を出すこと二十餘丈、夏や秋の水が漲る時には、水かさはさらに堆よりも高きこと數十丈」と。ああ、こわいことだ。

瀧瀬既ニ没(注11)孤根深シ、西來水多(注12)愁(注13)大陰(注14)※愁：アハレナリ

孤根ハ瀧瀬堆ノ根(注15)。時夏ニシテ水漲リ沈没シテ不見へ、其入(注16)レト水ニ不知ニ幾許ヲ、故ニ日深ト。西來ハ言(注17)遙ニ自(注18)岷山之源(注19)。岷江至(注20)嘉州ニ而沫水自(注21)嘉州一合(注22)大渡河ニ以會(注23)之。至(注24)敘州ニ而馬湖江會(注25)之。又三百餘里而南廣江會(注26)之。至(注27)瀘州ニ而内江又自(注28)資簡一會(注29)之。至(注30)重慶ニ而嘉陵江自(注31)利聞果合等ノ州一會(注32)之。而黔江合(注33)南夷諸水會(注34)之。至(注35)萬縣ニ而開江水自(注36)開達等ノ州一會(注37)之。夫然シテ後總テ而入(注38)峡ニ、是江自(注39)レテ峡而西受(注40)コト大水凡(注41)ハ、水勢之盛ナル可想見。故ニ日西來水多(注42)愁(注43)冥渺之意。舊說(注44)人愁(注45)之、謬(注46)リ矣。大陰(注47)極陰也。言(注48)陰氣極深(注49)也。或ハ以爲(注50)水神ト、非也。

(注4) 〈大〉字、詳解が底本とした邵傳『集解』は〈太〉に作る。各本も同じ。

(注5) 薛益『分類』(卷二、地理)に「孤根は瀧瀬堆の根」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注6) 邵傳『集解』に「江は源を岷山に発す、故に西來と曰ふ、顧宸『註解』もほぼ同じ。『註解』は、宇都宮遯庵の両著にも挙げる。

(注7) 明・楊慎『丹鉛總錄』卷二、大江の条に「江は岷山に出づ。其の源は實に西戎の万山自り来る。嘉州に至つて而して沫水嘉州自り大渡河に合し、夷界の十山を穿ちて以て之に會す。叙州に至つて而して馬湖江之に會す。又た三百餘里にして而して南広江之に會す。瀘州に至つて而して内江又た資・簡自り之に會す。重慶に至つて而して嘉陵江、利・閬・果・合等の州自り之に會す。涪州に至つて而して黔江南夷の諸水に合して之に會す。万県に至つて而して開江水、開・達等の州自り之に會す。夫れ然る後、総べて而して峡に入る、是れ江、峡自りして西、大水を受けること凡て八」と。『升庵集』卷七十六、大江の条にも見える。詳解の「沫」字は、〈沫〉の誤り。

(注8) 釈大典『杜律發揮』に(注10)に挙げた箇所が続けて「愁、冥渺之意」と。訳注稿(七)、048「涪城県香積寺の官閣」詩の(注9)も参照。冥渺は、はるか遠く微か。双声語。

(注9) 例えば、薛益『分類』に「愁ふは、之を愁ふるなり」、顧宸『註解』に「大陰を愁ふとは、雨多きときは則ち陰る。人をして愁へしむ」と。

いづれも宇都宮遷庵の増広本に挙げる。

(注10) 釈大典『杜律發揮』に「太陰(極陰也)」と。

(注11) 邵傳『集解』に「太陰は水神なり。水漲つて瀝瀝没る、水神と雖も、亦た之が為に愁ふ矣」と。

《孤根》は、《瀝瀝》堆の《根》。季節は夏で水漲り没して見えず、その水に入ることどれほどかわからない、それゆえ《深》という。《西来》は、遙かに岷山の源よりするの言う。岷江は嘉州に至つて沫「沫」水が嘉州より大渡河に合流してこれに会する。叙州に至つて馬湖江がこれに会する。さらに三百餘里にして南広江がこれに会する。瀘州に至つて内江がさらに資・簡よりこれに会する。重慶に至つて嘉陵江が利・閬・果・合などの州よりこれに会する。涪州に至つて黔江が南夷の諸水を合流してこれに会する。万県に至つて開江水が開・達などの州よりこれに会する。そうして後に総べて峽に入る。長江が峽より《西》で大きな水を受け入れること全部で八、《水》勢の盛なさまをば、想い描くことができよう。されば《西来水多し》という。《愁》は、冥渺(はるか遠く微か)の意。旧説に人これを愁うとするのは、間違いだ。《大「太」陰》は、極陰である。陰氣が極めて深いのを言うのである。或いは水神とみなすのは、よくない。

江天漠漠鳥雙下 風雨時時龍一吟

※双下…ツレダチテコエテユク 一吟…ウナル

此正大陰之象。江天漠漠、言水與天接、渺漫無際。江水爲瀝瀝所障、故上流如此也。下流謂向二下流而去上。水勢危險、人不得過。惟見飛鳥下、龍一吟喜水壯、而吟也。風雨晦冥、江山蕭森、惟聞蛟龍時一吟、可畏尤甚矣。蓋亦因其勢、想像而言耳。

(注12) 顧宸『註解』に「江天漠漠、風雨時時は正に太陰の象」と。宇都宮遷庵の両者にも挙げる。

(注13) 顧宸『註解』に「龍一吟は水勢壯闊を喜んで吟ずるなり」と。宇都宮遷庵の両者にも挙げる。

これはまさに《大「太」陰》の象。《江天漠漠》は、水が天と接して渺漫(ひろびろ)と広がって際限がないの言う。江水は《瀝瀝》にさえぎられており、それゆえ上流はこのようである。《下る》は、下流に向つて去ること。水勢は危険で、人は通過することができず、ただ飛《鳥》の《下》り去るのを見るばかりだ。《龍一吟》は、水の壮んなのを喜んで《吟》ずるのである。《風雨》が晦冥(暗く閉ざ)し、江山は蕭森(うす暗くひっそり)として、ただ蛟《龍》が時おり《一吟》するのを聞くのみで、おそろしいこともつともはなはだしい。けだしやはりその勢いによつて想像して言うのだ。

舟人漁子歌 回棹首 估客胡商淚滿襟

※回首…ワキニミヤル 胡商…タビアキンド 涙滿襟…サメ／＼トナ

夔州ノ舟人漁子、平生慣習水性、然當此暴漲、則歌唱回棹首而不敢近焉。歌ハ即不レ可レ上、不レ可レ下之語、見上卷所思詩ノ註。估論物價也。估客、候二時價ヲ以射利者、有江估漕估鹽估等。皆因物價ノ低昂、賤買貴賣之徒。胡本西北夷之稱。其人賡貨適異邦、畱開肆交易。唐時揚州常有波斯胡店。想亦古既有之。後漢書馬援傳、伏波類西域賈胡。到處輒止。以是失利。是也。因遂泛謂賈爲胡。至如辛延年羽林郎詩、依倚將軍威、調笑酒家胡、謂當壚倡女爲胡、故有胡姬之稱。鬻貨曰商。胡商只是行賈、不必眞賈胡也。夫估客胡商趨利尤甚。乘急陵危、以博僥倖、將無所避。然及臨瀝瀝之險、則膽落魂銷、惴惴戰戰、禱神念佛、淚滿衣襟、拚命決死、乃敢進舟、甚矣其危險也。舊說覆舟喪資、登岸而泣、可笑。

〔注14〕顧宸『註解』に「舟人漁子、水勢に慣習するも、此の暴漲に当たって、俱に首を回らして敢へて下らず」と。宇都宮遯庵の両著にも挙げる。

〔注15〕ちなみに、鈴木虎雄『杜少陵詩集』(巻十九)は、〈歌回首〉について「首をあちこちふりむけて歌をうたふ。風浪に平氣なるさま」と説く。

〔注16〕訳注稿(六) 038「所思」詩の詳解に「諺に云ふ、灑灑大さ象の如し、瞿唐上る可からず、灑灑大さ馬の如し、瞿唐下る可からず」と。

〔注17〕例えば、『正字通』の估の条に「物價を論ずるなり」と。論は、あれこれ考えて決定する意。

〔注18〕ちなみに、江估・漕估・塩估のうち、漕估については、伊藤東涯『名物六帖』人品箋三および釈大典『学語篇』巻上、人品類にこの語を挙げ「フナアキンド」という訓を施す。塩估については、『学語篇』人品類に「シホウリ」。

〔注19〕明・謝肇淛『五雜俎』巻十二、物四に「唐の時、揚州常に波斯の胡店有り。太平広記、往往に之を称す。想ふに妄ならざるなり」と。『太平広記』巻十七、神仙十七に引く『逸史』の盧李二生の話に、揚州に波斯店があったことが見える。この話は、石田幹之助『胡人買寶譚補遺』(平凡社東洋文庫『増訂長安の春』所収、一九六七年／『東亜文化史叢考』所収、東洋文庫、一九七三年)に指摘する。

〔注20〕『後漢書』馬援伝に「伏波(馬援)は西域の賈胡に類す。一処に到つて輒止まる。是れを以て利を失ふ」と。〈賈胡〉は、胡の商人。

〔注21〕後漢・辛延年「羽林郎詩」は、『玉台新詠』巻一、『樂府詩集』巻六十三、雜曲歌辭三に収められ、清・沈德潛『古詩源』巻三や同じく張玉穀『古詩賞析』巻三にも見える。全部で三十二句。冒頭の四句に、昔有霍家奴 姓馮名子都 昔霍家の奴有り、姓は馮、名は子都

依倚將軍威 調笑酒家胡 將軍の勢に依倚し、酒家の胡を調笑せりと詠じられ、続いて「胡姬年十五、春日獨當壚(胡姬年十五、春日独り壚に当たる)」とあって、霍光の威光を笠に着た馮子都を羽林郎に見立て、それが胡姬に戯れて拒まれた次第を歌う。

〔注22〕「胡姬」が元来「イラン系統の婦女」であることは、石田幹之助「當壚の胡姬」(前掲『増訂長安の春』所収)に説かれており、唐詩では、例えば李白「前有樽酒行二首」其の二に「胡姬貌花の如く、壚に当たつて春風に笑む」、「少年行」に「笑つて入る胡姬の酒肆の中に」と見える

が、後者は松浦友久編訳『李白詩選』(岩波文庫、一九九七年)に収められ、それには「胡姬」について「唐詩では、ペルシャ(イラン)系の紅毛・碧眼・白皙の娘が『胡姬』のイメージの中心をなす」という。なお、『漢語大詞典』の「胡姬」の条に、もとは胡人の酒店(酒場・料理屋)で酒を売る女性を指したが、後には泛く酒店の若い女性を指すという。

〔注23〕例えば、『字彙』および『正字通』に「貨を鬻ぐを商と曰ふ」と。

〔注24〕行買は、行商 古くは『史記』貨殖列伝に「行買は丈夫の賤業なり」と。

〔注25〕邵傳『集解』に「估客胡商、水厄に遭うて其の資する所を喪ふ、故に涙襟に満つ」、薛益『分類』に「估客胡商、水厄に遭ふ。則ち岸に登つて泣く」と。『分類』は宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

夔州の〈舟人〉や〈漁子〉は、平生(ふだん)水の性質に習熟しているが、されどこの急激に増水するときには、〈歌〉唱して〈首を回ら〉してあえて近づかない。〈歌〉は、とりもなおさず「上る可からず、下る可からず」の謡で、上巻の「所思」詩の註に見える。

〈估〉は、物価を定めることである。〈估客〉は、時価を見計らつて利益をねらう者で、江估・漕估・塩估などがある。いずれも物価の高低によって、安く買い入れ高く売りつける連中。〈胡〉は、もともとは西北の異民族の称。その民は品物を持って異邦に出向き、留つて店舗を開いて交易した。唐代、揚州には常に波斯(ペルシャ)の胡店があった。想像するにやはり古代からすであつたと思われる。『後漢書』馬援伝に「伏波は西域の賈胡に類す。到る処輒止る。是れを以て利を失う」というのが、そうである。それでそのまま広く賈(あきんど)のことを胡という。辛延年の「羽林郎詩」に「將軍の威に依倚して、調笑す酒家の胡」のような例に至つては、當壚(カウンター番)の倡女のことを胡という。それゆえ胡姬の称がある。品物売るのを〈商〉という。〈胡商〉は、ただ行買のことで、必ずしも本物の賈胡ではないのである。そもそも〈估客〉や〈胡商〉は、利益に趨くこととりわけはなはだしい。時機を逃さず危険を冒

して僥倖（法外な利益）を博すのに、まさに避けるところがない。されど《灑瀝》の險に臨む段になると、肝潰れ魂消えて、惴惴（ぞぞ）戦（びくびく）わなわな」とし、神に祈り仏を念じて、《涙》が衣の《襟》に《満》ち、命を顧みず死を覚悟して、なんとあえて舟を進める、その危険たるや、はなはだしい。旧説に舟を覆し積み荷を喪い、岸に登って泣くと、お笑い草だ。

寄語^ス舟航^ヲ惡年少^ニ 休^ヨ翻^{シテ}鹽井^ヲ橫^マ、ニスルコトヲ^ニ黃金^上

※翻：ヒツクリカヘシ 横：ムリヒドウ

惡年少^ハ謂^レ販^レ鹽^ヲ無賴^ノ之徒^ヲ。翻^ハ傾盡^也。蜀中鹽井數百、歲^ニ煮^{コト}數百萬斤。自贍^ニ一方之用^ヲ。翻^ハ鹽井^ヲ言^フ傾^ニ盡^ニ井中之鹽^ヲ、以貪^ヲ一時之利^上也。横^ハ孟反^也。不^レ由^ニ其道^ニ也。横^ニスハ黃金^ヲ言^フ橫^ニ博^ニ厚利^ヲ也。蓋江漲舟絶^レ、荊州鹽價踊貴。無賴子弟、冒^{シテ}險^ヲ射利^ヲ、妄^ニ乘^ニ血氣^ニ、動^{モスレハ}一擲^ヲ沈溺^ニ、故^ニ特^ニ丁寧^ニ戒^レ之^ヲ也。一本^ニ横作^レ擲^ニ、謂^レ覆没^{シテ}失^レ利^也。

〔注27〕邵宝『集註』（卷二十二、地理類）および薛益『分類』に「惡年少は、即ち無賴の子弟、塩を鬻ぐ人なり」と。『分類』は宇都宮遯庵の増広本にも挙げるが、《無賴》を誤って《一賴》に作る。『集註』は詳説に挙げる。

〔注28〕邵宝『集註』および薛益『分類』に「翻は傾尽なり」と。『分類』は宇都宮遯庵の増広本に、『集註』は詳説に挙げる。

〔注29〕ちなみに、訳注稿(十)、080「十二月一日三首」其二の詳解には「蜀中の塩井數十百処、散じて諸郡の山中に在り」と。

〔注30〕『集千家註』（卷十七）の鄭昂の注に「横は戸孟の切。理を以てせざるなり」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

〔注31〕邵宝『集註』および薛益『分類』に「横は其の道に由らずして厚利を貪るなり」と。『分類』は宇都宮遯庵の増広本に、『集註』は詳説に挙げる。なお、《不由其道》という言い方は、『孟子』滕文公下に「古の人未だ嘗て仕ふることを欲せずんばあらざるなり。又其の道に由らざるを惡む」と見える。

〔注32〕輯註（卷十三）に《横》字を《擲》に作り、「一に横に作る。一に摸

と云ふ」と注する。また仇兆鰲の詳註（卷十九）も《擲》に作り、「一に横に作り、一に摸に作る」と注する。

〔注33〕ちなみに、鈴木虎雄『杜少陵詩集』は「擲黄金とは金錢を賭博のために投げだすをいふ」と解する。

《惡年少》は、塩を販ぐ無賴の徒のこと。《翻》は、傾尽である。蜀中の塩井は數百、歲ごとに數百萬斤を煮る。それ自体で地方の需要をまかなった。《塩井を翻す》は、井中の塩を傾尽し、それで一時の利益を貪るのを言うのである。《横》は、戸孟の反。まっとうな方法によらないことである。《黄金を横にす》は、無理非道に厚利を博することを言うのである。けだし長江が漲り舟の航行が途絶すれば、荊州の塩価は騰貴し、無賴の子弟は危険を冒し利益をねらい、妄りに血気にはやつて、とかく沈没して溺れるはめになる。それゆえ特に繰り返し懇ろにこれを戒めるのである。一本に《横》を《擲》に作る、転覆沈没して利益を失うことである。

134 季夏送^下鄉弟韶陪^ニ黃門從叔^ニ朝謁^上スルヲ

鄉弟^ハ鄉里同姓之從弟若^{クハ}再三從弟^也。父之從弟^ヲ曰^フ從叔^ト。大曆元年、杜鴻漸以^ニ黃門侍郎同平章事^ヲ鎮^ス蜀^ヲ、既^ニ平^ニ崔旰之亂^ヲ、二年六月遂^ニ還朝^ニ。韶以^ニ戰功^ヲ從^テ入^レ京^ニ也。爲^ニ第七句^ノ特舉^ニ季夏^ヲ、稱^ニ鄉弟^ト亦爲^ニ第二句^ノ也。

〔注1〕邵傳『集解』に「鄉弟は鄉里同姓の弟」と。ちなみに釈大典『學語編』卷上、人倫類に、再從兄弟に「マタイトコ」、三從兄弟に「マタ／＼イトコ」と。

〔注2〕薛益『分類』（卷二、送別）に「鴻漸、黃門侍郎同平章事を以て蜀を鎮し、既に崔旰の難を平らげて、遂に朝に還る」と。宇都宮遯庵の両著にも挙げる。杜鴻漸については、訳注稿(四)、116「李八秘書が杜相公の幕に赴くを送る」詩参照。

《鄉弟》は、鄉里の同姓の從弟もしくは再從弟（またいとこ）三從弟（またまたいとこ）である。父の從弟を《從叔》という。大曆元

年(七六六)、杜鴻漸は黄門侍郎・同平章事の肩書きで蜀を治める節度使となったが、崔旰「旰」の乱を平らげてしまうと、二年六月、そのまま朝廷にもどった。杜詔は、戦功のおかげで従って京(長安)に入るのである。第七句(の清秋)のために特に「季夏」を挙げ、「郷弟」と称するのは、やはり第二句(の杜陵の人)のためである。令弟尚爲滄水使^ハ 名家莫^ハ出^ハ杜陵^ハ人^ニ

※尚^ハイマダ^ニ

令^ハ善^ニ也。唐人呼^レ弟^ヲ曰^ク令^ニ弟^ト。不^ニ必^シ限^レ稱^ニ人^ノ之^ノ弟^ヲ。見^ハ諸家ノ詩詞^ニ。謝靈運^ハ酬^ニ惠連^ニ詩^ニ云、末路逢^ニ令^ニ弟^ニ、開^レ顔^ヲ披^ニ心^ニ。乃知不^レ始^ニ于^ニ唐人^ニ也。吳越春秋^ニ禹^ノ夢^ニ繡衣^ノ男子^ヲ、自稱^ニ滄水使者^ト、授^ニ禹^ニ治^ニ水^ノ之^ノ要^ヲ。以^ニ比^ニ詔^ノ爲^ニ開^ニ江^ノ使^ト。公自註^ニ詔比^ニ兼^ニ開^ニ江^ノ使^ト、通^ニ成都^ノ外^ノ江^ノ下^ノ峽^ノ舟^ノ船^ヲ。莫^ハ出^ハ猶^ハ言^ハ無^レ過^ニ也。杜氏一族、皆居^ニ長安^ノ杜陵^ニ、見^ハ下^ノ贈^ニ韋^ノ七^ノ詩^ニ註^ニ。此言^ニ詔雖^ニ位^ニ尙^ニ未^ニ達^ニ而^ニ門^ノ地^ノ之^ノ貴^ヲ爲^ニ長安^ノ名家^ト也。即從叔黃門亦杜陵^ノ一族、在^ニ其中^ニ矣。

(注3) 薛益『分類』に「令は善なり」と。宇都宮逕庵の増広本にも挙げる。

(注4) 南朝宋・謝靈運「從弟惠連に酬ゆ」詩(『文選』卷二十五)。但し、〈逢〉字を〈値〉に作る。

(注5) 薛益『分類』に「吳越春秋に禹、父の功成らずして誅を受くるを傷み、乃ち衡山を巡つて馬を血して以て祭る。忽ち赤繡衣男子を夢む。自ら玄夷滄水使者と称す。禹に謂いて曰く、我が山神の書を得んと欲せば齋せよと。禹退いて齋すること三日、遂に金蘭玉宇の書を獲たり。治水の要を言ふ者なり」と。宇都宮逕庵の増広本にも挙げる。「吳越春秋」は漢・趙曄撰。その巻四、越王無余外伝に見えるのの節略。

(注6) 邵傳『集解』および『集千家註』(卷十七)に「公自註に詔比^ハころ開江使を兼ね、成都の外江峽に下る舟船を通ず」と。輯註(卷十六)ならびに詳註(卷十九)は原注としてこれを載せるが、錢注(卷十六)には見えない。

(注7) 前出、130「韋七贊善に贈る」詩。

(注8) 原文は家字の下「上」点を誤まって「一」点に作る。

〈令〉は、善である。唐人は弟を呼んで〈令弟〉という。必ずしも他人の弟を称するに限ったことではない。諸家の詩詞に見える。謝靈運の「惠連に酬ゆ」詩に云う、「末路令弟に逢ふ、顔を開き心胸を披く」と。それで唐人に始まったわけではないのがわかる。『吳越春秋』に「禹は繡衣の男子を夢にみた。自ら滄水使者と称し、禹に治水の要訣を授けた」と。それで杜詔が開江使たるに比す。公の自註に「詔は比^ハころ開江使を兼ね、成都の外江峽に下る舟船を通ず」と。〈出るは莫^ハし〉は、「過ぐる^ハこと無し」と言うのとほぼ同じである。杜氏の一族がみな長安の〈杜陵〉に居たことは、「韋七に贈る」詩の註に見える。これは杜詔は官位が〈尚ほ〉(いまだに)栄達しないといえ、門地(家柄)の貴さは長安の〈名家〉たるを言うのである。とりもなおさず〈從叔〉の〈黄門〉杜鴻漸もやはり杜陵の一族で、そのなかに含まれているのだ。

比來相國兼^ハ安^ニ蜀^ヲ 歸^ハ赴^ニ朝廷^ニ已^ニ入^ニ秦^ニ

※比來^ハコノホド 已^ハハヤクモ

一聯專稱^ニ黄門^ト。以^ニ同平章事^ヲ爲^ニ節度使^ト、故曰^ク兼^ニ安^ニ蜀^ニ。平^ハ崔旰^ノ之^ノ亂^ト。已^ハト^ハ者^ハ驚^ニ惜^ニ之^ニ也。黄門在^ニ蜀^ニ僅^ニ二年^ニ、當^ニ長^ノ留^ニ鎮^ニ撫^ニ斯^ノ民^ト、而忽^ニ已^ニ還^ニ朝^ニ也。長安^ノ秦^ノ故都^ト、故^ニ仍^ニ稱^ニ秦^ト。

(注9) 邵傳『集解』に「蜀を安んず」の下に「蜀に入つて崔旰の乱を平らぐ」と注する。

この一聯は専ら〈黄門〉杜鴻漸を称する。同平章事の肩書で節度使となる、それゆえ〈兼〉という。〈安んず〉とは、崔旰「旰」の乱を平げたこと。〈已に〉とは、これを驚き惜しむのである。〈黄門〉は蜀に在ることだったの二年、当然長く留つて民人を鎮撫すべきであるのに、忽ち〈已〉に朝廷にもどるのである。長安は秦の故都、それゆえ旧によつて〈秦〉と称する。

捨舟策馬^レ論兵^ニ地^ニ 拖玉^ヲ腰^ニ金^ヲ報^レ國^ニ身^ニ

一聯稱^ス韶^ヲ。上^ノ句舉^ニ功勞^ヲ、下^ノ句期^ニ召擢^ヲ。捨舟策馬^ヲ言^フ下
職雖^レ爲^ト開江使^ニ、方^レ平^{クル}崔旰^ノ之亂^ヲ、弃^ニ舟船^ノ之事^ヲ、專從^中
事^{スル}於^ニ兵馬^ニ也。論^ス兵^ヲ地^ヲ言^フ參謀^ニ黃門^ノ軍幕^ニ也。朱註^ニ韶
出峽^後ハ、應^ニ從^ニ陸道^ニ歸^中京師^上、故^ニ曰^ニ捨舟策馬^ニ、可^レ
笑^ハ。拖玉^ヲ玉佩^也。腰^ニ金^ヲ金帶^也。此預^ニ祝^ニ其登庸^ニ也。

(注10) ちなみに、鈴木虎雄『杜少陵詩集』(巻十九)は仇兆鰲の詳註に「下四、皆弟叔双関」とみるのによつて、「第四句、捨舟策馬以下は各句交互に杜韶と鴻漸についてのべたり」という。

(注11) 顧宸『註解』に「韶、開江使為るときは則ち舟是れ其の職、黃門に従ふに因つて、故に舟を捨て馬に策うち、黃門と兵を談ずること有り。是れ其の兵を論ずるの地に勤勞從事す」と。宇都宮遯庵の両著にも挙げる。

(注12) 輯註に「韶、峽を出でし後、応に陸道従り京師に帰るなるべし、故に舟を捨て馬に策うつと曰ふ」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。
ちなみに、詳註も同様の解釈をとり、鈴木虎雄『杜少陵詩集』に「水路をはなれて陸路に就くをいふ。峽を下り荊州に至ればそより上陸して陸より長安に向ふ」と説く。

(注13) 薛益『分類』に「玉を拖くは玉佩なり。金を腰にするは金帶なり」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。なお、詳解では〈拖玉腰金〉を杜韶のこととするが、「分類」は「身は鴻漸が身なり」とし、顧宸『註解』も「相国を指す」とみる。詳註ならびに鈴木虎雄『杜少陵詩集』も同様の解釈。

この一聯は杜韶を称える。上の句は功勞を挙げ、下の句は召還拔擢を期待する。(舟を捨て馬を策うつ)は、職務は開江使であるとはいへ、崔旰「旰」の乱を平げるにあつて、舟船の仕事棄て、専ら兵馬(軍事)に従事したことを言うのである。(兵を論ずる地)は、(黃門)の陣中に参画するのを言うのである。朱鶴齡註に「峽を出て後は、きつと陸路から京師(長安)に帰ったにちがいない、されば(舟を捨て馬に策うつ)という」と、お笑い草だ。(玉を拖く)は、

玉佩である。(金を腰にす)は、金帶である。これはあらかじめその登用されるのを祝して言うのである。(国に報ずる身)は、以前に決死の覚悟で戦つたことである。

莫^下度^ニ清秋^ヲ吟^中蟋蟀^上 早開^ニ黃閣^ヲ畫^ニ麒麟^ニ
莫^下訓^ニ應^ニ無^ニ 潘岳^{仕途不達}、作^ニ秋興^ヲ賦^ヲ。中^ニ云^ニ蟋蟀鳴^ニ于屏軒^ニ。今翻^用之^ヲ。漢^ノ宣帝圖^ニ功臣^ヲ於^ニ麒麟閣^ニ。此借^テ言^フ其致^ニ於青雲^{之上}也。蓋韶有^ニ軍功^ヲ、故^ニ鴻漸攜^テ以朝謁^ス。欲^ニ奏^ニ爲^ニ朝官^ニ。時^ニ季夏^ヲ、送^レ行^ヲ期^ニ其不^レ經^ニ秋^ヲ而事諧^ス。故^ニ言^フ弟入^ニ京師^ニ、應^ニ無^ニ悠悠^ニ、虛度^ニ三秋^ヲ、而賦^ニ蟋蟀^ヲ鳴^ニ于屏軒^ニ。其蒙^ニ相公^ノ之薦^ヲ、以^ニ軍功^ヲ登庸^ニ、直^ニ致^ニ於青雲^{之上}、必無^ニ蹉跎^ノ之憂^ニ也。早^ノ字反^ニ襯^ニ起句^ノ尙^ニ字^ニ。漢稱^ニ士德^ヲ、殿門以^ニ黃塗^ヲ、屏^ヲ故^ニ曰^ニ黃閣^ニ。今因^テ指^ニ麒麟閣^ヲ爲^ニ黃閣^ニ也。或^ハ以^ニ爲^ニ指^ニ從叔黃門^ヲ泥^メ矣。舊本開作^レ聞^ニ。今據^ニ輯註本^ニ正^ス之^ヲ。岑參詩^ニ天子預^ニ開^ニ麒麟閣^ヲ待^ニ、亦與^ニ此詩^ニ同^シ。

(注14) 基づくところあるのか不明。ちなみに、積大典『詩語解』巻下、莫の条には「字彙^ニ莫^ハ無^レ也勿^レ也不可^也」と。なお、第七句、宇都宮遯庵の両著は「清秋を度つて蟋蟀を吟ずること莫れ」と訓じる。また鈴木虎雄『杜少陵詩集』は「莫^ハ度^ニ清秋^ヲ吟^ニ蟋蟀^ニ」と訓点を施して「清秋蟋蟀吟ずるを度る莫れ」と訓じ、「きみは途中でぐづぐづして秋こころざが鳴きだす頃をすこしてはならぬ、いそいでゆかれるがよろしい」と解する。

(注15) 邵傳『集解』に「潘岳仕途達せず、秋興の賦を作つて曰く、蟋蟀屏軒に鳴くと」。ちなみに、『晋書』巻五十五、潘岳伝に「既に仕宦して達せず、乃ち閑居の賦を作つて曰く」云々と。潘岳伝には興膳宏編『六朝詩人傳』に訳註がある(斎藤希史執筆)。「秋興の賦」は、『文選』巻十三に収めるが、屏軒を軒屏に作る。

(注16) 薛益『分類』に「宣帝功臣霍光等十一人を麒麟閣に画く」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注17) 『夜航詩話』巻三に『史記』范雎伝の「意はざりき、君の能く青雲の上に致さんとは、等の用例を挙げて、此れ官位の高顯を謂ふなり」と。
(注18) ちなみに、訳注稿(八、060「將に成都の草堂に赴かんとして途中作有り」。

先づ巖鄭公に寄す五首」其四の詳解には、「漢制宮殿の門皆黄漆を以て之を塗る。以て土徳を象る」と。

〔注19〕 釈大典『杜律發揮』に「黄闥、謂黄門指從叔」と。

〔注20〕 邵傳『集解』は「開」を「聞」に作る。各本同じ。輯註も本文は「開」に作るが、「今本は一に開に作る」と注する。詳註も同様。輯註は、宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

〔注21〕 盛唐・岑参（七一五～七七〇）の七絶「封大夫の播仙を破る凱歌」（『唐詩選』巻七）に、

漢將承恩西破戎 漢將 恩を承けて西のかた戎を破る

捷書先奏未央宮 捷書 先づ奏す未央宮

天子預開麒麟閣 天子 預め麒麟閣を開いて待つ

祇今誰數貳師功 祇今 誰か数へん貳師の功

《莫》は、「応に無かるべし」（きつと…ないはずだ）と訓ずる。潘岳は仕途達せず、「秋興の賦」を作った。その中に云う、「蟋蟀屏軒に鳴く」と。今、これを翻用する。漢の宣帝は功臣の肖像画を麒麟閣に描かせた。ここは借りてその青雲の上に致すを言う。けだし杜詔は軍功があつたのだらう、それゆえ杜鴻漸が携えて朝謁し、上奏して朝官となさんとした。時に「季夏」、旅立ちを見送つてその《秋》を経ずして事が諧うのを期待する。それゆえ言う、《弟》は京師に入つて、きつと悠悠（うかうか）として虚しく三月の《秋》を《度》り、「蟋蟀屏軒に鳴く」のを賦することはないはずだ。その相公の推薦を蒙り、軍功によって登用され、直ちに青雲の上にのぼられるだらう、きつと蹉跎（踏みはずす失敗）のおそれはないだらうと。《早》の字は、起句の《尚》の字に対比して際立たせる。漢は土徳と称し、宮殿の門は黄色で扉を塗った。それゆえ黄闥という。今それにちなんで麒麟閣を指して《黄闥》とするのである。或いは《從叔》の《黄門》を指すとみなすのは、拘泥しすぎだ。旧本は《開》を《聞》に作る。今、輯註本に拠つてこれを正す。岑参の詩に「天子預め麒麟閣を開いて待つ」と、やはりこの詩と同じ。

135 覃山人、隱居

山人ノ事跡無レ考^{コト}。山人已ニ亡シ、公過^リ其隱居之所ニ、欽^レ節^ヲ慕^レ風^ヲ賦^{シテ}以^テ弔^ス之^ヲ也^{（注1）}。

〔注1〕 邵傳『集解』に「山人已に亡す、公其の隱居に過つて、感じて賦するなり」と。ちなみに、顧宸『註解』は「按ずるに覃山人は必ず老いて徴に就く者、公其の隱居の所を過つて、其の隱の終らざるを傷めり」と解し、輯註（卷十七）も「此の詩、山人を諷刺す。最も明切なり。解する者支離多し」と説く。いずれも宇都宮遯庵の増広本に挙げる。隱居を全うしなかつたのを惜しむとするのは、仇兆鰲の詳註（卷二十）およびそれに拠つた鈴木虎雄『杜少陵詩集』（卷二十）も同様。

《山人》の事跡は不詳。山人はすでに亡くなり、公はその隱居していた場所を訪うて、その高節遺風を欽慕し、賦してこれを弔うのである。

南極ノ老人自有^レ星 北山ノ移文誰^カ勒^セ銘^ヲ

※移文…フレブミ 勒…カキツケル

南極老人ハ壽星也。史記^{（注3）}天官書^{（注4）}「狼^{（注5）}北有^二大星^一曰^二南極老人星^一。山人^{（注6）}南中^{（注7）}高士。故^ニ以此^{（注8）}比^{（注9）}之^一。言^ニ非^{（注10）}凡人^一、且^ニ以^{（注11）}壽終^{（注12）}上^{（注13）}也。北山ノ移文ハ孔稚圭^{（注14）}所作、鄙^{（注15）}周顒^{（注16）}隱操不^レ遂^{（注17）}、假^{（注18）}南山靈意^{（注19）}以^{（注20）}嘲^{（注21）}之^一。中^{（注22）}云、馳^{（注23）}二煙驛路^{（注24）}、勒^{（注25）}二移山庭^{（注26）}。此^{（注27）}曰勒銘^{（注28）}、趁^{（注29）}韻^{（注30）}爾。自^{（注31）}字誰^{（注32）}字、相呼應^{（注33）}。言^{（注34）}山人隱操賢貞、人無^{（注35）}敢^{（注36）}論^{（注37）}者^{（注38）}也。

〔注2〕 『史記』卷二十七、天官書に「狼の比地に大星有り、南極老人と曰ふ」と。比地は、近地。

〔注3〕 蜀（四川省）を指している。訳注稿（六）、031「野老」詩の（注13）参照。

〔注4〕 『文選』卷四十三。『古文真宝』後集卷五にも収載。孔稚圭（四四七～五〇一）、字は德璋。その伝は、『南齊書』卷四十八および『南史』卷四十九に見える。

〔注5〕 趁韻は、韻を合わせるために、内容の当否を問わないこと。釈大典『杜律發揮』に「北山移文云、勒^{（注39）}移山庭^{（注40）}。此^{（注41）}曰勒銘^{（注42）}、依^{（注43）}韻^{（注44）}用^{（注45）}之^{（注46）}尔」と。《尔》は、爾の俗字。ちなみに、鈴木虎雄『杜少陵詩集』

には「勅銘とは、勅移の意、勅は刻すること、ここにては山人の庭に果たして刻文ありしや否や不明なるも言を托していへるなり」と説き、「一たび出仕したためにだれだか知らぬが庭石に北山移文をほりつけた」と解する。

〈南極老人〉は、寿星である。『史記』天官書に「狼の北に大星有り、南極老人星と曰ふ」と。〈山人〉は、南中（蜀地）の高士。それゆえこの語で彼に比した。凡人ではないばかりかそのうえ長寿で終るの言うのである。〈北山の移文〉は、孔稚圭の作。周顒が隱者としての節操を全うしなかったのを鄙しめ、山靈の意を借りてこれを嘲った。そのなかに云う、「煙を駅路に馳せ、移を山庭に勅す」と。ここに〈銘を勅す〉というのは、脚韻を合わせるために用いたにすぎない。〈自〉の字〈誰〉の字は、互いに呼応する。山人は隱者としての節操が賢貞（すぐれて堅固）であって、人のあえてあげつらう者がないの言うのである。

微君已去獨松菊 哀壑無光留戸庭

※独：バカリ 留：ノコル

獨松菊^(金6) 即陶微君^(金6) 歸去來ノ辭ニ松菊獨存スル也。哀壑ハ壑色含レ哀也。畱^(金6) 遺也。此句亦取テ移文中ノ雲壑礪戸山庭ニ而鎔化^(金6) 用之ヲ、故ニ得^(金6) 與^(金6) 前句^(金6) 對上^(金6) スルコトヲ。不然^(金6) 偏枯^(金6) 矣。蓋言林壑慘澹無^(金6) 光、而戸庭空^(金6) 遺耳。令^(金6) 人^(金6) 惆悵想慕^(金6) 不^(金6) 勝^(金6) 物在^(金6) 人亡^(金6) 之感^(金6) 也。

(注6) 陶微君は、晋末宋初の陶淵明（三六五―四二七）のこと。微君については、131「常微君」詩の詳解参照。南朝宋・顔延之（字は延年。三八四―四五六）に「陶微士の誄並びに序」（『文選』巻五十七）がある。薛益『分類』（巻一、隱逸）に「独り松菊とは、陶淵が松菊独り存すの意を借る」と。宇都宮逕庵の増広本にも挙げる。陶淵明の「帰去来の辞」（『文選』巻四十五、『陶淵明集』巻五）に「三逕荒に就いて、松菊猶ほ存す」と。

(注7) 偏枯については、訳注稿四、021「九日藍田崔氏の莊」詩の（注19）参照。

(注8) 「北山移文」（『古文真宝』後集巻五）に「我が松桂を誇き、我が雲壑を欺く」、礪戸擢け絶えて与に帰ること無し」と。なお、〈礪戸〉の二字、『文選』の李善注本は〈礪石〉、五臣注本は〈澗戸〉に作る。

(注9) 盛唐・李頎の「盧五の旧居に題す」詩（『唐詩選』巻五）の首聯に「物在れども人亡くして見ゆる期無し、閑庭に馬を繫いで悲しみに勝へず」と。訳注稿（三）、102「詠懷古跡五首」其二の（注9）参照。

〈独り松菊〉とは、とりもなおさず陶（微君）の「帰去来の辞」に云う「松菊独り存す」である。〈哀壑〉は、壑の景色が悲哀を含むのである。〈留〉は、遺である。この句もやはり「移文」中の「雲壑」「礪戸」「山庭」の語を取って鎔化（とか）してこれを用いる。それゆえ前句と対偶にすることができ。そうでなければ偏枯になってしまう。けだしその意味は、林壑は慘澹（暗くひっそり）として〈光無く〉、〈戸庭〉は空しく遺るばかりで、人をして惆悵（感傷的な気分）にさせ想い慕って「物在れども人亡し」の感にたえさせない、というのである。

予見^(金10) 亂離^(金10) 不^(金10) 得^(金10) 已^(金10) 子^(金10) 知^(金10) 出處^(金10) 必^(金10) 須^(金10) 經^(金10) ス

※不得已：センカタナシ 必須經：ゼヒトモコ、ニスマキヲカマヘル 此感^(金10) 山人ノ高節ニ而傷^(金10) 己^(金10) 浪跡^(金10) 也。亂離^(金10) 詩語。言^(金10) 世亂^(金10) 人離^(金10) 出處^(金10) 易^(金10) 語。言^(金10) 出^(金10) 仕^(金10) 與^(金10) 處^(金10) 家^(金10)。必^(金10) 須^(金10) 就^(金10) 辭^(金10) 微^(金10) 時^(金10) 而言^(金10)。經營^(金10) 也。詩^(金10) 大雅^(金10) 經^(金10) 之^(金10) 營^(金10) 之^(金10)、註^(金10) 經^(金10) 量度^(金10) 也。此承^(金10) 上^(金10) 戸庭^(金10)、言^(金10) 固^(金10) 辭^(金10) 微^(金10) 不^(金10) 起^(金10) 而經^(金10) 營^(金10) 此隱^(金10) 栖^(金10) 也。一說^(金10) 經^(金10) ハ經歷^(金10) 之義、非也。蓋言我亦固^(金10) 慕^(金10) 隱遯^(金10) 之好^(金10)、但奈^(金10) 此亂離^(金10) 之時^(金10)、竊^(金10) 思^(金10) 以康濟^(金10) センコトヲ、不^(金10) 得^(金10) 已^(金10) コトヲ而栖^(金10) 爾。山人獨能明^(金10) 出處^(金10) 之義^(金10)、ト居^(金10) 此地^(金10)、而爲^(金10) 栖^(金10) 逸之所^(金10)、浩然^(金10) 自決^(金10)、堅^(金10) 臥^(金10) 不^(金10) 起^(金10)、全^(金10) 性命^(金10) 於亂世^(金10)、追^(金10) 遙^(金10) 白雲^(金10) 之鄉^(金10)。是非^(金10) 吾^(金10) 所^(金10) 及^(金10)。良^(金10) 可^(金10) 欽慕^(金10) 也。上^(金10) 句孟子答^(金10) 充虞^(金10) 不豫^(金10) 之問^(金10)、是其志也。下^(金10) 句因^(金10) 事不^(金10) 諧^(金10) 而服^(金10) 山人之卓識^(金10) 也。不讀^(金10) 平聲^(金10)、說見^(金10) 夜航詩話^(金10)。

(注10) ちなみに、鈴木虎雄『杜少陵詩集』は、この一聯を「予亂離には已むことを得ざるを見る、子出處の必ず須らく經べきを知らむ」と訓じ、

「自分はいま乱離の時世だからあなたが出仕したのも已むを得ぬこととはかんがへるが、あなたは自己の出処はその是非いずれにあるやについては自身経験してはじめておわかりになるであらう」と解する。

(注11) 浪跡は、気ままにさすらう。行跡の定まらぬこと。語は『文選』卷三十一、南朝梁・江淹「雜體詩三十首」其十八に「跡を浪にして蜚妍無く、然る後に君子の道あり」と見える。

(注12) 『詩経』小雅・四月に「乱離瘼めり矣、爰に其れ適き帰せん」と。毛伝および朱子の集伝には「離は憂」と。

(注13) この言い方、後の(注17)に挙げる邵傳『集解』に見える。

(注14) 『易経』繫辭上伝に「君子の道は、或いは出で或いは処り、或いは黙し或いは語る」と。

(注15) 『詩経』大雅・靈台に「靈台を経始す、之を経し之を営す」と。宇都宮遯庵の両著にも挙げ、「註に経は量度なり」という。この注は『詩経』の毛伝、鄭箋および集伝には見えぬが『孟子』梁惠王上に「詩に云ふ、靈台を経始し、之を経し之を営す。庶民之を攻む、日せずして之を成す」云々とあり、朱熹の集註に「経は量度なり」と。

(注16) 邵傳『集解』に「経は、経営なり。即ち詩に云ふ、之を経し之を営す。或るひと解して経過の義と為すは、非なり」と指摘。薛益『分類』には「経は、此の山を経歴して隠るるなり」と。なお、鈴木虎雄『杜少陵詩集』は、詳註に拠って「出仕と退処との是非は躬づから経歴するを要す」と説く。前の(注10)も参照。

(注17) 邵傳『集解』に「言ふところは予豈に隠るることを欲せざらんや。蓋し世乱れ人離るるが為に已むを得ずして出でて以て康済せんことを思ふ」と。(康済)は、世を安んじ民を救うこと。古くは『尚書』蔡仲之命に「小民を康済せよ」と見える。

(注18) 栖栖は、せかせかと慌しいさま。『論語』憲問篇に「微生畝、孔子に謂いて曰く、丘何為れぞ是れ栖栖たる者ぞ」と。

(注19) 浩然は、その勢いを押し留められないさま。訳注稿(八)、056「奉寄して馬巴州に別る」詩の(注13)参照。

(注20) ちなみに、『夜航詩話』卷二に、白雲は、晴空の閑雲を謂ふ。詩家の用ふる所、多くは紅塵の反対を為す。白樂天の詩に「紅塵は鬧熱白雲は冷なり」と、是れなり。故

に李于鱗の送別に云ふ、「君去つて何れの時にか帰る、山中春草の夕。白雲の廬を將て、紅塵の陌に及ばずとする莫れ」と。蓋し陶隱居の怡悦より、遂に専ら隱者の境界を稱す。其の無心にして岫を出で、悠悠閑逸の態、山人逍遙の趣に似たる有るを以てなり。

云々と見える。白樂天の詩は、「雪中晏起。偶たま懷ふ所を詠じ、兼ねて張常侍・韋庶子・皇甫郎中に呈す。雜言」詩(『白氏文集』卷六十三)。明の李于鱗は、五絶「山中」詩(『滄溟先生集』卷十二)。陶隱居の怡悦は、南朝梁の陶弘景「詔して山中何の有する所ぞと問はる、詩を賦して以て答ふ」詩(『古詩紀』卷八十九)に「山中何の有する所ぞ、嶺上白雲多し。只だ自ら怡悦す可し。持して君に寄せるに堪えず」とあるのに拠る。(無心にして岫を出づ)は、陶淵明の「帰去來の辭」に「雲は無心にして以て岫を出づ」と。

(注21) 『孟子』公孫丑下に「孟子、斉を去る。充虞路に問うて曰く、夫子不豫の色有る若く然り。前日諸を夫子に聞けり。曰く、君子は天を怨まず人を尤めずと。曰く、彼も一時なり、此れも一時なり。五百年にして必ず王者の興る有り。其の間必ず世に名ある者有り。周よりして来、七百有餘載なり。其の数を以てすれば則ち過ぎたり。其の時を以て之を考ふれば則ち可なり。夫れ天未だ天下を平治せんと欲せざるなり。如し天下を平治せんことを欲せば、今の世に當りて、我を棄きて其れ誰ぞや。吾れ何為れぞ不豫ならんや」と。不豫の色は、不機嫌そうな表情。

(注22) 『夜航詩話』には見当たらないが、(不)字を平声に読むというのは、第四字が平でその上下が仄となる孤平(●○○)を避けるためである。孤平について、同書卷二に「律詩五七言、竝に下より第四字、仄、平を問むを忌む、其の大禁たる、猶ほ国歌の謂る腰折のごときなり。若し上仄声にして那とも移す可からずんば、則ち其の下に平字を用ひて之を避く」云々と。

これは〈山人〉の気高き節操に心感して己が浪跡(さすらいの身の上)を傷むのである。〈乱離〉は、『詩経』の語。世が乱れ人が離散するのを言う。〈出処〉は、『易』の語。出でて仕えるのと仕えずに家に処るのを言う。〈必須〉は、徴召を辞する時について言う。〈経〉は、営である。『詩経』大雅に「之を経し之を営す」とあり、註に「経

は、量り度するなり」と。これは上の〈戸庭〉を承けて、固く徴召を辞して、官途に就かないで、この隠逸のすみかを経営（造作）するのを言うのである。一説に〈経〉を経歴の義とするのは、よくない。けれど、ここでの意味は、自分もやはりもとより隠逸のよさを慕ってはいるものの、ただこの〈乱離〉の時をいかんともしがたく、心ひそかに民を安んじ世を済（す）めたいと思つても、〈已むことを得ず〉して栖栖（せかせか）と慌しく駆けずり回るばかりだ。〈山人〉はひとりよく〈出処〉の義を明らかにし、この地に卜居して隠逸の場所とした。止めようがないほど固く自ら決意し、堅く隠居したまま官途に就かず、性命を乱世に全うし、白雲の郷（気ままな隠者の世界）に逍遙（悠々自適）した。これは自分の及ぶところではない。まことに欽慕すべきである、というのである。上の句は、孟子が弟子の充虞から不愉快そうな顔つきをしているのを心配して問われたことに對して答えた（天はまだ世の中が平和に治まることを欲していないのではないかという）内容こそ、その志である。下の句は、事がうまく諸（かな）われないことから、〈山人〉の卓（すく）れた見識に服するのである。〈不〉は、平声に読む。説は『夜航詩話』に見える。

高車駟馬帶傾覆^ニ 悵望秋天虛翠屏^一

四皓采芝歌^ニ曰、高車駟馬、其憂甚大^{ナリ}。富貴之畏人^ヲ兮、不若貧賤之肆^ニ志^一。帶傾覆^ヲ即言富貴ハ非レ不^レ好^ク、然トモ危機所^ニ伏^ス也^一。此嘆^ニ出不^レ如^レ處^ニ、以美^ニ山人之高蹈^ヲ。蓋隱居在大路傍^ニ、故云。悵望^ハ恨^レ不^レ得^テ相見^ニ、惆悵^ハ以慕望也。翠屏^ハ山名。山色擁^{シテ}翠^ヲ、環列^ス如^レ屏^ノ、故^ニ名^{ツク}。一ハ在^ニ夔州^ノ達縣^ニ、一ハ在^ニ忠州^ノ南^ニ。山人所居不^レ詳^{ナリ}、不^レ知^ニ孰^ヲ指^ニ。蓋思^テ見^ニ其人^ヲ而不^レ可^レ得[、]亦移文^ニ所^ニ云、山阿寂寥、千載誰^カ賞^{セシ}。悵望秋天虛^ヲ對^ニ翠屏^ニ耳。結得^テ悠然、無^レ限景慕。恰有^ニ先生之風、山高^ク水長^ク之思^一。

（注23）邵傳『集解』に「四皓の歌に曰く、駟馬高蓋、其の憂甚だ大なり。富

貴の人を畏るるは、貧賤の志を肆にするに若かず」と。四皓は、秦末に商山（陝西省商洛市の東南）に隠れた夏黃公・東園公・綺里季・角里先生の四人のことで、鬚髪が真っ白であったので四皓と称される。その歌は「紫芝歌」として、『樂府詩集』卷五十八、『古詩紀』卷十二に収載。『古詩源』卷二、『古詩賞析』卷三にも見える。

（注24）邵傳『集解』に前の（注23）に挙げた箇所が続けて「蓋し富貴の中、危機伏す焉」と。輯註に（注1）に挙げた箇所の前に「末の二句、又た言ふ危機の伏する所、出づるは処るに如かずと、以て深く之を惜しむ」と。輯註は宇都宮逵庵の増広本にも挙げる。

（注25）世俗を離れ身を保つ。顏延之「陶徵士の誄並びに序」に「詩を賦して帰來し、高蹈して独り善くす」と。

（注26）薛益「分類」に「翠屏は山の名」と。宇都宮逵庵の増広本にも挙げる。なお、詳説に「翠屏ハ山ヲ云。翠壁ト同。山ノ名ト云ハ不^レ信」と。

（注27）宇都宮逵庵の増広本に次の（注28）に挙げた箇所が続けて「又た雅州の翠屏山は州城の西二十里に在り。山色翠を擁し、環列屏の如し」と。

（注28）宇都宮逵庵の増広本に『大明一統志』を引いて「夔州府の翠屏山は達県の治の南に在り。形、屏風の如し。又た重慶府の屏風山は忠県の南二里に在り、江を隔つ。一に翠屏山と名づく」と。

（注29）北宋・范仲淹（字は希文。九八九—一〇五二）の「嚴先生が祠堂の記」（『古文真宝』後集卷四）に「雲山蒼蒼たり、江水決決たり。先生の風、山高く水長し」と。『文章規範』卷六にも収録。もとは『范文正公文集』卷八に「桐廬郡嚴先生祠堂記」として載せる。

商山の四皓の「采芝の歌」に曰く、「高車駟馬、その憂甚だ大なり。富貴の人を畏る兮、貧賤の志を肆にするに若かず」と。〈傾覆を帯ぶ〉は、とりもなおさず富貴はよくないわけではないが、されど危機の伏するところであることを言うのである。これは〈出〉は〈処〉に及ばないのを嘆じ、そうして〈山人〉の高蹈（たう）りをほめる。けれど隠居は大路の傍らに在ることから、それで云ったのであろう。〈悵望〉は、相見ることができないのを恨み、惆悵（物悲しいおもい）して慕い望むのである。〈翠屏〉は、山の名。山色が翠を擁し、ぐるりと取り巻くこと屏のようで、それゆえ名づく。一つは夔州達県

にあり、一つは忠州の南にある。《山人》の居所は詳かでなく、どちらを指すかわからない。けだしその人を見たいと思ってもかなわず、やはり「移文」に云うところの「山阿寂寥、千載誰か賞せん」である。《俵望秋天虚》しく《翠屏》に對するばかりだ。結び方は悠然としており、無限の景慕。あたかも「先生の風、山高く水長し」という思いがある。

136 宇文晁^ハ尚書之甥、崔瑗^ハ司業之孫尚書之子、重^テ泛^ニ鄭監^{カガ}前湖^ニ

甥^ハ音生。姊妹之子^ヲ爲^レ甥^ト。宇文晁^ハ禮部尚書李之芳^ノ之甥。尚書上疑^ラ原有^ニ李^ノ字、誤^テ脫^{スル}耳。瑗音郁。崔瑗^ハ國子司業融之孫、禮部尚書翹之子也。特^ニ稱^ニ其父祖舅氏^ヲ。以著^ニ名家子弟^{ナルヲ}。蓋本^ニ諸詩^ヲ召南平王之孫齊侯之子^ニ也。鄭監、名審、官^ハ祕書監。有^ニ湖亭^ニ在^ニ峽州^ニ。公^ハ集有^下暮春陪^ニ李尚書之芳^ニ過^ニ鄭監湖亭^ニ之作^上。是前已^ニ遊過^ス、故曰^ニ重泛^ト。此在^ニ江陵^ニ時^ノ事。詩中曰^ニ葛巾荷珠^ト、蓋夏日之遊也。

〔注1〕 錢注（卷十七）は、《前湖》の下に小字で《審》と注記。また輯注（卷十八）は、《鄭監》の下に小字で《審》と注記。ちなみに、詳註（卷二十一）は詩題を「宇文晁崔瑗重泛鄭監前湖」に作り、宇文晁の下に小字で《尚書之子》、崔瑗の下に小字で《司業之孫》、鄭監の下に小字で《審》と注記。

〔注2〕 例えば、『字彙』に「甥、師庚の切。音生。姊妹の子を甥と曰ふ」と。

〔注3〕 『唐詩貫珠』（卷三十六、郊野）に「今、題中の共に遊ぶ者は、宇文晁・崔瑗の二人。晁は石首の邑宰。乃ち尚書李之芳の甥。瑗は官、少詹に至る。乃ち司業融の孫、礼部尚書翹の子なり」と。石首は、江陵府（今の湖北省荊州市）に属する県名（湖北省石首市）。

〔注4〕 積大典『杜律發揮』に「尚書之甥司業之孫尚書之子十二字、俱係題注^ニ、以著^ニ名家子弟^{ナルヲ}」と。また顧宸『注解』に「世家の子弟爲り、故に家世を書す」と。『注解』は、字都宮遯庵の増広本にも挙げる。

〔注5〕 『詩経』召南・何彼穠矣に「何ぞ彼の穠なる矣、華桃李の如し。平王の孫、齊侯の子」と。

〔注6〕 邵宝『集註』（卷二十三、遠別類）および薛益『分類』（卷二、別送）に「鄭秘監、名は審、湖亭有り峽州に在り」と。顧宸『註解』も同様の注。『分類』『註解』は字都宮遯庵の増広本に、「集註」は詳説に挙げる。

峽州は、今の湖北省宜昌市。また『唐詩貫珠』に「鄭監は、鄭秘書監なり。湖亭有り峽州に在り。公の集に《暮春、李尚書・李中丞に陪して、鄭監の湖亭を過り舟を泛ぶ》有り」云々と。《暮春、李尚書・李中丞に陪して》云々の詩は、詳註卷二十一。但し、鈴木虎雄説では、鄭監の湖亭は江陵にあるとする。「秋日夔府の詠懷、鄭監審・李賓客之芳に寄せ奉る一百韻」詩（『杜少陵詩集』卷十九）の第九十七、八句「東郡時に壁に題す、南湖日に舷を叩く」とあり、その南湖の語釈参照。張忠綱主編『杜甫大辭典』（山東教育出版社、二〇〇九年）も同様。

〔注7〕 『唐詩貫珠』に「是れ前に已に遊過す、故に重ねて遊ぶと曰ふ」と。

《甥》、字音は生。姊妹の子を甥とする。《宇文晁》は、礼部尚書李之芳の甥。尚書の上に疑らくは元来《李》の字があり、誤って脱したのだ。《瑗》、字音は郁。《崔瑗》は、國子司業融の孫、礼部尚書翹の子である。わざわざ特にその父祖や舅氏を称するのは、名家の子弟であるのをあらわす。けだしこれを『詩経』召南の「平王の孫、齊侯の子」に本づくのである。《鄭監》、名は審、官は祕書監。湖亭を有し峽州にあった。公の集に「暮春、李尚書之芳に陪して鄭監湖亭に過る」の作がある。以前すでに遊んだことがあったので、それゆえ《重ねて泛ぶ》という。これは江陵に在りし時の事。詩中に《葛巾》《荷珠》という、けだし夏日の遊である。

郊扉俗遠^ニ長^ク幽寂^ニ 野水春來變^ニ接連^ニ

※長：イツモ 接連：ヒトツヅキ

亭在^ニ郊外^ニ、故曰^ニ郊扉^ト。見^レ遠^ニ俗塵^ニ、所^ニ以^テ長^ク幽寂^{ナルヲ}也。野水^ハ指^レ湖^ヲ。接連^ハ言^ニ湖水春漲、直^ニ接^{スルヲ}亭前^ニ。何等^ノ景趣^ヲ。既^ニ幽寂^ニ、景復^ニ如^シ是^ヲ。此先説^ニ其所^ニ以^テ淹留^{スルヲ}也。

〔注8〕 『唐詩貫珠』に「言ふところは、湖、郊外に在り、俗塵を遠ざかりて長に幽寂なる所以なり」と。

亭は郊外に在り、それゆえ《郊扉》という。《俗塵を《遠》ざか

るのをあらわし、〈長く幽寂〉たるゆえんである。〈野水〉は、湖を指す。〈接連〉は、湖の〈水〉が〈春〉に漲って直ちに亭前に接するを言う。何ともすばらしい情趣であることか。〈幽寂〉なる上に、景色もこのようにすばらしいのである。ここは先ずその〈淹留〉するゆえんを説くのである。

錦席淹留 還出浦 葛巾鼓側 未回船

※淹留…ナガザ 鼓側…オチカ、ル

淹ハ滯也。錦席淹留ハ宴ニ於亭ニ也。還ハ猶又ノ也。出ハ浦ニ泛ニ于湖ニ也。葛巾ハ處士之服、謂レ己ヲ。鼓側ハ言醉態ヲ。暗ニ用落帽之意ヲ。蓋亭設ニ錦席ヲ、延客ヲ宴飲ス。殺羞豊甘、留連盡歡。既ニ醉既飽、席將ニ散セント矣。乃又移シテ宴ヲ泛ニ前湖ニ。於是ニ乘シテ歡ニ復大ニ飲、至ニ醉態婆娑、巾傾欲ニ落、而尙未ニ回船。逸興快樂、遂ニ晚霞散ニ而夕露侵ニスニ也。

(注9) 例えば、『字彙』に「久留なり。滞なり」と。

(注10) 又は、更にの意。なお、邵傳『集解』に第三句の下に「既に亭に宴して、而して又た湖に泛ぶ」と注する。

(注11) 邵玉『集註』および薛益『分類』に「還つて浦を出づは、湖に泛ぶなり」と。『分類』は宇都宮遼庵の増広本にも挙げる。

(注12) 孟嘉落帽の故事。訳註稿四、021「九日崔氏藍田の莊」詩の詳解に「晋の桓温、九日龍山に遊宴す。参軍孟嘉之に従ふ。風吹いて嘉が帽を落とす。而して酩酊して知らず。温、孫盛に命じて文を爲つて之を嘲る」と。その(注9)参照。

(注13) 殺羞は、美味佳肴。『詩経』小雅 楚茨に「爾の殺既に将ふ、怨む莫くして具慶す」とあり、その鄭箋に「女の殺羞已に行ふ」云々と。豊甘は、『晋書』卷八十、王羲之伝に「飲食豊甘」と。ちなみに、釈大典『学語篇』卷上、交遊類に「豊甘」の語を挙げ、「ケツコウ」と左訓。

(注14) 『詩経』小雅 楚茨に「既に酔い既に飽く、小大稽首す」、同じく周頌・執競に「既に酔い既に飽く、福録来たり反る」と。

(注15) 婆娑は、酔つてふらふらよるさま。量韻語。例えば、『抱朴子』外篇卷二十四、酒誡に「漢高(漢の高祖) 婆娑として巨醉す、故に能く

蛇を斬り旅に鞠く」と。

(注16) 邵傳『集解』に第五句の「霞綺」の下に「晚霞」と注する。

〈淹〉は、滯である。〈錦席淹留〉は、亭中に宴することである。

〈還〉は、又とほぼ同じである。〈浦に出づ〉は、湖に〈船〉を浮べて乗ることである。〈葛巾〉は、処士の服で、己れのこと。〈鼓側〉は、酔態を言う。暗に落帽の意を用いる。けだし亭では〈錦席〉を設け、客を招いて宴飲する。美味佳肴は豊かで、居続けて飲を尽くす。すっかり酔い存分に食べて、席まさに散ぜんとし、ようやくさらに宴の場所を移して〈前湖〉に〈船〉を浮べた。そこで気分が乗って再び大いに飲み、酔つてふらふらとよろけ、頭〈巾〉が傾いて落ちそうになるが、それでもなお〈未だ船を回ら〉せない(岸にもどらない)。逸興快樂(世間を忘れた格別の遊樂)は、そのまま晩霞が〈散〉じて夕露がおりる時分に至るのである。

尊當霞綺輕綺初散 權拂荷珠碎卻圓

※輕…ヒラ／＼ 散…キヘ／＼ニナリユク

當ハ對也。霞綺ハ謂ニ彩霞如シテ輕綺ヲ。謝眺カ詩ニ餘霞散ニ如シ綺ノ。開レテ對レ之、言ニ風景之美ヲ。酒亦有ニ流霞之稱。見ニ樽酒之色與霞比ニ。非ニ復人間尋常之物ニ矣。輕綺初散ニ三字、極有ニ狀態。輕切ニ綺ノ字ニ、散謂ニ色漸薄ニ而減ルヲ。蓋天迫ニ黃昏ニ也。荷珠、荷上ノ露珠、見ニ梁ニ元帝ノ詩。此言ニ入夜ニ。荷間廻レテ棹ヲ而過、露珠觸レテ碎散ニ却復團圓也。蓋初飲ニ亭上ニ、留連已ニ久、向晩ニ乃泛ニ前湖ニ、而回レテ船ヲ之遅、遂ニ及レ侵ニ露也。上句酩酊爛漫、不勝ニ耳熱ニ、下句涼氣冷然、何等ノ爽快。且初ノ字見ニ其久。卻ノ字見ニ其速。只兩虛字、勢態如レ睹看ニ他ノ斡旋之妙ヲ。

(注17) ちなみに、鈴木虎雄『杜少陵詩集』(卷二十二)は第五句を「樽は當る霞綺輕くして初めて散ずるに」と訓ずる。

(注18) 「權」字、錢注および輯註は〈棹〉に作る。

(注19) 邵傳『集解』に見える。

(注20) 字都宮遯庵の詳説に「霞綺ハ霞如シ綺ナルヲ云。綺ハ羅綺リ之綺也。カトリ。又ハカンハタト読。字彙ニ繪也。今細綾ト註ス」と。

(注21) 釈大典『杜律發揮』に「第五句用餘霞散成綺綺語」と。南朝齊・謝朓「晩に三山に登りて京邑を還望す」詩(『文選』卷二十七)に「餘霞散じて綺を成し、澄江静かにして練の如し」と。餘霞は、消えなかった夕焼け雲。

(注22) もとは神仙の飲み物。転じて、酒をいう。

(注23) 『唐詩貫珠』に「直ちに樽酒の色、霞と艶を比するに至る」と。

(注24) 釈大典『杜律發揮』に(注21)に挙げた箇所が続いて「輕初散三字、極有状態」と。状態は、表現された様子。

(注25) 輯註に「梁元帝の百花亭に登る詩に、荷珠水銀を漾はす」と。字都宮遯庵の増広本にも挙げる。梁・元帝(蕭繹)の「江州の百花亭に登り荆楚を懷ふ」詩(『古詩紀』卷七十二)の第五、六句に「柳絮晴雪を飄かし、荷珠水銀を漾はす」と。

(注26) 耳熱は、酔いが廻って耳たぶまで熱くなる。『文選』卷四十一、前漢・楊惲「孫会宗に報ゆる書」に「酒後耳熱し、天を仰いで缶を撫して嗚鳴と呼ばふ」と。

(注27) ここでは「他の幹旋の妙を看よ」と訓じるが、本来(看他)でひとまとまりの語。その場合に(他)字は軽く添えられただけで意味はない。このこと、訳注稿(三)、012「曲江二首」其一の(注15)参照。幹旋は、運用。ちなみに、三浦梅園『詩輟』卷五、字法に「好語アリテモ、引回ス者ナケレバ、車有ツテ行事能ハザルガ如シ。鶴林玉露曰、要ニ活字ノ幹旋ヲ、生理何ノ顔面ニ、憂端且歳時。名ハ豈ニ文章ニ著シ、官応ニ老病ニ休ス。何ト与ニ且ノ字、豈ト与ニ応ノ字、乃幹旋也。幹旋如ニ車之有ニ軸ト。幹、烏括ノ反」と。『鶴林玉露』は、宋・羅大経の著。慶安元年(一六四八)刊の和刻本があり、汲古書院『和刻本漢籍隨筆集』第八集に影印を収む。その巻六、詩用字の条に「詩を作るに健字の撐拄を要し、活字の幹旋を要す」云々と見える。(生理)云々は、杜甫「舍弟の消息を得たり二首」其二(詳註巻四)の頸聯。(名は豈に)云々は、同じく「旅夜書懷」(詳註巻十四)の頸聯。

(当) は、対である。(霞綺)は、彩りあざやかな霞が錦や綺(あ

やぎぬ)を曬すがごときをいう。謝朓の詩に「餘霞散じて綺の如し」

と。樽を開いてこれに対す、風景の美を言う。酒もやはり流霞の称がある。樽酒の色が(霞)と艶を比べるのをあらわす。もはや世間一般のありきたりなものではない。(軽くして初めて散ず)の三字は、極めて巧みな表現である。(輕)は、(綺)字にびつたりだ。(散)は、色がしだいに薄れて減ずること。けだし黄昏に迫るのである。(荷珠)は、荷の上の露珠。梁・元帝の詩に見える。ここでは夜に入るのを言う。(荷)の間を棹を廻らして過ぎると、(珠)なす露が棹に触れて碎け散り(却)ってまたまるく結ぶ。けだし当初は亭上に飲んでいたが、ずっと居続け、晩になろうとする頃に(前湖)に(船)を浮べた。そして(船を回らす)の遅きこと、そのまま露を侵すに及ぶのである。上の句は酔顔爛漫として、耳たぶまで赤くなっているが、下の句は涼気冷然(ひんやり)として、なんと爽快なことか。それに(初)字は(やつとの意で)その久しきをあらわし、(却)字はその速かなるをあらわす。ただ二つの虚字で、勢態(なりゆきありさま)を目のあたりにするかのようだ。幹旋(運用)の妙をとくと見よ。

不_二但_一習池_ニ歸_テ酩酊_{スル}ノミナラ 君看_ヨ鄭谷去_テ賁_{スル}縁

※酩酊_ノミツブレル 賁縁_ニヒツ、ク

習池_ハ比_ニ前湖_ニ。酩酊_甚醉貌。歸_テ酩酊_ハ倒語。謂_テ酩酊_{シテ}而歸_ヲ。

晉_ノ山簡鎮襄陽_ヲ。毎_ニ出遊_ニ、之_ハ習氏ノ園池_ニ、置酒_{シテ}輒醉_フ。兒

童歌_曰、山公出_、何_レ許_、往_至高陽池_ニ。日夕倒載_、歸_、酩酊_{無_レ所_レ知}。君_ハ指_ニ二公子_ヲ。鄭谷見_レ前_、亦因_テ姓_ニ用_レ之_ヲ指_ニ亭_ヲ。

蓋亭傍_レ山_ニ也。去_ハ猶_レ往_、謂_テ赴_ニ亭_ニ也。賁_進也。吳都賦_ニ賁_ニ縁_{スト}山岳之岳_ニ。韻會_ニ賁縁_ハ縁連_也。此限_ニ第三句_ニ。言_ニ再_ニ就_レ就_レ亭_ニ而憩息_ヲ焉。蓋淹留_ノ二字、一篇_ノ樞軸_也。不但_如中_ニ山公遊_ニ習家_ニ、徒_ニ池上_ニ酩酊_{シテ}而還_上、更_ニ復同_テ到_ニ鄭谷之亭_ニ、縁連淹留

之久_キ、入_レ夜_ニ尙未_ニ有_テ歸_一、主人殷勤之厚_キ、有_レ加_{コト}無_レ己_{コト}

也。因^レ賁^ニ進^ミ、亦爲^ニ賁^ニ。一説^ニ因^テ謂^フ此^ニ萬^ノ諧^ノ謔^ノ之意^ヲ。尊^ニ鄭^ニ谷^ニ爲^ニ難^ニ到^ニ之所^ニ。賁^ニ方^ニ許^ニ到^ニ耳^ト。案^ニ孟^ニ浩然^ニ詩^ニ沙岸曉^ニ賁^ニ。皇^ニ甫^ニ冉^ニ詩^ニ賁^ニ幽^ニ谷^ニ遠^ニ。韓^ニ退^ニ之^ニ詩^ニ青^ニ谷^ニ無^ニ賁^ニ。難^ニ賁^ニ。是^ニ皆^ニ攀^ニ緣^ニ之^ニ義^ニ。取^ニ諸^ニ吳^ニ都^ニ賦^ニ。公^ニ詩^ニ亦^ニ與^ニ谷^ニ字^ニ通^ニ脈^ニ用^ニ之^ニ。斷^ニ非^ニ鑽^ニ刺^ニ之^ニ謂^ニ。

(注28) 薛益『分類』に次の(注29)に挙げた箇所が続けて「酩酊は甚だ酔ふ貌」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注29) 薛益『分類』に「習池は、習家の池園。晋の山簡襄陽に鎮せしとき、多く其の池に遊び、輒ち酔うて帰る。兒童歌いて曰く、山翁出づること何れの許ぞ、往きて高陽池に至る、日夕倒酔して帰る、酩酊して知る所無し」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。『晋書』卷四十三、山簡伝に「永嘉三年(三〇九)、(中略)襄陽を鎮す。時に四方寇乱、天下分崩し、王威振るはず、朝野危懼す。簡、優游して歳を卒へ、唯だ酒のみ是れ耽る。諸習氏は、荆土の豪族にして、佳園池有り。簡、出でて嬉遊する毎に、多く池の上に之き、置酒して輒ち酔ひ、名づけて高陽池と曰ふ。時に童兒有り歌いて曰く、山公出づること何れの許ぞ、往きて高陽池に至る。日夕倒載して帰る、若し知る所無し」云々と。若しは、酩酊と音義同じ。疊韻語。

(注30) 訳註稿(一)、002「鄭駙馬潜曜洞中に宴す」詩の第七句に「自らはれ秦楼鄭谷を庄す」とあり、詳解に「漢の鄭子真、名は朴。谷口県の人。身を修め自保す。王鳳之を聘す屈せず。楊子法言に谷口の鄭子真、其の志を屈せずして巖石の下に耕す。名、京師を震はすと」。

(注31) 『文選』卷五、西晋・左思の「吳都の賦」に「山嶽の岵に賁縁し、江海の流れに暮歴す」と。

(注32) 釈大典『杜律發揮』に「韻会ニ賁縁ハ縁連也。世説ニ賁縁シテ須入^ニ郇公^ニ厨^ニ。此以^ニ人^ニ言^ニ。孟浩然詩ニ沙岸曉^ニ賁縁^ニ。此以^ニ地^ニ言^ニ。君看^ニ鄭谷^ニ去^ニ賁縁^ニ。此属^ニ地^ニ与^ニ人^ニ。と。韻会は、『古今韻会舉要』のこと。その上平声真韻の賁字の条に「賁は縁連なり」と。世説は、『李卓吾批点世説新語補』卷十九汰侈。ちなみに、元禄七年(一六九四)刊の和刻本は、賁字を誤って寅に作るが、安永八年(一七七九)刊本はこれを正す。郇公は、唐の韋陟のこと。孟浩然の句は、後の(注35)参照。

なお、釈大典の指摘は、清・陳廷敬「杜律詩話」(巻下)に「韻会に賁縁は連絡なり。本と詩家常用の字。孟浩然に沙岸曉賁縁す。公の詩に萍泛んで賁縁を苦しむ」とあるのを補訂したものであろう。杜甫の例は「秋日夔府詠懷 鄭監・李賓客に寄せ奉る一百韻」(詳註卷十九)の第三十六句。

(注33) ちなみに、『杜律詩話』に(注32)に挙げた箇所が続けて「俗語に賁をもつて道地を為す、亦た賁縁と曰ふ」と。道地は、安全弁。陳廷敬の説は詳註にも引くが、それには「俗語に潜かに賁縁を通ずるを以て賁縁と為す、此れと同じからず」と。

(注34) 顧宸「註解」に「末の二句、諧謔の意を寓す」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。また「唐詩貫珠」には「賁縁は、是れ延縁鑽刺之を用ふ。乃ち諱意を兼ね。鄭谷を導んで到り難きの所と為す。賁縁して方に到ることを許さる耳」という。《鑽刺》は、近世語で人に取り入る意。例えば、宋・俞文豹「吹劍四録」に「賁縁鑽刺、奔競して風を成す」と。

(注35) 盛唐・孟浩然「峴潭の作」(『全唐詩』卷一五九)に「石潭隈隩に傍ひ、沙岸曉に賁縁す」と。

(注36) 中唐・皇甫冉「鄭少尹の中岳寺を祭り北のかた蕭居士越の上方を訪ぬるに和す」詩(『全唐詩』卷二四九)に「賁縁して幽谷遠く、蕭散たり白雲の餘」と。

(注37) 中唐・韓愈「古意」詩(『韓昌黎集』卷三)に「我之を求めんと欲して遠きを憚らず、青壁路無くして賁縁し難し」と。

(注38) 前の(注34)に挙げた「唐詩貫珠」参照。

《習池》は、《前湖》に比す。《酩酊》は、はなはだしく酔うさま。《帰って酩酊》は倒語で、《酩酊して(帰)ること。晋の山簡は、刺史として襄陽を治めた。出でて遊ぶたびに、習氏の園池にゆき、置酒してそのたびに酔っぱらった。子供たちが歌って曰く、「山公出づること何れの許ぞ、往きて高陽池に至る。日夕倒載し帰る、酩酊して知る所無し」と。《君》は、二公子を指す。《鄭谷》は、前に見える。ここの姓にちなんで用い亭を指す。けだし亭は山に傍うているのであろう。《去》は、往とはほぼ同じで、亭に赴くことである。《賁》は、進である。「吳都の賦」に「山岳の岵に賁縁す」、「韻会」

に「黄縁は縁連なり」と。これは第三句にびたつくつについて、再び亭に就いて休憩するのを言うのである。けだし「淹留」の二字は、一篇の枢軸。「但」だ山公が「習」家に遊び、いたずらに「池」のほとりで「酩酊」して帰っていったようなだんではなく、更にそのうえ引き返して「鄭谷」の亭に到り、久しく縁連「淹留」（いつまでも留まってぐずぐず）して、夜に入ってもなおまだあえて御輿をあげて帰ろうとしないのは、主人のねんごろなもてなしが、ますます手厚くなる一方だからである。路に因つて仕進を求めるのを、やはり「黄縁」とする。一説にそれでいう、諧謔の意を寓す。「鄭谷」を導んで到り難き所とし、「黄縁」してやっと到ることを許されたのだと。案ずるに孟浩然の詩に「沙岸晚黄縁す」、皇甫冉の詩に「黄縁して幽谷遠し」、韓退之の詩に「青谷路無くして黄縁し難し」とあり、いずれも攀縁の義で、これを「呉都の賦」に取る。公の詩もやはり「谷」字と氣脈を通じてこれを用いる。断じて「鑽刺」（取り入る）の意ではないのだ。

137 曉發ス公安^{注1}、數月憩息^{注2}此縣^{注3}
憩去例反、休也。年譜大曆三年秋、自江陵移居公安。冬晚之岳州。案公移居公安詩云、水煙通徑草、秋露接園葵。而留別大易云、沙村白雪仍含凍、江縣紅梅已放春。是以秋至此縣、暮冬始去。留寓僅五六月矣。編次^{注4}在下別大易之次上。

(注1) 錢注(卷十八) および輯註(卷十九) は「數月」以下六字を原注とする。詳註(卷二十一) も同じ。

(注2) 例えば、『字彙』には「憩、去例の切、音契、息なり」と。

(注3) 宇都宮遷庵の増広本に挙げる明・単復の年譜大曆三年の条に「三月、江陵に至る。秋、居を公安に移す。冬晩、岳州に之く」と。

(注4) 南宋・陸游『入蜀記』卷五に「老杜の『曉に公安を發す』詩の注に云ふ、(數月此の県に憩息す)と。按ずるに公の『居を公安に移す』詩に

云ふ、(水煙徑草に通じ、秋露園葵に接す)と。而して『大易沙門に留別す』に云ふ、(沙村の白雪仍ほ凍を含み、江県の紅梅已に春を放つ)と。則ち是れ秋を以て此の県に至り、暮冬始めて去る。其の(數月憩息す)と曰ふは、蓋し此の爲なり」と。渡会末茂『杜律評義』にも挙げる。また「公の『居を公安に移す』詩」以下、宇都宮遷庵の増広本に挙げる。顧宸『註解』輯註(卷十九) もほぼ同じ。これらも増広本に挙げる。「居を公安に移す」は、「居を公安に移し、敬んで衛大郎欽に贈る」詩(詳註卷二十二)のこと。「大易沙門に留別す」は、訳注稿(四)、126「公安の大易沙門に留別す」詩のこと。

《憩》は、去例の反、休である。年譜に「大曆三年の秋、江陵より移つて公安に居す。冬晩、岳州に之く」と。案ずるに、公の「居を公安に移す」詩に「水煙徑草に通じ、秋露園葵に接す」といい、そして「大易に留別す」詩に「沙村の白雪仍ほ凍を含み、江県の紅梅已に春を放つ」というのからすると、秋にこの県に至り、冬の暮になつてから去つたことになる。留寓することわずかに五六ヶ月であつた。編次として「大易に留別す」詩の次にあるのがふさわしい。

北城擊柝復欲^{注1}罷^{注2}、東方明星亦不^{注3}遲^{注4}。

明星^{注5}、啟明星。晨^{注6}先^{注7}見^{注8}東方^{注9}、光最明。故^{注10}後^{注11}衆星^{注12}而沒^{注13}。不^{注14}遲^{注15}不^{注16}久^{注17}也。照^{注18}對^{注19}擊柝欲^{注20}罷^{注21}、而言^{注22}啟明之光亦將^{注23}不^{注24}久^{注25}而沒^{注26}也。公欲^{注27}發^{注28}候^{注29}曉^{注30}、柝聲闌珊、明星漸微、天將^{注31}旋^{注32}明^{注33}也。

(注5) 薛益『分類』(卷一、紀行)に「明星は啓明。曉の星なり」と。宇都宮遷庵の両著にも挙げる。《啓明》については、古くは『詩經』小雅・大東に「東に啓明有り、西に長庚有り」と見え、毛伝に「旦に出づ、明星を謂いて啓明と為す。日既に入る、明星を謂いて長庚と為す。庚は続なり」と。また鄭風・女日雞鳴には「子興きて夜を視よ、明星爛たる有り」とあり、朱熹の集伝に「明星は、啓明の星。日に先んじて出づる者なり」と。

(注6) 薛益『分類』に(注5)に挙げた箇所に続けて「遅からずは、久しからざるなり」と。宇都宮遷庵の両著にも挙げる。

〔注7〕 闌珊は、衰えるさま。疊韻語。『夜航詩話』巻五に「闌珊は凋散の貌」として、中晩唐詩や宋詩それに明・高啓の例を挙げる。

〔注8〕 ちなみに、釈大典の『杜律發揮』に「亦不_レ遲、遲_ハ緩也。言_二夜_一旋_二明_一」と。なお、大典は〈旋〉字を「ツイデ」と訓じているが、詳解では踊字「く」をつけており、それが誤りでないとすれば、「ヤウヤウ」もしくは「オヒオヒ」と訓じたものか。このこと俟考。

〔明星〕は、啓明星。夜明け方に太陽に先んじて〈東方〉にあらわれ、光が最も明るい。それゆえ多くの星におかれて沈む。〈遅からず〉は、久しからずである。〈撃柝罷まん欲す〉に呼応して、啓明の光もやはりまさに久からずして没するのを言うのである。公は出発しようとして暁の空を候うと、〈柝〉声はしだいに聞こえなくなり、〈明星〉はだんだんと微かになって、天空はまさにしだいに明けようとするのである。

隣雞野哭如_二昨日_一 物色生_二態能_二幾時_一

野哭_ハ哭泣_ハ遍_レ野_ニ。詳_二見_二閨夜_一詩_ニ註_ニ。公安_ハ旅寓、隣雞野哭、且旦所_レ聞者。今將_二去_一此縣_ニ、特_二憐_二而哀_一之_也。能_二幾時_一言_レ不_レ久_也。凡_二萬物_一之色、浮生之態、皆須臾_ニ變化_一、轉瞬陳跡、不_二唯_二吾身世_一夢幻_ニ也。隣雞_ト與_二野哭_一、物色_ト與_二生_一態、就句對_二格_一。能_二幾時_一三字、亦一篇_ハ樞軸。起處已_二寓_二其意_一、至_レ結_ニ和盤托出_一矣。

〔注9〕 訳註稿(四)、107「閨夜」詩の詳解に「野哭は嗟怨号泣道路に盈ちて、唯だ家裏のみならざるを言ふなり」と。

〔注10〕 自対体、当句対ともいう。『夜航詩話』巻二に「一句中本自ら対偶を為す、之を自対体と謂ひ、亦た当句対、就句対と曰ふ。方板中に活を用ふる時に之を用ふ」と。訳註稿(四)、014「曲江酒に對す」詩の〔注12〕参照。

〔注11〕 ありったけのものを出すこと。明清の俗語。訳註稿(六)、062「桃樹に題す」詩の〔注22〕参照。

〔野哭〕は、哭泣の声が野に響きわたることである。「閨夜」詩の註に詳しく見える。公安の旅寓で、〈隣雞〉や〈野哭〉は毎日聞え

たものであるが、今まさにこの県を去ろうとして、特に憐れんことを哀しむのである。〈能く幾時ぞ〉は、久しくないのを言うのである。すべて万物の景色、浮生(定めなき世)のありさまは、どれも須臾(あつという間)に変化して、〈転瞬〉(かえりみ)すれば〈陳跡〉(ふるきあと)となる。ただ己が身世の夢幻なるのみではないのである。〈隣雞〉と〈野哭〉と、〈物色〉と〈生_二態_一〉とは、就句対の格。〈能く幾時ぞ〉の三字も、やはり一篇の樞軸。起處にすでにその意を寓するが、結びに至ってすっかり説き明かしている。

舟楫渺然自此去_リ 江湖遠_テ適_ニ無_二前期_一

※前期…アテ

適音釋_(金13)、往也。無_二前期_一言_レ不_レ知_レ所_レ止_也。此自嘆_二其浪跡無_二定_一ルコト。今扁舟渺然_{トシテ}離_二公安_一而去_ル、前程茫茫_{トシテ}莫_レ知_レ所_レ之_ク、亦唯飄_二漂_一スル江湖間_ニ而已。其_レ得_二何_レ處_一ニシテ而止_ルコトヲ哉。

〔注12〕 例えば、『字彙』に「適、施職の切、音積。如なり、往なり」云々と。

釈は漢音でセキ。行くの意の場合、適をテキと読むのは慣用音。

〈適〉、字音は釈、往である。〈前期無し〉は、止まるところを知らぬのを言うのである。これは自らその浪跡(さすらいの身)の定まらないのを嘆ずる。今、扁舟は〈渺然〉(ちつぽけでかすか)として公安を離れゆく、これから先の道のりは茫茫(はるかにぼんやり)として、ゆくところを知ることなく、やはりただ〈江湖〉の間にさすらいただようばかりだ。いったいどこに止まることができるのだろうか。

出門_テ轉_二眄_一已_二陳跡_一 藥餌扶_レ吾_ヲ隨_二所_一之_ヲ

※轉眄…ミカヘルマニ 随…マカス

眄音_(金13)、斜_ニ視_一ル也。轉_二眄_一廻_レ視也。王右軍蘭亭序_(注14)俯仰之間、已_二爲_二陳跡_一ト。今日_ニ轉_二眄_一、更_ニ切_一ナリ。陳跡_ハ指_二公安_一、僑居_ニ而言_一。公數月所_ニ憩息_一、今將_二離_一別_ニ、亦有_二依戀_一意_ト。纔_ニ一_一出_レ門_ヲ

而去、倏忽轉眄、間、便已爲陳跡矣。隨所_レ之言_レ任_レ飄蕩、即無_レ前期也。公素患_二肺病_一、又病_レ痲、半身不遂、唯藥餌是賴、扶持殘軀。生涯幾何。悠悠浪迹、抑任_レ彼天命、隨所_レ遇而已。誠無_二奈何_一之辭。嗚呼、公_{ニシテ}而至於此極、其_レ謂_二之_一何哉。

(注13) 『広韻』去声霰韻に「眄、斜視」と。眄、漢音はベン、呉音はメン。

(注14) 王右軍は、晋・王羲之(三〇三―三六六)のこと。その「蘭亭序」は「蘭亭記」として『古文真宝』後集卷四に収め、「已」字を「以」に作る。

音義同じ。薛益『分類』に「陳迹は王羲之が蘭亭の記に俯仰の間に、已に陳迹と為ると」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。なお、詳説は邵宝『集註』(卷二十二、紀行類)のほぼ同様の注を挙げる。

(注15) 杜甫の肺病については、訳注稿(中)、079「十二月一日三首」其一の(注27)参照。

(注16) ちなみに、訳注稿(一)、「杜文貞公伝」に「公蜀を離れて自り漂泊すること六年、是れより先、舟居中風に染し、偏身遂げず」と。

「眄」、字音は_{べん}、斜めに視ることである。「転眄」は、廻視である。王右軍「蘭亭の序」に「俯仰の間、已に陳跡と為る」と。今、「転眄」というのは、更に痛切である。「陳跡」は、公安の僑居(たびずまい)を指して言う。公の数か月憩息した場所で、今まさに離別せんとして、やはり名残惜しく離れがたい意がある。もしいったん「門」を「出」て去れば、倏忽(たちまち)「転眄」の間に、すぐに「已」に「陳跡」となる。「之く所に随ふ」は、飄蕩(さすらい)に任せるの言う。とりもなおさず「前期無し」である。公は平素より肺病を患い、そのうえ痲(中風)を病み、半身不随で、ただ「薬餌」を頼りとし、残軀(老いさらばえた身)を扶持する。生涯はどれほどか。悠悠たる(あてどない)浪迹(さすらいの身)、そもそもの天命に任せて、遇うところに随うだけだ。誠に奈何(いかん)とするなきの辞。ああ、公のような御方にしてこのどんづまりに至る、いったいこれを何といえよいのだろう、言葉を失う。

138 長沙送李十一衡

長沙_ハ即潭州。唐_ノ初改_テ長沙郡_ヲ爲_二潭州_一。天寶中、復爲_二長沙郡_一。公是歲夏再_レ赴_レ衡、復回_テ次_二潭_一。蓋欲_レ歸_二襄陽_一也。

李衡不_レ詳_二何_一人_一。以_二詩意_一考_レ之_一。蓋還_二長安_一也。

(注1) 『旧唐書』卷四十、地理志三、江南西道、潭州の条に拠れば、武徳四年(六二二)に長沙郡を改めて潭州とし、天寶元年(七四二)に長沙郡に改め、乾元元年(七五八)、復た潭州とした。

(注2) 『集千家註』(卷二十)の黄鶴注に「公、時に衡に在り、復た回つて潭に次す。蓋し襄陽に帰らんと欲するなり」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。なお、襄陽(今の湖北省襄樊市)は、杜甫の先祖ゆかりの地で、訳注稿(一)、「杜文貞公伝」には「其の先、襄陽の人」とする。その(注2)も参照。「帰」は、本来の居場所にかえる意。

「長沙」は、とりもなおさず潭州。唐の初め長沙郡を改めて潭州とした。天寶(七四二―七五六)年間、復た長沙郡とした。公は、この歳(大暦三年)の夏、再び衡州に赴き、復た引き返して潭州に滞留した。けだし襄陽に帰ろうとしたためであろう。(李衡)は、どういふ人か不詳。詩意からこれを考えるに、けだし長安にもどるのであろう。

與_二子_一避_二地_一西康州_一 洞庭相逢十二秋

避_二地_一避_二禍_一亂_二於是地_一也。西康州_ハ即同谷縣。乾元二年、關輔饑亂、穀食踊貴、公西_ニ去_テ度_レ隴_ニ客_ニ秦州_一、尋_ニ往_二同谷_一。時_ニ李衡_一亦避_二地_一寓_二居_一于此。今_ニ於_二洞庭_一邂逅相遇、追_ニ念_二ス_一。嘗_ニ同_二シ_一艱難、已_ニ經_二十二秋_一矣。兩句第二字竝_二拗_一。或_ハ謂_二子_一作_二君_一、庭叶_二去聲_一。

(注3) 邵傳『集解』に西康州の下に「同谷県」と注する。邵宝『集註』(卷二十三、送別類)および薛益『分類』(卷二、送別)にも「西康州は即ち同谷県」と。「分類」は宇都宮遯庵の増広本に挙げる。

(注4) 邵宝『集註』および薛益『分類』に(注3)に挙げた箇所に続けて「乾元二年、関輔飢亂す。公、官を棄て去り、此に客居す」と。「分類」は

宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。訳注稿(一)、「杜文貞公伝」にも「乾元二年、関輔饑乱す。官を棄てて華を去り、西に隴を度つて秦州に客たり。尋いで成州の同谷県に寓す」と。

(注5) この言い方、『詩経』鄭風・野有蔓草に「邂逅して相遇ふ、我が願ひに適ふ兮」とあり、その毛伝に「邂逅は、期せずして会ふ」と。

(注6) この詩の二・四・六字目の平仄と韻字を、平字は○、仄字は●、韻字は◎で示すと、次のごとくである。

與子避地西康州。子と地を西康州に避けし
洞庭相逢十二秋。洞庭に相逢ふ十二秋
遠愧尚方曾賜履。遠く愧づ尚方曾て履を賜ふを
竟非吾土倦登樓。竟に吾土に非ずして登樓に倦む
久存膠漆應難竝。久しく膠漆を存するも応に竝び難かるべし
一辱泥塗遂晚收。一たび泥塗に辱められて遂に收めらるること晚し
李杜齊名真忝竊。李杜名を齊しくするは真に忝窃
朔雲寒菊倍離憂。朔雲寒菊 離憂を倍す

第一句の〈子〉、第二句の〈庭〉が二四不同二六対の規則に合わない。或る人の説が、誰の説で何に見えるか不明だが、〈君〉は平声で、平字○。〈庭〉は、去声であれば仄字で●。そのように改めれば、拗体は避けられる。

〈地を避く〉は、禍乱をこの地に避けるのである。〈西康州〉は、とりもなおさず同谷県。乾元二年(七五九)、首都圏一帯は飢饉や戦乱があり、穀食は騰貴した。公は西に去つて隴をわたり秦州に客寓した。ついで同谷に往つた。時に李衡もやはり〈地を避〉けてこの地に寓居していた。今、〈洞庭〉に邂逅して相遇う。かつて艱難を同じくしたのを後から思うと、すでに〈十二秋〉を経ている。両句の第二字はともに拗す。或いは謂う、〈子〉は〈君〉に作るのがよい。〈庭〉は去声に叶う、と。

遠愧尚方曾賜履。竟非吾土倦登樓。
尚方賜履見終明府水樓詩註。公在成都三拜工部員外郎。得與尚方賜履之列。然未嘗登朝奉職。徒帶虛

銜耳。故曰「遠愧」。王粲登樓賦雖信美而非吾土。兮、曾何足少。以少留。竟字緊接洞庭。嘆下洞庭雖絕景、至竟是異鄉也。公思鄉登樓、欲歸而不復得、徒抱非土之嘆、不勝悵望自悲。故不欲復登也。蓋李還入京師、友得爲朝官、公因自省吾身、嘆其不能如王喬之飛。而朝。而徒似王粲之登樓以悲也。

(注7) 〈竟〉字、詳解が底本とした邵傳『集解』は〈境〉に作り、「当に竟に作るべし」と注する。

(注8) 訳注稿(二)、088「七月一日終明府の水樓に題す」詩の詳解。

(注9) 邵宝『集註』および薛益『分類』、顧宸『註解』に「王粲登樓の賦に信に美なりと雖も、吾が土に非ず、曾て何ぞ以て少しく留まるに足らん」と。『分類』『註解』は宇都宮遷庵の増広本に、『集註』は詳説に挙げる。三国魏・王粲(二七七～二一七)の「登樓の賦」は『文選』巻十一に収む。

〈尚方〉〈履を賜ふ〉は、「終明府の水樓」詩の註に見える。公は成都で工部員外郎に拝せられ、〈尚方〉からの〈賜履〉の列に与ることができた。されどいまだかつて朝廷に登つて職を奉じておらず、いたずらに虚銜(実体のない肩書)を帯びただけだ。それゆえ〈遠く愧づ〉という。王粲の「登樓の賦」に「信に美なりと雖も吾が土に非ず、曾て何ぞ以て少しく留まるに足らん」と。〈竟〉字は、びたと〈洞庭〉に接する。〈洞庭〉は絶景とはいえ、とどのつまりは異郷なるを嘆ずるのである。公は故郷を思い〈樓〉に〈登〉ったが、帰りたいと思つてもかなわず、いたずらに〈土〉(故郷)に〈非〉ずとの嘆きを抱き、悵望して自ら悲しみにたえきれない。それゆえ再びは〈登〉るのを欲しないのである。けだし李衡は京師(長安)にもどると、朝官となることができるはずだ。公はそれで自ら吾が身を省み、王喬が鳥を飛ばして参内したようにはできず、王粲が〈樓〉に〈登〉つて悲しんだのといたずらに似ているのを嘆ずるのである。

久存^{クウソン}膠漆^{カウシツ}應^{オウ}難^{ナン}竝^{レイ} 一 辱^ニ泥塗^ニ遂^ニ晚^ニ收^ニラルコト

前聯悲^レ己^ヲ、此聯推^レ李^ヲ。膠漆^{カウシツ}ハ言^フ久要^ニ之交^ヲ。漢書^{漢書}ニ雷義陳重友^ト善^シ、同^ニ舉^ニ孝廉^ニ、俱^ニ拜^ニ尚書郎^ニ。時人語^テ曰^ク、膠漆自謂^シ堅^シ、不^レ如^ニ雷^ト與^ニ陳^ト。應難^ニ竝^ニ言^フ李之材器^ヲ、必當^ニ顯^ニ于朝^ニ。我則老朽^ニ不^レ能^ニ企^ニ及^ニ也^ヲ。泥塗^ニ言^フ沈^ニ淪^ニスルヲ卑下^ニ。左傳^{左傳}趙孟^ニ謂^フ絳縣^ニ老人^ニ曰^ク、使^ニ吾子^ヲ辱^ニ在^ニ泥塗^ニ久^ニ矣^ヲ。晚^ニ收^ニ謂^フ見^ニ收用^ニ之^ヲ晚^ニ。詳^ニ案^ニ語意^ヲ、李必^ニ之^ニ官^ニ、故^ニ祝^ニ行^ニ見^ニ登庸^ニ。下^ニ句^ニ公自謂^フ、嘆^ニ終^ニ不^レ收^ニメラル也^ヲ。

(注10) 『文選』卷二十七、三国魏・曹植『箴篋引』に「久要忘る可からず」とあり、五臣劉良の注に「久要は久交なり」と。

(注11) 邵傳『集解』に「雷義陳重友とし善し。時に膠漆の堅と称す」、薛益『分類』に「漢の陳重字は景公、雷義字は仲公と友為り、順帝の朝に義は茂才に挙げられ、仲に譲る。刺史聴さず、義遂に命に应ぜず。後同じく孝廉に挙げられ、俱に尚書郎に拜せらる。時に語りて曰く、膠漆自ら堅しと謂ふも、雷と陳とに如かず」と。『分類』は字都宮逕庵の両著にも挙げる。『後漢書』独行列伝、陳雷伝に見える。『漢書』とするのは誤り。

(注12) 邵宝『集註』および薛益『分類』に「左伝に趙孟、絳県の老人に謂いて曰く、吾子をして泥塗に辱在せしむること久し矣」と。『分類』は字都宮逕庵の両著にも挙げる。『左伝』は、襄公三十年。

(注13) 邵宝『集註』および薛益『分類』に「收むること晩しとは收用の晩きを謂ふ。言ふところは未だ収められざるなり」と。『分類』は字都宮逕庵の両著にも挙げる。

前聯は己れを悲しみ、この聯は李衡を推す。〈膠漆〉は、久要（長い間）の交わりを言う。『後漢書』に「雷義と陳重とは友とし善し、同じく孝廉に挙げられ、俱に尚書郎に拜せらる。時人語りて曰く、膠漆自ら堅しと謂ふも、雷と陳とに如かず」と。〈底に竝び難かるべし〉は、李衡の人物器量は、必ず当然朝廷に顕われるに違いない、私はといえは、老いぼれてしまい望んでも追いつけないと言うのである。〈泥塗〉は、低い地位に沈淪するのを言う。『左伝』に趙孟が絳県の老人に謂いて曰く、「吾子をして泥塗に辱在せしめる

こと久し矣」と。〈収めらること晩し〉は、〈収〉め用いられるのが〈晩〉いこと。詳らかに語意を案するに、李衡はきつと官に赴くので、それゆえゆくゆくは登用せられんことを祝する。下句は公自らの謂で、しまいまで〈収〉められないのを嘆ずるのである。

李杜齊^ニハ名^ヲ眞^ニ泰竊^ニ 朔雲寒菊倍^ニ離憂^ニ

※朔雲：シクレソラ 寒菊：スガレキク

後漢・李膺杜密、名行相次^ク、時人稱^ニ李杜^ニト。范滂^ニ坐^ニ黨事^ニ、詣^ニ獄^ニ。與^ニ母訣^ニ。母曰^ク、汝今得^ニ與^ニ李杜^ニ齊^ニト^ハ名^ヲ、死^ニスモ亦何^ノ恨^ニ。此因^ニ姓^ニ借^ニ以^ニ喻^ニ衡^ニ與^ニ己^ニ。泰竊^ニ泰^ニ事^ニ竊^ニ名^ニ也^ヲ。陸機謝^ニ平原^ニ内史^ニ表^ニ、豈臣蒙^ニ垢^ニ含^ニ吝^ニ、所^ニナラフヤ宜^ニ泰竊^ニ。蓋^ニ衡^ニ當^ニ仕^ニ朝^ニ登庸^ニ、己^ハ則^ニ以^ニ禡^ニ散^ニ終^ニ。乃^ニ李杜^ニ齊^ニ名^ニ竝^ニ稱^ニハ眞^ニ古人^ニ所^ニ謂^ニ泰竊^ニ、不^ニ啻^ニ愧^ニ賜^ニ履^ニ虛名^ニ也^ヲ。北方^ニ曰^ク朔雲寒雲也。寒菊^ハ殘菊也。此應^ニ秋^ニ字^ニ爲^ニ結^ニ。時屬^ニ秋^ニ末^ニ、風景殊^ニ悲^ニ、寒雲黯慘、殘菊蕭索、倍^ニ增^ニ離憂^ニ、不^レ勝^ニ傷^ニ目^ニ。蓋^ニ不^ニ但^ニ時景^ニ、世態衰亂、亦復如是。所^ニ以^ニ深^ニ致^ニ感慨^ニ也。此篇蓋^ニ爲^ニ公^ニ七言律^ニ絕筆^ニ。居^ニ無^ニ何^ニ遂^ニ卒^ニ。宜^ニ其衰颯^ニ無^ニ氣力^ニ也。公本集七律凡一百五十九首。今此集所^ニ錄^ニ通計一百三十三首、遺^ニ二十六首^ニ矣。須^ニ俟^ニ他日^ニ得^ニ聞^ニ、改^ニ正^ニ其編次^ニ、追補^ニ以加^ニ註說^ニ也。

(注14) 薛益『分類』に「李杜は、漢書に靈帝党争起くる。杜密免れて本郡に帰る。李膺と俱に坐して名行相次ぐ。時人李杜と称す」。字都宮逕庵の両著にも挙げる。『漢書』は、『後漢書』の誤り。その党錮列伝。

(注15) 薛益『分類』に「范滂獄に詣つて、母と訣る。母曰く、汝今李杜と名を斉しうすることを得たり、死すとも何ぞ恨まんと。注に云ふ、李膺・杜密なり」と。字都宮逕庵の増広本にも挙げる。范滂の伝は、『後漢書』党錮列伝に見える。また、後漢・蔡邕「陳太丘の碑文」(『文選』卷五十八)に「会たま党事に遭ひ、禁固せらるること二十年」と。党事は、後漢末に政界浄化、宦官追放をめざした知識人らの運動を弾圧した事件、いわゆる党錮の変をいう。

〔注16〕 西晋・陸機（二六一～三〇三）の「平原内史を謝する表」（『文選』卷三十七）に「豈に臣垢を蒙り客かなることを含む、宜しく忝窃すべき所ならんや」と。宇都宮遯庵の両著にも挙げる。

〔注17〕 樗散は、役立たず。訳註稿（一）、006「鄭十八虔、台州の司戸參軍に貶せらるるを送る」詩の詳解に「樗散は、莊子の語。樗、丑居の反、不材の木。故に散木を称す。散は用無きなり」と。

〔注18〕 例えば、『字彙』に「朔方は北方なり」と。

〔注19〕 詩体別に分類する清・甫起龍『誦杜心解』によれば、七律は百五十一首。

〔注20〕 実際は一百三十八首。東陽は邵傳『集解』を底本とするが、それに収載する詩とその数は顧宸『註解』も同じ。

後漢の李膺・杜密は名声と品行とが相並び、当時の人は〈李杜〉と併称した。范滂が党錮の変に連坐させられ獄に入れられことになった。母と別れる際、母が曰く、そなたは、今、李・杜と名を齊しくすることができた。死すともやはりどうして恨みましよう、と。これは姓にちなんで借りて李膺と己れとを喩える。〈忝窃〉は、事を忝しめ名を窃むことである。陸機の「平原内史を謝する表」に「豈に臣垢を蒙り客を含む、宜しく忝窃すべき所ならんや」と。けれど李膺は、当然朝廷に仕え登用せられるはずなのに、自分はといえば樗散（役立たず）で終る。それがなんと〈李杜〉として〈名を齊しく〉し併称せられるのは、真に古人のいわゆる〈忝窃〉で、〈賜履〉の虚名を愧ずるだんではないのである。北方を（朔）という。〈朔雲〉は、寒雲である。〈寒菊〉は、残菊（すがれた菊）である。これは〈秋〉字と応じて結びとする。時に秋末に属し、風景は殊に物悲しく、寒雲は黯慘（どんより）とし、残菊は蕭索（うらぶれてひっそり）としており、〈倍〉ます（離憂）（別れの悲しみ）を増し、目を傷めるにたえない。けれど、ただ時節の景色のみならず、世態の衰乱ぶりも、やはりこのようである。深く感慨を致すゆえんである。この篇は、けれど公の七言律の絶筆であろう。ほどなくしてそのまま卒し

た。その衰颯して気力がないのは、もっともなことだ。公の本集に七律は全部で一百五十九首。今、この集に収録するのは通計一百三十三首で、二十六首を遺している。必ずや他日閑を得るのをまって、その編次を改正し、追補して註説を加えるつもりである。

杜律詳解卷之下

先子嘗罹隱引疾閑居、爲諸生講杜律、因自錄其說。曾子固所謂以余之窮、足以知人之窮者。亦有所感而自寓也。從前諸家箋釋、各有得失。蓋訓詁家與風人、肝腸意見不同。偶爾遣興、目前詠景、亦必求所寄託、牽彊傳會、橫生枝葉、遂使詩爲謎、豈作者之意哉。少陵嘗嘆一生懷抱向誰開、乃身後亦復受屈、不止一生而已。先子此解、蒼萃衆說、丁寧反覆、弗遺餘力、使人如目擊其時事。諸生皆曰、先生之隱、後進之幸也。及國校梓行之命下、達董校刻事。謹書之爲跋。

天保六年乙未四月六日

男達拜識

先子嘗て厄に罹り引疾閑居して、諸生の為に杜律を講ず、因つて自ら其の説を録す。曾子固が所謂余の窮を以て、以て人の窮する者を知るに足る者なり。亦た感ずる所有つて自ら寓するなり。従前諸家の箋釈、各おの得失有り。蓋し訓詁家と風人とは、肝腸意見同じからず。偶爾に興を遣り、目前に景を詠する、亦た必ず寄託する所を求め、牽強付会して、横に枝葉を生じ、遂に詩をして謎爲らしむ。豈に作者の意ならんや。少陵嘗て嘆ずらく、一生懷抱誰に向つて開かん、と。乃ち身後も亦た復た屈を受くる、止だに一生のみならず。先子の此の解、衆説を蒼萃し、丁寧反覆、餘力を遺さず、人をして其の時事を目撃するが如からしむ。諸生皆曰く、先生の陋は、後進の幸なりと。国校梓行の命下るに及び、達、校刻の事を董

す。謹んで之を書して跋と為す。

(注1) 亡父をいう。先考。例えば、『孟子』公孫丑上に「曾西蹵然して曰く、吾が先子の畏るる所なり」と。

(注2) 文化十一年(一八一四)八月、藩主に随行して江戸に赴き、翌十二年、帰国の際に許可を得ずに鎌倉に立ち寄ったことが、大横目に指弾され、減給降格の処分を受け組附けとなったことを指すのであろう。なお、この時の作に「乙亥四月、江戸より帰るに、事に坐して俸を削られ、留守散騎に貶せらる。時に年五十有九」と自注を附した五古「自ら遣る」詩(国会図書館蔵『東陽先生詩鈔』巻一)、「乙亥の歳、秩を貶せられ、門を杜ぢ事を守る時の作」という六律「悶を書す」詩(巻三)、さらに五絶「厄に罹りて悶を遣る」四首(巻六)がある。

(注3) 北宋・曾鞏(字は子固。一〇一九―一〇八三)の「賈誼伝を読む」(『宋文選』巻十三)に「故に予の窮餓、以て人の窮する者を知るに足る」と。

(注4) 『詩経』国風の作者。詩人。

(注5) 訳注稿(九)、071「嚴大夫に奉侍す」詩。但し、(懷)字は(襟)に作る。

(注6) 藩校有造館のこと。訳注稿(一)、石川之襲「杜律詳解序」の(注17)参照。

(注7) 東陽の嗣子。名は達、字は有功。拙脩と号した。通称は貫之進。津坂治男氏の『津坂東陽伝』(桜楓社、一九八八年)および『生誕250年津坂東陽の生涯』(竹林舎、二〇〇七年)によれば、天保八年(一八三七)三月二十四日没、五十餘歳。文剛先生と諡されたという。編著に文政四年(一八二〇)刊の菅原琴(一七八八―一八五二)序「三野風雅」十巻がある。これは、江戸期の美濃(三野はその古称。在住及び出身の漢詩人の作を集めたもの。現在、汲古書院刊の『詞華集日本漢詩』第九巻に影印を取め、山田勝弘『美濃の漢詩人とその作品』(研文社、一九九三年)に詳しい紹介・研究がある。その奥附に拙脩居士著書として「頭字韻府」四巻、『講餘謾録』三巻、『世説指掌』二巻、『拙脩詩話』三巻、『拙脩詩鈔』三巻が挙げられている。このうち、『頭字韻府』は、清・余春亭輯。他は未刊か。

なお、大坂に居住した処士高井洪齋(名は泰亮)の天保元年(一八三〇)刊『藝苑叢記』に「人と為り豪邁不羈、容貌魁偉、膂力は人に絶し、声は洪鐘の如し。少時四方に周遊し、詩を以て世に顕る」というが、後年

は稽古精舎で「風流文雅、父の書を読み、讐校鉛槧、漸次粹に上す。又た詩に長じ、手に唐人の篇を釈かかず」(斎藤拙堂『拙堂文集』巻五「稽古精舎記」という日々であつたらしい。詩に秀でていたことについて、『藝苑叢記』に先に挙げた箇所が続けて「其の友詩禪、之に詩を贈り、東阿世を挙げて詩虎と称すの句有り、亦た以て其の詩学、世人の及ぶ所に非ざるを知る可し」という。詩禪は、梁川星巖(一七八九―一八五八)の別号。東阿は、三国魏の曹植(字は子建。一九二―二三三)のこと。かつて東阿王に封ぜられた。拙脩を擬えていう。詩虎は、すぐれた詩の作り手。ちなみに『藝苑叢記』のことは、森銚三「好事儒者中島棕隠」(『森銚三著作集』第二巻、中央公論社、一九七一年)によってこれを知った。

先考はかつて災厄に罹り病氣を理由に職を辞し自宅にひきこもつて、諸生のために杜律を講じられ、そこで自らその説を書き留められた。曾子固のいわゆる「余の窮せるを以て、以て人の窮する者を知るに足る」というもので、やはり心に感ずることがあつて自ら思いを込められたのである。従来の諸家の箋釈には、それぞれ一長一短がある。けれど訓詁学者と詩人とは、心持ちや意見が同じではない。たまたま興を遣つたり、目前に景を詠じたりする場合でも、やはり必ず寄託するところを求め、むりやりこじつけて、ほしいままに枝葉を生じ、かくて詩を謎にしまふ。どうして作者の意図であらうか。少陵はかつて「一生懷抱誰に向つて開かん」と嘆じたが、なんと身後もやはり再びとんだ目にあい、生きてゐる間だけにとどまらなかつたのだ。先考のこの詳解は、衆説(のすぐれた点)を薈萃(採集)し、ねんごろに繰り返し説いて、餘力を遺すことなく、読む者にその時事を目のあたりに見るかのようにさせる。諸生のだれもが「先生の災厄は、後進の我々にとってはおもひの幸いでした」と口にする。藩校で刊行の命が下るに及び、私が校正出版の事を統括した。謹んでこれを書して跋とする。

天保六年乙未四月六日

男達つし拜んで識す

東陽先生杜律詳解後序

夫子不云乎、詩可以興、可以觀、可以羣、可以怨、邇之事父、遠之事君。故詩序曰、先王以是、經夫婦、成孝敬、厚人倫、美教化、移風俗。上世之詩、其道可見。陵遲至於梁陳、斯道實廢、所謂嘲風雪弄花草、莫不爲詩道之累。唐興、詩學大振、而杜少陵之詩爲諸家冠冕。識者遂推爲詩史。又尊爲詩中之經。非以其忠厚惻怛、紀實寫眞、足垂訓於百世邪。夫如此則其爲詩道大矣。後之學詩者、又宜杜詩爲宗。惟杜詩全集、學者或病其浩瀚、要先讀杜律、徐汧流、庶可造其眞源、觀星宿之海也。而舊註聚訟眩惑學者、此東陽先生所以撰詳解。蓋其止於七律者、昔人稱秋興八首謂少陵一生心神結聚之所作。又評諸將五首曰、宛是一章奏議、一篇訓誥、與三百篇并存而可也。苟讀此諸篇、則於杜律已挈裘領。且詩法莫嚴於七律、起結照應、開闔頓挫、不得缺一。此即古文之法、若能依是而通斯法、則亡論近體、雖馴致之古風、七縱八橫、以卷海濤、不失其性情之正。故先生特註、此欲誘掖學者也。夫觀水者必觀其瀾。學者能觀此編、而得少陵之詩所以薄三百篇、則其興觀羣怨、既自弗畔矣。過此以往、究其全集而遊夫決瀋、亦可以知詩道之神化歟。而世或舍之、以摸寫物象、畱連光景爲詩之能事者陋矣。先生博綜經史、著撰固富。如此編實爲緒餘。然嘗曰、此擬朱子註楚辭。其旨豈淺近乎。先生命薰係序、言猶在耳。而不幸卽世、已欲一紀。此編之刻適成、今昔之感不能不切。抑少陵之世、去今久遠、浣花之草堂、東屯之齋、不得憑弔其遺跡。而其詩流傳、天光晴射、雖在百世之下、萬里之外、猶可仰高風挹芳徽。苟觀此編者、其又有感於此。此足以論世。何獨爲詩道之津筏而已哉。

天保乙未七月九日

門人伊賀崇廣堂講官小谷薰謹識

夫子云はざるか、詩は以て興す可く、以て觀る可く、以て群す可く、

以て怨む可し。之を邇くしては父に事へ、之を遠くしては君に事ふと。故に詩の序に曰く、先王是れを以て、夫婦を經し、孝敬を成し、人倫を厚うし、教化を美し、風俗を移す、と。上世の詩、其の道見る可し。陵遲して梁陳に至り、斯道實に廢る、所謂風雪を嘲し花草を弄す、詩道の累を爲さざる莫し。唐興り、詩學大いに振ひ、而して杜少陵の詩、諸家の冠冕爲り。識者遂に推して詩史と爲す。又た尊んで詩中の經と爲す。其の忠厚惻怛、實を紀し眞を寫し、訓へを百世に垂るるに足るを以てに非ずや。夫れ此の如くんば則ち其の詩道爲る大なり矣。後の詩を學ぶ者又た宜しく杜詩を宗と爲すべし。惟だ杜詩の全集、學ぶ者或いは其の浩瀚を病む、要す先づ杜律を読み、徐ろに流を汧つて、庶くは其の眞源に造り、星宿の海を觀る可きなり。而れども旧註聚訟し學ぶ者を眩惑す、此れ東陽先生の詳解を撰する所以なり。蓋し其の七律に止まる者は、昔人秋興八首を稱して少陵一生心神結聚の作る所と謂ふ。又た諸將五首を評して曰く、宛かも是れ一章の奏議、一篇の訓誥、三百篇と并存して可なりと。苟も此の諸篇を読まば、則ち杜律に於いて已に裘領を挈く。且つ詩法は七律より嚴なるは莫し、起結照應、開闔頓挫、一を缺くを得ず。此れ即ち古文の法。若し能く是れに依つて斯法に通ずれば、則ち近体は論ずる亡く、之を古風に馴致すと雖も、七縱八橫、以て海濤を卷き、其の性情の正を失せず。故に先生特に此れを註し、學ぶ者を誘掖せんと欲するなり。夫れ水を觀る者は必ず其の瀾を見る。學ぶ者能く此の編を觀て、少陵の詩の上は三百篇に薄る所以を得れば、則ち其の興觀羣怨、既に自ら畔かず矣。此れを過ぐる以往は、其の全集を究めて夫の決瀋に遊ばば、亦た以て詩道の神化を知る可きか。而れども世に或いは之を捨て、物象を摸寫し、光景に畱連するを以て詩の能事と爲す者は陋なり矣。先生は經史を博綜し、著撰固より富む。此の編の如きは實に緒餘爲り。然れども嘗て曰く、此れ朱子の楚辭に註するに擬す、と。其の旨豈に淺近ならんや。先生

黨に命じて序を係けしむ、言猶ほ耳に在り。而れども不幸にして世に即き已に一紀ならんと欲す。此の編の刻適に成り、今昔の感、切ならざる能はず。抑そも少陵の世、今を去ること久遠、浣花の草堂、東屯の斎、其の遺跡を憑弔するを得ず。而れども其の詩流伝すること、天光晴射のごと、百世の下、万里の外に在りと雖も、猶ほ高風を仰ぎ芳徽を挹む可し。苟も此の編を観る者、其れ又た此に感ずること有らん。此れ以て世を論するに足る。何ぞ独だ詩道の津筏と為すのみならんや。

(注1) 『論語』陽貨篇に「小子何ぞ夫の詩を学ぶ莫きや。詩は以て興す可く、以て観る可く、以て群す可く、以て怨む可く、之を邇くしては父に事へ、之を遠くしては君に事ふ。多く鳥獸草木の名を識る」と。興は、詩の持つ情感の喚起力。観は、社会への洞察力。群は、切磋琢磨する教育力。怨は、現実への批判力。

(注2) 「毛詩大序」に「先王是れを以て、夫婦を經し、孝敬を成し人倫を厚うし、教化を美にし、風俗を移す」と。なお、この序は卜商(子夏)の作として『文選』卷四十五にも収める。

(注3) 陵遲は、しだいに衰えること。衰頹。(注4) に見える陵夷も同じ。中唐・元稹(字は微之。七七九〜八三二)の「唐の故の工部員外郎杜君墓係銘並びに序」(『元氏長慶集』卷五十六)に「陵遲して齊・梁に至り、淫艶刻飾、佻巧小碎の詞劇し」と。この「杜君墓係銘並びに序」は、京都大学中国文学研究室編『唐代の文論』(研文出版、二〇〇八年)に訳註を収める(尾崎勤執筆)。

(注4) 中唐・白居易(字は樂天。七七二〜八四六)の「元九に与ふる書」(『白氏文集』卷二十八)に「陵夷して梁・陳の間に至れば、率ね風雪と嘲れ、花草を弄ぶに過ぎざるのみ」と。陵夷は、盛んなものが衰え、遷り変わる。こと。「元九に与ふる書」は、岡村繁『白氏文集五』(新釈漢文大系。明治書院、二〇〇四年)に収録されており(愛甲弘志執筆)、前掲『唐代の文論』にも訳註がある(二宮美那子執筆)。

(注5) 詩道は、詩の雅正なるありかた。前掲、白居易「元九に与ふる書」に「僕常に詩道の崩壊を痛み」云々と。

(注6) この言い方、(注3)に挙げた元稹の「杜君墓係銘並びに序」に「唐

興り、学官大いに振ふ」と。

(注7) 晩唐・孟棻の『本事詩』高逸篇に「杜、祿山の難に逢ひ、隴蜀に流離し、畢く詩に陳ぶ。見を推して隠に至り、殆ど遺事無し。故に当時号して詩史と為す」と見える。

(注8) 清・仇兆鰲『杜詩詳註』の凡例・杜詩褒貶に「黄魯直は則ち推して詩中の史と為し、羅景倫は則ち推して詩中の經と為し、楊誠齋は則ち推して詩中の聖と為し、王元美は則ち推して詩中の神と為す」と。ちなみに、清・劉鳳詒(一七六一〜一八三〇)『杜工部詩話』卷五にも同様の表現。黄魯直は北宋・黄庭堅(字は魯直。一〇四五〜一一〇五)、楊誠齋は南宋・楊万里(号は誠齋。一一二四〜一二〇六)、羅景倫は南宋・羅大經(字は景倫、王元美は明・王世貞(字は元美。一五二六〜一五九〇)のこと。いずれもその著作にそのものずばり該当する表現を見出せないが、張思綱編注『杜甫詩話六種校注』(齊魯書社、二〇〇二年)には『杜工部詩話』の当該箇所について、黄魯直以下のそれとおぼしき表現や関連する記述を注記する。

(注9) 南宋・朱熹(一一三〇〜一二〇〇)の「詩集伝の序」に「其の忠厚惻怛の心、善を陳べ邪を閉づるの意は、尤も後世能言の士の能く之に及ぶ所に非ず」と。

(注10) 星宿海は、今の青海省にあり、黄河の源流とされた。例えば、『宋史』河渠志一、黄河上に「我が西祖皇帝は学士蒲察篤実に命じて西のかた河源を窮めしめ、始めて其の詳を得。今の西蕃朶甘思の南鄙の星宿海と曰ふ者、其の源なり」と。

(注11) 聚訟は、多くの者があつまつて、てんでに訴える。諸説紛々として定論がないさま。『後漢書』曹褒伝に「礼の家を会するは、名づけて聚訟と為し、互いに疑異を生じて、筆下すことを得ず」とあり、初唐・李賢の注に「言ふところは相争いて定まらざるなり」と。

(注12) 清・黄生の『杜工部詩説』(卷八)に「杜公の七律は当に秋興を以て褒頌と為すべし。乃ち公一生の心神結聚の作る所」と。褒頌は、(注14)参照。なお、「乃ち」以下は、訳注稿(五) 093「秋興八首」其一の詳解にも挙げる。その(注9)も参照。

(注13) 『杜詩詳註』卷十六の「諸將五首」其五に引く、明・郝敬(字は仲興、号は楚望。一五五八〜一六三九)の評に「其の各首縦横開合し、宛も是

れ一章の奏議、一篇の訓誥。三百篇並存して可なり」と。三百篇は、『詩経』に収められている作品の概数で、『詩経』をいう。なお、鄭慶篤等『杜集書目提要』および周采泉『杜集書録』に拠れば、郝敬には『批選杜工部詩』四巻があり、『山草堂集』外篇に収むという。

(注14) 裴頠は、かわごころもの襟。物事の要領に喩える。荀子「勸学篇に「裴頠の領を繋ぐるが若し、五指を誂めて之を頓けば、順ふ者勝けて数ふ可からざるなり」と。

(注15) 明・胡震亨『唐音癸籤』巻三、法微二に「七言律の五言律に於ける、猶ほ七言古の五言古に於けるがごときなり。(中略)七言古に至っては錯綜開闔、頓挫抑揚、古風の変始めて極まる」と。開闔頓挫は、章法や声韻の曲折錯綜の妙をいう。

(注16) 七縦八横は、もと禪語で縦横無尽、自由自在の意(古賀英彦「禪語辞典」、思文閣出版、一九九一年)。南宋・嚴羽『滄浪詩話』詩法にも見える。荒井健訳注『滄浪詩話』(中国文明選13「文学論集」所収、朝日新聞社、一九七二年)参照。なお、『滄浪詩話』には享保十一年(一七二六)刊の和刻本があり、汲古書院刊の『和刻本漢籍隨筆集』第二十一集にその影印を収める。

(注17) 中唐・韓愈(字は退之。七六八〜八二四)の「士を薦む」詩(『韓昌黎集』巻二)に孟郊の詩風について述べた中に「空に横たわって硬語を盤し、妥帖して力排累。敷柔紆餘を肆にし、奮猛海濤を巻く」と。

(注18) 宋末元初の方回『瀛奎律髓』巻十、春日類に「沂に浴し帰を詠ず、其の性情の正を失はざるは、道を知るの君子に在り」と。

(注19) 手を差し伸べて導き助ける。『詩経』陳風・衡門の小序に「故に是の詩を作りて以て其の君を誘掖するなり」とあり、鄭箋に「誘は進なり、掖は扶持なり」と。

(注20) 『孟子』尽心上に「孟子曰く、孔子、東山に登りて魯を小とす。泰山に登りて天下を小とす。故に海に観る者は水を為し難く、聖人の門に遊ぶ者は、言を為し難し。水を観るに術有り、必ず其の瀾を観る」云々と。

(注21) この言い方、前掲「元稹「杜君墓係銘並びに序」に「子美に至って、蓋し所謂上は風騷に薄り、下は沈宋を該し」云々とあるのを意識しよう。風騷は、『詩経』国風と『楚辞』離騷。沈宋は、初唐の沈佺期・宋之問。

その伝については、小川環樹編『唐代の詩人―その傳記』(大修館、一九七五年)参照(福島吉彦執筆)。

(注22) 『論語』雍也篇および顔淵篇に「君子博く文を学びて、之を約するに礼を以てせば、亦た以て畔かざる可きか」と。

(注23) この言い方、『易経』繫辭下伝に「此れを過ぐる以往は、未だ之を知ること或らず」と。

(注24) 物の姿かたちをその通りに写しとる。前掲、元稹の「杜君墓係銘並びに序」に李白の詩について述べた中に「余、其の杜浪縦恣、拘束を擯去し、物象を模写し、楽府歌詩に及ぶを観るに」云々と見える。

(注25) 風景美に耽溺する。前掲、元稹の「杜君墓係銘並びに序」に南朝の宋・齊の詩について述べた中に「蓋し性靈を吟写し、光景に流連するの文なり」と。留連は、流連と同じ。

(注26) ちなみに、訳注稿(一)、石川之襲「杜律詳解序」にも「先生の学は経済を主とし、著述は梁を柱ふ。此の編の若きは、固より緒餘に属す」と。

(注27) 南宋・朱熹の『楚辞集注』八巻、慶元元年(一一九八)、韓侂胄(一一五二〜一二〇七)による道学弾圧、「偽学の禁」(慶元の党禁)が始まり、逆境のなか、慶元四・五年(一一九八・九)頃、六九・七〇歳のときに完成した。小南一郎「楚辞とその注釈者たち」(朋友書店、二〇〇三年)の第五章「朱熹『楚辞』集注編纂」参照。なお、『楚辞集注』には慶安四年(一六五二)刊の和刻本がある。

(注28) 『左伝』文公七年に「今君終ると雖も、言猶ほ耳に在り」と。

(注29) 即世は、世を去る。津阪東陽が没したのは、文政八年(一八二五)である。

(注30) 東屯齋は、夔州にあった東屯の草堂をいう。杜甫は、大暦二年(七六七)秋、瀘西より東屯に居を移した。「瀘西の荆扉自ら且く東屯の茅屋に移居す」詩四首(詳註巻二十)がある。ちなみに、南宋・陸游(字は務観。一一二五〜一二一〇)に「東屯高齋の記」(『渭南文集』巻十七)がある。

なお、古川末喜「杜甫農業詩研究」(知泉書館、二〇〇八年)第四章第三節第二節「稻作の舞台―東屯について」に拠れば、「白帝城の東にある東屯という土地」について、杜甫は「東の屯ほどの意味で用いており、元来は固有名詞ではない」とし、秦州の「東柯谷」、成都の「浣花溪」、夔州の「瀘西」などと同じく、「杜甫の詩に歌われることによって、

後世かえって固有名詞、地名となってしまうもの」という。

〔注31〕 韓愈の作に仮託される「杜工部の墳に題す」詩（初出は、南宋・蔡夢弼『集註草堂杜工部詩外集』酬唱附録）に「天光晴射洞庭の秋、寒玉万頃清光の流れ」と。

〔注32〕 河を渡る筏。目的を達するための手立て。例えば、韓愈「文暢師の北遊を送る」詩（『韓昌黎集』巻二）に「篋中の宝を開張すれば、自ら津筏を得可し」と。

〔注33〕 『孟子』万章下に「其の詩を頌し、其の詩を読む、其の人を知らずして可ならんや。是を以て其の世を論ずるなり」と。

〔注34〕 崇広堂は、文政四年（一八二二）、十代藩主藤堂高兎の代に有造館の支校として伊賀上野に創設。『書経』周官の「功崇惟れ志し、業広惟れ勤む」より取るという。その建物は、表門・講堂・書庫などが現存し、国の史跡に指定されている。

〔注35〕 小谷蕙（一七八八～一八五四）、字は徳孺、号は巢松。伊勢神戸村（今の津市）の人。文政七年（一八二四）、津藩の儒官となり、ついで伊賀崇広堂の講官となった。安政四年（一八五七）刊の『友松存稿』二巻（斎藤拙堂・川村尚迪序）があり、他に詩文稿として『小谷雙松詩文稿』一冊（国会図書館蔵野文庫）および『巢松詩文集』十冊（東北大学図書館蔵野文庫。但し未見）が伝わる。斎藤拙堂に「小谷徳孺墓銘」（『拙堂文集』巻五）がある。

なお、狩野文庫の詩文稿については沖森直三郎「小谷巢松遺事」（『伊賀郷土史研究』第十輯、一九八七年）に紹介がある。また津市教育委員会編『平松樂斎文書27小谷蕙書簡』（二〇〇四年）に「小谷蕙略年譜」が附され、参考文献が挙げられている。

かの孔子は言われなかったであろうか、「詩は以て興す可く、以て観る可く、以て群す可く、以て怨む可し。之を邇くしては父に事へ、之を遠くしては君に事ふ」と。されば『毛詩』の大序に「先王是れを以て、夫婦を経し、孝敬を成し、人倫を厚うし、教化を美にし、風俗を移す」という。上世の詩は、その道を見ることができるが、次第に衰えて六朝の梁・陳に至ると、斯道（雅正な文学伝統）はま

ことに廢れてしまい、いわゆる「風雪と嘲れ、花草を弄ぶ」もので、詩道の累（わざわい）をなさぬことはなかった。唐が興隆すると詩学は大いに振い、そのなかでも杜少陵の詩は、諸家の冠冕（第一人者）であった。識者はかくて推称して「詩史」とみなし、さらに尊んで「詩中の経」とみなした。その忠厚惻怛（まごころ厚く懇切）なること、実事を紀し真実を写し、訓えを永く後世に垂れるに充分であるからではなからうか。そもそも、このようであればこそ、その詩道たるや大なるものがあつた。後世の詩を学ぶ者はさらによろしく杜詩を宗とすべきである。ただ杜詩の全集は、学ぶ者のなかには或いはその浩瀚を苦に病むものがある。必ず先ず杜律を読み、徐々に流れを浜つて、どうかその真の源に至り、星宿の海を觀てほしいものである。しかしながら、旧註は衆説紛紛として解釈が定まらず、学ぶ者を眩惑している。これぞ東陽先生が詳解を撰せられたゆえんである。けだし、その七律に限られたのは、昔人が「秋興八首」を称して「少陵一生の心神が結聚して作られたものだ」といい、さらに「諸將五首」を評して「あたかも一章の奏議、一篇の訓誥で、『詩経』三百篇と并存してよい」といつているからである。いやしくもこれらの諸篇を読めば、杜律においてもはやその要領を得たものである。それに詩法は七律より嚴格なものではなく、起結照応、開闔頓挫、一つとして缺くことができない。これはとりもなおさず古文の法でもある。もしもこれに依つてその方法に通じたならば、近体はむろんのこと、これを古風にそのまま適用しても、奔放自在、海水を巻き上げる勢いで、その正しい性情のありかを失わない。されば先生は特にこれを註し、学ぶ者を導き手助けしようと思われたからである。いったい水を觀るには必ずその波瀾を見る。学ぶ者がよくこの編をつらと見て、少陵の詩が上は『詩経』三百篇に迫るゆえんを会得すれば、その興觀群怨（喚起力、觀察力、教育力、批判力）いう点で、もはや自ら道にそむくことはない。それ以上の

段階となると、その全集を究めてかの決渚（広々とした水面）に遊べば、やはり以て詩道の神化（神妙の境地）を知ることができようか。しかしながら世間にはこれを捨て置いて、物の姿かたちを模写し、風景美に感溺することを詩の役割だと心得る輩（やから）がいるが、見識が狭く浅はかだ。先生は経史を博綜され、著作撰述の書はもとより富んでおられる。このような仕事は、まことに餘技なのである。

さりながらかつておっしゃるには、「これは朱子が『楚辞』に註したのになぞらえた」と。その趣旨はどうして浅薄卑近なものであるうか。先生は私に命じて序文を綴らせたが、その時の言葉がまだ耳に残っている。されど不幸にしてこの世を去られ、はやもう一紀十二年になろうとしている。この編の版刻がちょうど完成し、今昔の感が胸に迫らずにはおかない。そもそも少陵の生きた時代は、今を去ること遙か遠く、浣花草堂や東屯の故居は、その遺跡を實際に訪れ偲ぶことができない。しかしながらその詩の流伝すること、天上の光が遍く射して晴れわたるように、百代の後、万里の外にあって、なお高風を仰ぎ芳徽（うるわしさ）を汲みとることができ。いやしくもこの編を観る者は、これに心感することがあるだろう。さればこそ時世を論ずるに足る。どうしてただ詩道を究める津筏（てだて）となすだけのことであろうか。

天保乙未七月九日

門人伊賀崇広堂講官小谷薫謹んで識す

* * *

前稿補訂

『杜律詳解』訳注稿(五)（「文化情報学部紀要」第四巻）

127頁上段18行目 けだし設えたものであろう。↓けだし拾遺の設えたものであろう。

128頁下段22行目 谷口真由美↓谷口真由実

129頁下段27行目

130頁上段1行目

144頁上段17行目

『杜律詳解』訳注稿(七)（「文化情報学部紀要」第六巻）

150頁下段8行目

『杜律詳解』訳注稿(八)（「文化情報学部紀要」第七巻）

157頁下段20行目

159頁上段9行目

159頁上段11行目

159頁上段15行目

159頁上段17行目

165頁下段22行目

ともに「刊は日目に作る」と注する。の後に追加。なお、南宋・吳若「杜工部集後記」に「〔刊〕及び〔一〕に作る」と称する者は、黄魯直（庭堅。一〇四五～一一〇五）・見以道（説之。一〇五九～一一二九）の諸本なり」と。

《何人》が《錯り認》めて《愁》の尽きる《日》とするのかわからない、↓いったい《何人》が《錯り認》めて《愁》の尽きる《日》とするのか、

「詩を作る場合、↓「詩を作り典拠を用いる場合、

『杜律詳解』訳注稿(七)（「文化情報学部紀要」第六巻）

『分類』（巻二、別送）↓『分類』（巻二、送別）

『杜律詳解』訳注稿(八)（「文化情報学部紀要」第七巻）

初唐・沈佺期の「回波詞」（『全唐詩』巻九十七）に、次のように見える。↓北宋・胡仔『苕溪漁隱叢話』前集巻二十三、借対および南宋・魏慶之『詩人玉屑』巻七、借対に挙げる。これは「回波詞」と題する作（『全唐詩』巻九十七）で、全詩は次のとおり。

『五雜俎』↓『五雜俎』

『五雜俎』↓『五雜俎』

『五雜俎』↓『五雜俎』

『五雜俎』↓『五雜俎』

（注22）に、以下の文章を追加。ちなみに、伊藤東涯『秉燭譚』巻五「和盤ノコト」に「近世ノ俗語ニ和盤ト云コトアリ。（中略）畢竟器物食事ナトソノ台盤トモニ持出ルト云コトニテ淵底ノコラスウチアラハスコトナリ」云々と。

『杜律詳解』訳注稿(九)（「文化情報学部紀要」第八巻）

96頁上段6行目

王燦↓王粲

『杜律詳解』訳注稿(十)（「文化情報学部紀要」第九巻第一号）

196頁下段21行目

（注1）に、以下の文章を追加。《雲南》の《南》は、《安》の誤り。ちなみに、「諸將」詩を永泰元年（七六五）の作とするのは南宋・黄鶴の説に基づくもので、趙次公は大暦元年（七六六）夔州での作とし、仇兆鰲の詳註（巻十六）もそれに拠る。四川省文史研究館『杜甫年譜』も同様。

206 頁下段 13 行目
 (注 3) に、以下の文章を追加。明・王圻『統文獻通考』卷二十三、征權考、塩法上も同様。

223 頁下段 23 行目
 (準擬) したが、↓(準擬) (予め用意) したが、

228 頁下段 8 行目
 (注 106) に追加。↓(注 103) に追加。

『杜律詳解』訳注稿(註) (『文化情報学部紀要』第十卷)

134 頁上段 27 行目
 秋興を以て裴頠と為す。↓秋興を以て裴頠と為すべし。
 (注 19) に、以下の文章を追加。なお、水経云々は、もともと宋・陸佃の『埤雅』一に挙げる。このこと、吉川幸次郎著・興膳宏編『杜甫詩注』第七冊(岩波書店、二〇一三年)の『秦州雜詩二十首』其一の語釈参照。

149 頁上段 22 行目
 『杜律詳解』訳注稿(註) (『文化情報学部紀要』第十一卷)
 『分類』(卷二、別送) ↓『分類』(卷二、送別)

179 頁下段 6 行目
 『杜律詳解』訳注稿(註) (『文化情報学部紀要』第十二卷)
 『分類』(卷二、別送) ↓『分類』(卷二、送別)

128 頁上段 19 行目
 遣我雙鯉魚之意 ↓ 遣我雙鯉魚之意

128 頁下段 8 行目
 遣我雙鯉魚 ↓ 遣我雙鯉魚

128 頁下段 9 行目
 『文選』卷二十八 ↓ 『文選』卷二十七

128 頁下段 10 行目
 我に双鯉魚を贈る。↓我に双鯉魚を遺る。

128 頁下段 10 行目
 中に尺素有。↓中に尺素の書有り。

130 頁上段 21 行目
 陝西省 ↓ 陝西省

130 頁上段 22 行目
 陝西省 ↓ 陝西省

135 頁下段 18 行目
 その声にかたどる ↓ その声をかたどる

137 頁上段 6 行目
 志願畢はれり矣 ↓ 志願畢はれり矣

137 頁上段 8 行目
 今日の賢能に如かざるなり云々と。の後に追加。(『潦倒』

の語について、谷口真由実『杜甫の詩的葛藤と社会意識』(汲古書院、二〇一三年) 第一編第四章「詩語『潦倒』にみる表現の重層性」に、『文選集注』に『(文選) 抄』に曰く、潦倒は長緩の貌なり」とあるのを挙げて、「挙動のゆっくりしたさまである」とし、「こでは更に政治的社会的現実し自己の生との間のへただたりを意識しつつ、自己の生き方を自負に満ちて突き付けており、反語的ニュアンスを帯びている」という。

153 頁下段 2 行目
 ソットヌキハンシテミル ↓ ソットヌキハナシテミル

156 頁下段 13 行目
 氷を賜わる列に ↓ 氷を賜わる列に

161 頁下段 16 行目
 『分類』(卷二、別送) ↓ 『分類』(卷二、送別)

164 頁下段 27 行目
 (注 10) に追加。字音はサク。

167 頁上段 24 行目
 ちなみにの下に追加。伊藤東涯『乗燭譚』卷五「欽准ノコト」に「欽准ト云コト尤多シ。コノ方ニテ勅許ナト云フ。又ハ公義ヨリ卸免ナト云カコトシ」とあり、

167 頁下段 19 行目
 二〇一四・九・三〇 ↓ 二〇一四・九・三〇

167 頁下段 29 行目
 二〇一四・二・九 ↓ 二〇一四・二・九

その他、訳注稿(註)の 006「鄭十八虔台州の司戸参军に貶せらるるを送る」詩に見える鄭虔については、先年出土した盧季長「大唐の故の著作郎・貶台州司戸参军榮陽の鄭府君並びに瑯琊の王氏の墓誌銘並びに序」(『全唐文補遺』(千唐誌齋新藏專輯) 二四九—五頁。三秦出版社、二〇〇六年) に、弱冠にして秀才に挙げられ、進士科に及第。乾元二年(七五九) 九月廿五日、台州の官舎で病没。享年六十九とある。とすれば生年は則天武后の天授二年(六九一) で、杜甫より二十一年長となる。このこと、胡可先「新出土『鄭虔墓誌』考論」兼及鄭虔与杜甫の關係」(『杜甫研究季刊』二〇〇八年第一期) 参照。

また訳注稿(註)の 069「野人贈櫻桃」詩の詳解に「真に春蠶繭を結ぶ、物に随って形を肖せるなり」というのは、明・江盈科(一五五六—一六〇五) の『雪濤詩評』(『說郭統』(易三十四) に「秦州以後の詩、突元宏肆にして逾かに昔作に異なれり。意有りて格を換ふるに非ず。蜀中の山水、自らは挺特奇崛にして独り能く景を象り神を伝ふ。人をして之を讀ましむれば、山川歴落、居然として眼前に在り。所謂真に春蠶繭を結ぶ、物に随って形を肖せるなり。乃ち真詩人、真手筆為るなり」とあるのに拠る。江盈科の詩評は、詳註卷八の「青陽峡」詩および「唐宋詩醇」卷十一の「劍門」詩にもこれを挙げる。(逾字を適に作る。さらに訳注稿(註)の 116「九日二首」其二の結句「潦倒新停濁酒杯」の句について、詳解には「杯を停むは、酒を止めるなり」と注するが、「飲みかけた杯を一旦とどめる」意とすべきこと、森瀬壽三『唐詩新攷』(関西大学出版部、一九九八年) の第二章第四節「杜甫「登高」詩の問題点」にこれを説く。また谷口真由実、前掲論文にも指摘がある。

なお、訳注稿(註)の誤記については、澤崎久和・杉下元明・高橋良行・森博行の各氏からそれぞれ御教示いただいた。

(二〇一三・九・二九初稿)
(二〇一三・一二・一五補筆)

にのみや・としひろ／文化情報学部教授
E-mail : minomiya@sugiyama-u.ac.jp